

平成 26 年度指定
文部科学省スーパーグローバルハイスクール



「先進的な総合学科を活かした持続可能な アセアン社会を創るグローバル人材の育成」

(研究報告書 第5年次)

最終報告書



平成 3 1 年 3 月

筑波大学附属坂戸高等学校

はじめに

全国から総合学科および SGH 校を中心とする教員が多数参加し、第 5 回 SGH 研究大会および第 22 回総合学科研究大会が、平成 31 年 2 月 15 日、16 日、本校にて盛況の内に開催された。研究大会のテーマとして「グローバル人材育成の先にあるもの～SGH 5 年間の成果の振り返りと、総合学科+IB で今後目指すもの～」を掲げた。本年度が、SGH 5 年間の最終年度であるため、この 5 年間を振り返り、来年度以降の学校運営について、学校がどのような人材育成のために、どのような教育活動を行っていくか、具体的に提示し、グローバル人材育成の先にあるものを提案するために、筑坂が取り組んだ、この 1 年間について報告させていただいた。基調講演では、民間の会社社長であるアイ・シー・ネット株式会社代表取締役多田盛弘氏に、「企業と高等学校の連携で拓く日本の教育の未来」と題してご講演いただいた。さらに、分科会「総合学科と SGH によるグローバル人材の育成」では、SGH 開発科目の公開授業の振り返りおよび、学校全体で国際教育に取り組んでいくための議論を行なった。

一昨年度、文部科学省より平成 26 年度指定校の中間評価が出され、本校は、SGH 開発科目や「課題研究」を軸においた教育課程の開発等の取り組みに対して高い評価をいただいた。5 年目になる今年度は、引き続いて、国境や世代を超えて取り組むことができる政策アジェンダである、国連の開発目標 SDGs をテーマとして取り上げて、平成 30 年 11 月 8 日には、第 7 回高校生国際 ESD シンポジウムを筑波大学東京キャンパスにて開催した。海外からは、インドネシア、タイ、フィリピンからも多数の生徒たちが参加し、その生徒たちがさまざまな活動について発表した。また、今年度も、昨年度から始めた取り組みとして「分科会」を開催した。この日、初めて出会った日本全国から集まった SGH 校や東南アジアの高校生たちが、活発に意見交換し、広範な議論を繰り広げていた。

本校は一昨年 2 月に国際バカロレア機構より国際バカロレアディプロマプログラム (IBDP) の認定を受け、本年度、初めての IB 生が入学した。IB 生は、SG クラスに所属し、SGH 開発科目である「グローバルライフ」などを受講しつつ、本校のすべての生徒がグローバル・リーダーになる可能性があることを理解し、海外の高校生と協働して問題解決に向かい、その課題の解決のための活動を実施できるような教育を受けている。

中間評価から 2 年がたち、本校は、さらに校内研修等を通じて、一丸となって SGH 事業に取り組んだことにより、生徒たちのめざましい成長を目の当たりにすることができた。この 5 年間の成果をふまえ、本校は、今後も IB という国際標準のプログラムを取り入れながら、グローバル人材育成という目標に向かって邁進していく使命があるものと確信する次第である。

(校長 田村憲司)

目 次

はじめに	1
第 1 部 平成 30 年度 SGH 研究開発完了報告	3
第 2 部 実施報告書（本文）	23
I 研究開発の概要および平成 30 年度の計画	23
1 研究開発全体の概要	
2 平成 30 年度の開発計画	
3 SGH の開発仮説に基づく課題研究をコアにした 3 年間の教育課程の編成図	
II SGH における本校の特徴的な取り組み	29
1 インドネシアの高校生との協働活動を中心とした国際フィールドワーク 第 2 回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング@ジャカルタ 写真による振り返り	
2 第 7 回高校生国際 ESD シンポジウム In 東京 第 4 回全国 SGH 校生徒成果発表会	
III 外部機関・大学等との連携	59
1 筑波大学および海外大学との連携	
2 インドネシア政府機関および国際機関との連携	
3 グローバル企業および NPO 等との連携	
IV 平成 29 年度 SGH 関連科目及び諸活動の報告	63
1 SGH 開発科目 グローバルライフ（1 年次対象）	
2 SGH 開発科目 インドネシア語（全学年対象）	
3 SGH 開発科目 T-GAP（2 年次対象）	
4 SGH 重点科目 国際社会（2 年次対象）	
5 SG クラスの様子	
6 日本語支援活動の状況	
V 平成 30 年度評価活動報告	97
1 平成 30 年度目標設定シートに対する評価	
2 進路状況	
3 英語資格取得状況	
VI SGH 指定 5 年まとめおよび指定終了後の展開	111
第 3 部 関係資料（平成 30 年度教育課程表、雑誌等掲載）	119
平成 30 年度研究開発計画	
平成 30 年度目標設定シート	
新聞掲載記事	
平成 30 年度 国際教育・ESD 活動一覧	
ビジュアル資料	

第 1 部 平成 3 0 年度 S G H 研究開発完了報告

(別紙様式3)

平成31年 3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	埼玉県坂戸市千代田1-24-1
管理機関名	筑波大学附属学校教育局
代表者名	教育長 茂呂 雄二 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年 4月 1日(契約締結日)～平成31年 3月 29日

2 指定校名

学校名 筑波大学附属坂戸高等学校

学校長名 田村 憲司

3 研究開発名

先進的な総合学科を活かした持続可能なアセアン社会を創るグローバル人材の育成

4 研究開発概要

平成30年度の研究開発は、開発の最終年次であり、1)5年間の検証と次の5年間の行動計画の作成、2)開発成果の全国への普及・発信の2点を中心に実施した。1)では、1年次「産業社会と人間(総合学科の原則履修科目)」、「グローバルライフ(地球市民性の醸成を目指した家庭科科目)」、2年次「T-GAP(グローバル課題を学び、実際にアクションプランを作成し、課題解決のためのソーシャルアクションをグループで実行する科目)」、3年次「卒業研究(個人でテーマを設定し課題研究に取り組む)」の、本校のグローバル人材育成のための3年間の課題研究を中心としたカリキュラムの柱がほぼ完成した。2)の開発成果の全国への普及・発信では、本校が主催し実施している「高校生国際ESDシンポジウム」「全国SGH校生徒成果発表会」、インドネシアにおける「インドネシア日本高校生SDGsミーティング」を中心に普及・発信を行った。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会の開催								8日				
高校生国際ESDシンポジウムの開催								8日				
SGH 調整委員会			19日				10日		5日		20日	

(2) 実績の説明

運営指導委員会の開催

平成30年11月8日(木)に平成30年度第1回会議が開催された。①坂戸SGHの進捗状況および来年度の活動計画、②事業評価について、③平成31年の事業計画について報告を行い、次年度以降、オープンプラットフォーム（坂戸高校が核となり多くのステークホルダーをつなげる）を実現するため、附属坂戸高校がコアになり筑坂をとおした国際支援を行っていただきたい。期待しているとの意見及び提言があった。また、同日開催された「第4回全国SGH校生徒成果発表会・第7回高校生国際ESDシンポジウム」について参加された各委員から、大変素晴らしい企画・発表であった、SGHの指定が外れても継続して行ってほしいなど講評をいただいた。各委員からこれまでの取組に対する意見、今後の取組への提言が出された。

高校生国際ESDシンポジウムの開催による成果の普及

平成30年11月8日(木)に、筑波大学附属坂戸高等学校主催でシンポジウムを開催する際に、SGH連絡協議会等でも使用する、筑波大学東京キャンパスを会場に実施した。交通の便もよく、他のSGH校も参加しやすいため、例年、会場の提供を行っている。また、企業との連携の支援も行い、企業からの問い合わせや物資の移動などの支援を行った。

また、海外から高校生や引率教員を招聘する際も、とくに管理機関から予算的措置を行い、国際ESDシンポジウムが開催できるように支援を行った。

以上の支援により、海外校6校、SGH校14校、SGH以外の高校4校、6つの国内・国外企業機関、総参加人数198名の規模で実施することができた。また、日本インドネシア国交樹立60周年記念事業に認定され、駐日インドネシア大使館から環境林業部および教育部から臨席があり、祝辞を頂いた。

SGH調整委員会の開催

幹事校である附属高等学校と合同で、SGHに関する両校の進捗状況・情報共有、全国フォーラム、SGH連絡協議会・連絡会、SGH指定指定終了後の在り方等について、検討や助言、支援等を行った。

特に、SGHの各活動の効果測定に関して、管理機関と幹事校の附属高校の支援を得ることで効果的に測定を行うことが可能となった。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間(契約日～平成31年3月29日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
5年間の成果の検証と今後の計画策定		インドネシア政府との成果検証			卒業生へのインタビュー		校内で検証活動		アセアン各国との検証および今後の計画策定			報告書および今後の行動計画策定
各開発単位の成果の検証と普及および校内体制の整備	毎年実施してきた生徒・教員・保護者対象アンケートの実施と5年間の検証、他の小中高校への普及活動、IBとの分担											
SG入試の検証と改善	生徒募集活動・新入生アンケート 国内外学校説明会					広報・周知				入試実施		アンケート
国際フィールドワークの実施と検証	渡航前学習・昨年度参加者からのレビュー・合宿				渡航	文化祭	シンポジウムでの発表		過去5年間の参加者へのレビュー		研究大会	
「インドネシア語講座」の実施と検証	授業実施			振り返り		特講	授業実施			検定試験		振り返り
第7回高校生国際ESDシンポジウム・第4回全国SGH校生徒成果発表会	H30年SGISの立ち上げ・シンポジウムの計画立案・アセアン各国への周知				SGH校・ユネスコスクール等への広報			実施	報告書作成・成果報告			
第2回インドネシア日本高校生SDGsミーティング	参加校の募集 インドネシア側と調整				実施				報告書作成・成果報告			
課題研究と連動した英語教育の開発	英語科、情報科、各教科で合同で検討会議を継続して開催する									研究大会研究授業		
「グローバルライフ」の実施と検証	アンケート	1学期		振り返り			2学期		振り返り		3学期	アンケート
「1年次海外校外学習」の開発と実践	前年度の成果引き継ぎ				現地との交渉		事前学習					渡航
「2年次T-GAP」の開発と実践	授業実施			振り返り		特講	授業実施(2月の研究大会で成果発表)					振り返り
筑波大学との高大接続プログラムの共同研究	管理機関、筑波大学、国際協定締結校と連携して年間を通して実施											

(2) 実績の説明

ここでは、本校 SGH の主たる開発単位である 1) SG 入試、2) 国際フィールドワーク、3) インドネシア語講座、4) 高校生国際 ESD シンポジウム・全国 SGH 校生徒成果発表会、5) グローバルライフの平成 30 年度における実績について説明し、5 年間の成果検証やまとめについては、「8 5 年間の研究開発を終えて」に記す。

まず、**1) の SG 入試**は、本年度（平成 31 年度入試）で 4 回目を迎えた。平成 27 年度入試から通常のⅠ型、帰国生や外国籍の生徒を対象にしたⅡ型、そして昨年度から開始したⅢ型（IB 日本語 DP 履修生徒）を実施し、定員 40 名に対し合計で 94 名の受験者となり、安定して募集活動ができています。来年以降、在外の日本人学校への生徒募集活動をより強化し、幅広い人材の確保を実施していく計画である。

2) の「国際フィールドワーク」は、本年も書類による第 1 次審査、面接（英語によるプレゼンテーション質疑応答も含む）による 2 次審査を経て 7 名を選抜し実施した。また、本年度はあらたに、「第 2 回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング」への参加生徒も公募し、同じく書類によ

る第1次審査、面接（英語によるプレゼンテーション質疑応答も含む）による2次審査を経て2名を選抜して派遣を行った。国際連携校であるボゴール農科大学附属高校から7名、インドネシア政府環境林業省附属林業高等学校からも7名合計21名で、西ジャワ州グヌングデパンランゴ国立公園およびその周辺部の農村とくにサロングゲ村をベースに合宿形式で実施した。これまで同様、21名を1班のなかに必ず3校のメンバーが入るようにし、環境教育班、地域開発班、エコツーリズム班の3班にわけて実施した。合宿形式の国際フィールドワークも3年目に入り、内容がさらに充実した。まず、現地協力機関（国立公園職員、地元婦人会（名称：PKK）、サロングゲ村）の理解や期待が深まり、現地からの提案も取り入れながらプログラム開発を実施した。

環境教育班の活動は小学校だけではなく中学校での実施依頼もあり、活動の範囲が広がった。地域開発班は、昨年度、本校の生徒が紹介し製造を開始した、森林保全に有効な Non-timber-product（非木材産品）であるバナナペーパーを地元婦人会が継続的に生産を行い、地元の特産品として活用されていた。また、地元のプロモーションビデオに、このバナナペーパーが登場するなど、SGHの当初では予想されなかった成果があがった。エコツーリズム班は、あらたに地元農家のはじめた「農家民泊：ホームステイ」を体験し、その成果も含めて、サロングゲ村の地域発展の一助になるように、3か国語（日本語、英語、インドネシア語）によるガイドブックを作製することができた。このガイドブックは、印刷版だけではなく、学校ホームページ上からPDF版をダウンロードできるようにする予定である。

2018年は、日本とインドネシアが国交を樹立して60年の記念すべき年であったため、昨年からは国際フィールドワーク開催時期と合わせて実施している「インドネシア日本高校生SDGsミーティング」を、外務省から「日本インドネシア国交樹立60周年記念事業」に認定していただき実施した。これには、日本から本校と、中部大学春日丘高等学校、インドネシアから6校、参加生徒138名、参加教員31名で実施することができ、サロングゲ村における小中学校における環境教育ワークショップの実践も含め、インドネシアの学校でSGHの成果普及を図ることができた。

3) のインドネシア語講座は、本校の学校設定教科の「国際科」の学校設定科目として開発をすすめた。昨年度まで、簡単な挨拶や自己紹介、現地でのコミュニケーションが最低限とれることを目標にし「インドネシア語検定E級合格」を目指すレベルとした「インドネシア語Ⅰ（初級）」、買い物や簡単な質問ができEメールやSNSなどで短い文章のやりとりができることを目標とし最終的には「インドネシア語検定D級合格」を目指す「インドネシア語Ⅱ（初中級）」を開講したが、教員の担当コマ数の影響で、「インドネシア語Ⅰ」のみ開発をすすめた。担当者は、本校国際科教員でインドネシアでの2年間の業務経験がある教員1名が担当し、立教大学に留学しているインドネシア人留学生1名を海外交流アドバイザーとして雇用し、授業開発をすすめた。月曜日7時間目（帰りのSHRの後、3時50分から4時40分）に開講し、全学年対象の科目として開講した。「インドネシア語Ⅰ」の履修者は20名であった。なお、2018年10月からインドネシア人英語教師を常勤雇用しており、2019年度は本校の国際科教員と新たに雇用したインドネシア人教師で運営していく予定である。

4) の高校生国際ESDシンポジウム・全国SGH校生徒成果発表会は、SGHの成果普及とSGH校間の課題研究ベースの交流を促進するために実施しているものである。本年度は、2018年11月8日（木）に、筑波大学東京キャンパスを会場に実施した。海外校6校、SGH校14校、SGH以外的高校4校、6つの国内・国外企業機関、総参加人数198名の規模で実施することができた。メインテーマを「SDGs×High School Students – What will you do to make tomorrow's world better. –」とすることで、各校の課題研究テーマを、SDGsを共通言語にすることで、わかりやすく整理する

ことができた。これは、海外校が参加する国際シンポジウムにも非常に有効であり、今後 SDGs を軸にした学習活動が、国境を越えて広まっていくことが予想された。

生徒主導で昨年から実施している分科会も、（１）「SDGs と私たちの生活」（SDGs と私たちの日常生活が、いかに密接に関わっているか、グループに分かれて議論する。そのことを通じて、SDGs を遠い世界の政策目標ではなく、自分事としてとらえていくことを目的とする）、（２）「SDGs and Our Daily Life」 offered in English.（分科会（１）の内容を英語で実施する）、（３）「生徒版！SGH 評価委員会」（今年度で SGH 指定第一期校は、５年間の研究開発期間を終えるため、SGH 校で学ぶ生徒が、自らの学習体験を振り返り、SGH の問題点や改善点を浮き彫りにし、NEW SGH を高校生の視点から文部科学省に提案する）、（４）分科会④「水問題と SDG s」（関東地方 ESD 活動支援センターと静岡県立三島北高等学校の共同企画による、「水」をキーワードにした SDGs ワークショップ）、そして（５）「『森林保全』という難問に挑戦する」（インドネシア共和国環境林業省の国立公園の現役職員を招聘し、森林保全の最前線で何が行われているか、そして森林保全に向けて私たちができることとは何かを考える）の５テーマを設定し実施することができた。

５）のグローバルライフは、１年生全員 160 名を対象に実施しているものである。複数教科の教員で授業を運営しており、本年度は「食」「衣」の分野を家庭科教員が、「共生」分野を地歴公民科教員が、「生活とグローバル課題」を農業科教員が担当し実施した。授業の事前（４月）事後（２月）に実施した、国際的資質調査（管理機関作成）および自由式記述調査による調査において、頻出語の比較を行い、特徴として「自分」が事前 34 に対し、事後 59 で第 1 位に、本校独自科目である 2 年次のソーシャルアクション科目である「T-GAP」がランク外（上位 20 位）から第 4 位で 33 回の出現回数となった。この結果は、グローバルライフの結果だけとは限らないが、グローバルな課題を自分事とする当事者性を向上させ、2 年生において自ら問題解決をすることを意識づけさせてきたグローバルライフの効果があったことを裏付けるものであると言える。

7 目標の進捗状況、成果、評価

平成 26 年度指定校を対象に実施された本校に対する SGH 中間評価は、１）総合学科の学校の特性を生かし、管理機関である筑波大学との緊密な連携により、幅広い取り組みが行われている点が評価できる、２）今までの総合学科における課題研究を中心とした選択科目に、本取組の「グローバルライフ」や「国際フィールドワーク」などが加わり、充実した「課題研究」を軸においた教育課程の開発となっている点が評価できる、３）「高校生国際 ESD シンポジウム」などは、他校と共同で実施しており評価できるであり「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成が可能と判断される」というものであり、中間評価後も、毎年、振り返りや改善を重ねながら、これまでの研究開発を継続してきた。6 に記載した 1）SG 入試、２）国際フィールドワーク、３）インドネシア語講座、４）高校生国際 ESD シンポジウム・全国 SGH 校生徒成果発表会、５）グローバルライフを軸に進捗状況、成果、評価をまとめる。

１）の SG 入試は、学校の仕組みを大きく変えるもので SGH 事業のなかでも学校に与える影響は大きなものであった。これまで総合科学科 4 クラスであったものを、これまでの総合学科をベースに主に地域におけるグローバル人材育成を主眼とする IG クラス（インテグレイティッドグローバルクラス）3 クラス、および総合学科をベースにししながら将来のグローバルリーダー育成を主眼とする SG クラス（スーパーグローバルクラス）1 クラスを設定した。SG 入試は、SG クラスの生徒を募集する入試制度である。設定に際しては、校内でも大きな議論となり当初は反対する

教員も多かったが、現在では、SG クラスだけではなく IG クラスにも外国籍生徒や帰国生の生徒数も増加し、SG クラスを軸に、IG クラスもグローバル化が進んだ。生徒募集も、当初は新しい入試制度でどれほどの生徒が集まるか不安も抱えていたが、現状では平均して 2 倍程度の倍率を維持しており、研究開発の成果といえる。

2) の国際フィールドワークは、本校がグローバル人材育成の際の高校生の課題として挙げた「実践的な国際現場での経験不足」を解決し、グローバルリアリティーに直面しつつ、インドネシアの高校生とともに学び解決活動を実践するために、グローバルリーダーに必要な「国際協働力」を育成するために開発したものである。国際フィールドワークは、国内外で評価が高く、毎年のように教育関係雑誌や学会等で実践報告を行った（例：建元喜寿・吉田賢一・今野良祐 グローバル社会における高校生の協働力育成のための国際フィールドワークプログラムの開発 — インドネシア西ジャワ州の国立公園およびその周辺の農村地域を舞台に — (Development of “International Field Work” to Enhance Collaborative Capabilities among High School Students in Global Society: At the National Park and Surrounding Rural Areas in West Java, Indonesia) 、日本環境教育学会関東支部年報第 12 号、pp.21-26 や、「SDGs に対応した協働型国際フィールドワークの開発」国立大学附属学校の先進教育国際連携校、教育シリーズ Vol.2 、月刊『コロンブス』編集部編、pp.38-41) 。

インドネシアの連携校も、すでに 8 月の国際フィールドワークは校内の重要な行事として位置づけられ、毎年、各校で選抜を行ったうえで、参加生徒を決定している。さらに、協力機関の理解もすすみ、この 5 年間で十分な研究開発になったといえる。平成 30 年度は、管理機関が開発した「国際的資質調査票」を、英語およびインドネシア語に翻訳し、国際フィールドワークに参加したインドネシア側の生徒に対しても質問紙調査を実施した。現在、まだ分析中であるが、自国文化や他国理解に関する項目で日本およびインドネシアの高校生ともに、フィールドワーク後に高まる傾向がみられており、国際フィールドワークの効果が両国の高校生で現れていると考えられた。

国際フィールドワークとあわせて開催をはじめた「インドネシア日本 SDGs ミーティング」は、口頭発表とあわせて、ポスターによる発表も充実させた。また、中部大学春日丘高等学校のインドネシアでの連携校と、本校の連携校も参加し、両校のリソースを共有する形で会を運営することができた。また、2017 年度、本校がイオン 1 %クラブの高校生アンバサダー事業に採択され、その際に交流の始まったウムルクロ高等学校も、あらたに本ミーティングに参加した。本校の SGH 事業は幅広い活動が中間評価でも評価されている。中間評価後にも、さらに幅の広い活動となっており、さらに、その幅の広さを日本およびインドネシアの高等学校をつなぐ形で生かすことができおり日イのプラットフォームスクールとしても機能することができた。

国際フィールドワーク参加者の追跡調査では、初年度参加者（2019 年 3 月に大学を卒業する年齢）のうち 2 名が、国際交流基金の日本語パートナーズ事業でインドネシアおよびタイに派遣または派遣が決定している。また毎年、1 ～ 2 名が高校時代にインドネシアに高校時代に 1 年間留学しており、フィリピンに 1 年留学した生徒も出た。もともと、海外での活動に興味関心が高い生徒が国際フィールドワークに参加している可能性も否定できないが、3 週間という期間をインドネシアの高校生と共通課題である森林保全をテーマにともに学び活動することで、インドネシアへの興味が増大し、高校時代の 1 年間をインドネシアで過ごすという大きな決断を促していることは確実であるといえる。この国際フィールドワークのスキームを他国でも実施することができれば、日本の高校生のグローバル化を大きく進展させるものであると確信している。

3) のインドネシア語講座は、この 5 年間で 1 年間授業を運営していく指導計画も確立することができ、高等学校におけるインドネシア語の授業を作ることができた。目標としていたインドネシア語 E 級および D 級講座の合格者を出すことができた。

さらに、高校時代に 1 年間インドネシア留学を行った生徒は、C 級に合格する生徒もでている。週 1 回の授業では、現地調査活動ができるほどの能力向上をさせることはできないが、高校での週 1 回の経験が、新たな言語習得へむけた生徒のモチベーションを高めることは認められた。なお、2018 年 10 月より、イギリスで英語教育に関する大学院を修了しているインドネシア人教員を英語教師として採用している。来年度以降は、本校の国際科教員とインドネシア人教員が協力しあって、授業を継続的に運営していくこととなった。基本的には、放課後に全学年が履修可能な選択科目として運営していく計画である。

4) の高校生国際 ESD シンポジウム・全国 SGH 校生徒成果発表会は、筑波大学東京キャンパスの大教室を会場に、毎年、200 席の教室が満員になる状況で開催することができた。とくに、SGH 指定前から実施していた、高校生国際 ESD シンポジウムを本校と国際連携校だけで実施するかたちから、申請時には想定していなかったが、SGH 指定 2 年目から SGH 校にも参加を呼びかけ新たに「全国 SGH 校生徒成果発表会」として、開催することとした。当初は参加校が集まるか不安であったが、毎年、全国から SGH が参加する大会に発展させることができた。さらに、課題研究の発表テーマを、SDGs の何番（複数可）に該当するか、発表のなかで提示してもらうことで、どのようなグローバル課題の解決に貢献できる研究であるかを可視化できた。この手法は、海外の高校生と研究交流を実施する際にも有効であり、SDGs を取り入れることは国境を越えた学びの際に大変有効であることが分かった。

平成 31 年度からも、管理機関の支援のもと本校の国際教育活動の中核として、「高校生国際 ESD シンポジウム」は実施していく計画である。国立大学附属学校の責務を果たしていくうえで、このような国内外の高校生が集い課題研究の成果をベースとした交流の場を継続的に提供していく効果は非常に高いといえる。

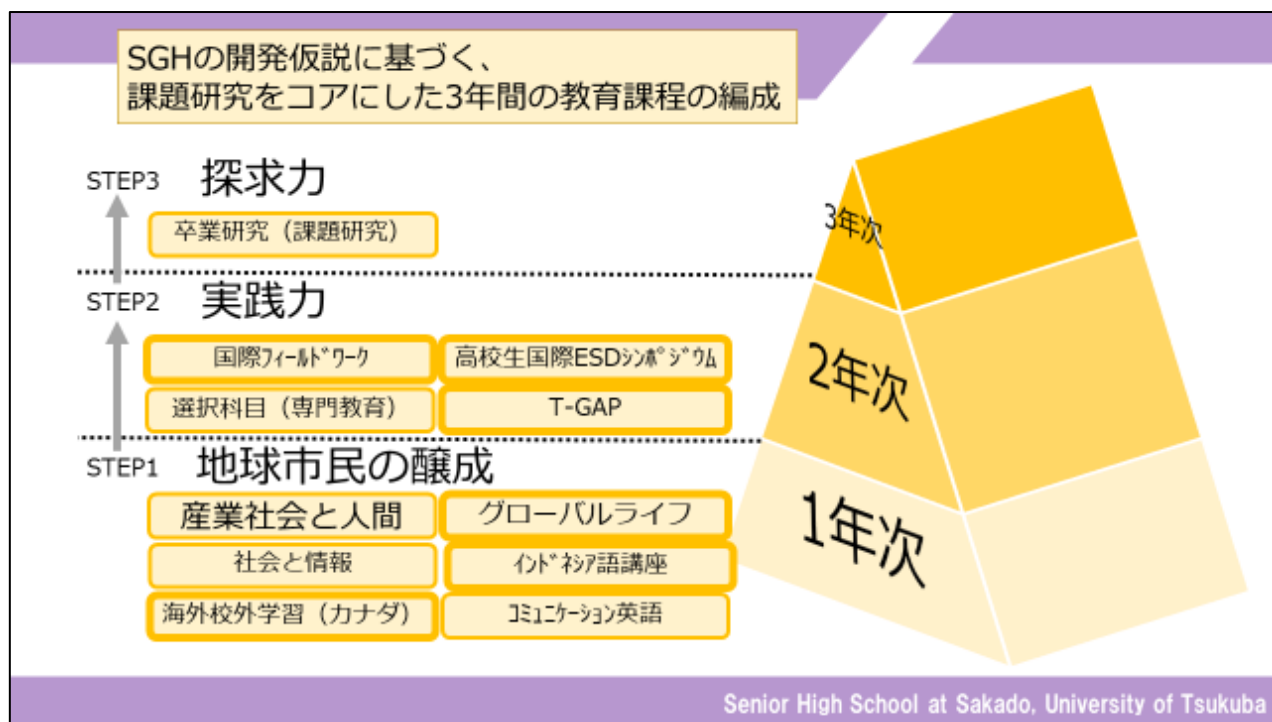
最後に 5) のグローバルライフであるが、日本の国際教育で課題になっているグローバル課題に対する当事者性の欠如やリアリティーの低さを改善するために有効であることが示唆された。日常生活が、すでに国際的なつながり無くしては成り立たないことを、家庭科の視点つまりは、日々の暮らしに必要な「食」と「衣料」の視点から理解し、さらに、外国人労働者問題に代表される「共生社会」、そして「パーム油」や「紙」といった通常、海外の環境問題とつなげて考えることのできない日常品を授業で取り上げることによって、生徒のグローバルな社会課題への意識付けを行うことができた。これまで、グローバル課題というと、どこか遠くで起きている課題であると認識する生徒が多かったが、とくに授業後に実施したリフレクションのための自由式記述調査において、ほとんどの生徒が、グローバルな課題と日常生活との関連性に気づき、2 年生で実施する「T-GAP」や 3 年生で実施する「卒業研究」のテーマと関連付けながら記載していた。また、SDGs との関連性の記載もあり、1 年生の時点で「グローバルライフ」を実施する効果の高さが認められた。

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

総合学科高校である本校は、これまでも3年次で実施する課題研究（校内科目名：卒業研究）を中心としたカリキュラムであったが、SGH指定に当たり、グローバル化に対応したカリキュラム開発を行うために、1年次では、地球市民性を醸成する「グローバルライフ」、および早期にグローバルマインドを育成するための「1年次における海外校外学習（カナダ）」を開発した。また、言語の多様性を学べるよう、選択制で「インドネシア語講座」を開講した。2年次では、「国際協働力」を育成するために、インドネシアの国際連携校と協働した「国際フィールドワーク」を開発した。ただし、これは、選抜メンバーによる渡航であるため、生徒全員がグローバル課題に高校の間に1度は取り組めるよう、総合的学習の時間を「T-GAP（つくさかグローバルアクションプログラム）」として開発し、グループ（4～5名）により、それぞれがグローバル課題を設定し、外部とも連携しながら活動を行う科目を開発した。さらに、国際フィールドワーク、T-GAPの活動をPPTやポスターとしてまとめ発表を行う場として、「高校生国際ESDシンポジウム」をカリキュラムに位置付けて開発した。ここでは他校（海外校を含む）の課題研究成果を発表できる場を作り相互に学びあえる場とした。さらに、シンポジウムの運営は高校生が主体となっていくこととし、国際会議の運営経験も得られる場とした。

最終的には、「産業社会と人間（総合学科における原則履修科目）」、選択科目（専門教育）など既存の科目と、SGH科目が有機的に連動し、3年次で個人でテーマを設定して行う卒業研究に収斂していくカリキュラム構造とした。これにより複数年にわたる探究活動を実現できるものとし、卒業研究等、探究活動の成果をもって大学に進学する生徒も現れるなど、5年間の研究開発の成果をあげられたと考えられる。



本校における3年間の教育課程の編成図

(2) 高大接続の状況について

筑波大学との連携

5 年前の構想調書に記載した筑波大学とのグローバル人材育成のための特別入試は、大学本体の入試の大幅な制度変更にともない進められていない。これに関しては、今後の課題となっている。

一方で、筑波大学生物資源学類では、筑波大学高大連携のプロジェクトに採択され、生物資源・環境科学、工学システム、国際をキーワードにした卒業研究をグローバルな視点で行う本校の2年生を対象として、研究テーマとの親和性の高い生物資源学類担当教員による研究指導や授業聴講を体験させる大学インターンシップを行うプロジェクトを開始した。本プロジェクトは研究への動機や関心、学習能力や向学心などを教員と高校生が相互に認識・理解する場を与えることを目的とした。

平成 29 年度から平成 30 年度にかけて、6 名の生徒が大学インターンシップの本プログラムに参加した。生物資源学類担当の生命環境系の丸山幸夫教授（前生命観環境学群長）、茂野隆一教授（現生物資源学類長）、山岡裕一教授（前前期専攻長）、繁森英幸教授（元学類長）、田村憲司教授（附属坂戸高校校長）の研究室に訪問し、教員や大学院生の前で、卒業研究課題に関する研究計画や中間発表等を行い、卒業研究の指導を受けた。その結果、丸山教授に指導を受けた生徒が、毎日農業記録賞優秀賞をはじめ数々の賞を受賞し、ボリビア大使館から招待をうけ研究発表を行った。また、山岡教授に指導を受けた生徒は日本菌学会 2018 年度大会において高校生ポスター賞を受賞した。さらに、本高大連携プロジェクトに参加した生徒数名が国立大学（福島大学など）等に進学が決まった。今後は、生物資源学類だけでなく筑波大学の他の複数の学類においても同様のインターンシップを開始していく予定である。また、卒業研究の質の高度化も含め、高校生が大学レベルのコースを先取り学習する早期履修の可能性についても今後検討していく。

海外の大学との連携

国を越えた高大接続や課題研究の共同実施に関しては、インドネシア、フィリピン、タイとのネットワーク構築を進めた。フィリピン大学附属ルーラル高等学校とは「課題研究国際インターンシップ」として、平成 29 年度および平成 30 年度と各 4 名の生徒と 1 名の教員を受け入れ、筑波大学やつくば市の研究所、都内の種苗企業・財団等でインターンシップを実施した。本校の生徒も「国際稲研究所」や「一村一品運動」に関する活動で支援を受けた。

タイ・カセサート大学の学部への海外生向け入試に関して情報提供をうけるなど連携を進めている。現在、TOEFL 500 点を基準に多くの学部で受け入れを行っているということで、本校の生徒にも情報提供を開始している。平成 31 年度入学生から SG クラスを対象に TOEFL 講座も検討しており、日本国内にとどまらない進路指導体制を整備していく計画である。

インドネシアにおいても、ボゴール農科大学の教授から、国際フィールドワークや課題研究に関して指導を受けるなど連携が進んでいる。その他、インドネシアの複数の大学から日本の学校との連携希望が出された。日本の文部科学省にあたる、インドネシア教育文化省やそのなかにあるユネスコ国内委員会との連携もあり、今後、インドネシアの複数の大学との連携も進めていく計画である。

大学の世界展開力事業 AIMS および SEAMEO との連携

これまで本校の国際連携協定校は、管理機関である筑波大学と国際連携協定を結んでいるある

いは共同プロジェクトを実施している海外大学の附属高校を中心に、締結を行ってきた。これは、連携を表面的なものとなせず、お互い利点がありモチベーションを持って連携を継続させていくためである。平成 25 年度から 5 年間、筑波大学は大学の世界展開力事業として、AIMS (ASEAN International Mobility for Students) プロジェクトをアセアン各国の大学と実施してきた。この際、本校では、AIMS で筑波大学に来日する海外からの留学生との交流を実施した。また海外連携校を通じて AIMS 事業の周知を国際連携校を通じて実施してきた。このように、相互にメリットをもたらす連携が高校にとっても大学にとってもよりよい連携となっていくと考えている。

筑波大学は、東南アジア教育大臣機構 (SEAMEO) の、日本の Affiliate member であり、アセアン各国と強力なネットワークを構築している。本校の SGH 事業との親和性も高く、今後とも、AIMS や SEAMEO を通じ、国を超えた高大接続の在り方も検討を進めていきたい。

(3) 生徒の変化について

留学数の増加について

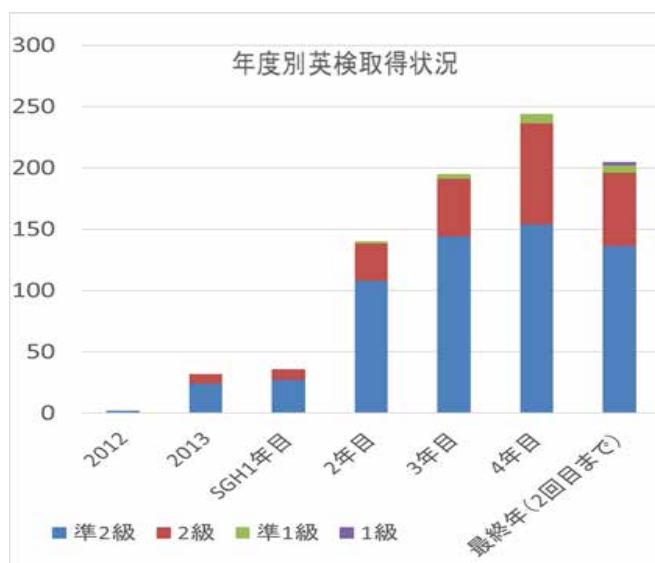
この 5 年間で、高校在学中に 1 年間海外に留学する生徒が大幅に増加した。これまでは、数年に 1 名程度であったが、SGH 指定後は、毎年、3～5 名程度海外に留学するようになった。この大きな要因の一つは、インドネシア、フィリピン、タイに国際連携協定校ができたことがあげられる。一般の留学斡旋団体を通じた私費留学の場合、1 年間の留学費用が高額になる場合も多い。生徒・保護者から、これまで留学希望が出されることもあったが、費用の面で断念する場合も散見された。

国際連携協定校間では、基本的に授業料を相互に免除することになっている。また、相互にホームステイや学校寮で受け入れを行うようにしている。これにより、相互交流が増加している。2019 年 4 月から、タイ・カセサート大学附属高等学校の生徒 2 名をはじめ 1 年間、本校で受け入れることとなった。

アセアン地域以外の高校ともネットワークを広げ、さらなる留学の促進をすすめていきたい。

CEFR B1 B2 レベルの生徒数の増加

英語運用能力の変化について、英検の合格者の推移で検討を行う。SGH 指定前は、左表からもわかるように、英検 2 級合格者は、数名という状況であり、英語が得意または好きな生徒が、受験する程度であった。



しかしこの 5 年間で、CEFR B1 B2 レベルに相当する英検の合格者が急増した。これは、英検の割引制度が導入され、受験しやすくなったことや、SG クラスを設定したことも挙げられるが、全校的に英検受験を推奨し、英語科の教員を中心として放課後補習などの支援を行ったことも大きい。また、課題研究活動や国際シンポジウムの開催、留学生の積極的な受け入れなど、実践的な英語運用の場面も増加し、英語学習へのモチベーションも増加したことも要因といえる。SGH 指定後、

本校では初となる準1級合格者を複数名出すなど、英検合格者数の面では、SGH 指定前後では、別の学校になったといえる。

語学の学びの在り方の変化と国際性の日常化の実現

英検の合格者の飛躍的な増加だけではなく、語学の学びの意味の変化も大きいといえる。例えば、本校独自の事業である「海外卒業研究支援制度（海外における卒業研究を希望する生徒の渡航費用の一部を支援する制度）」でフィリピンに渡航した SG クラスのある生徒は、卒業間際（2019 年 2 月）のアンケート調査で「入学当初は英語を学びたいと思っていたが、課題研究に取り組む中で、ツールとしての英語の学びに変化した」と述べている。彼女は、「フィリピンで女性進出が進んでいる要因は何か」というテーマでフィリピンにおいてジェンダーの専門家や家政婦の方に精力的にインタビューを行った。この際に、英語能力は課題研究活動において求められるツールだと認識するようになったことである。これは、まさに SGH 活動の神髄であるといえる。他にも、海外からの来訪者を農場案内するために、英語でパンフレットを自主作成し内容の確認に来る生徒や、インドネシア語で課題研究のためのアンケートを作成する生徒など、検定のための学びから課題解決を実現のための語学学習に変化してきたことは大きな変化といえる。

また、国際性の日常化も大きな変化である。この 5 年間で外国人生徒の積極的な受け入れ、常勤外国人の雇用、長期・短期の留学生受け入れ、学校訪問・国際交流行事等で、常に国際性を意識できる場となったといえる。そのため、多くの生徒に、様々な交流機会がもたらされることとなった。このような状況的要因からか、インドネシア語を履修していない生徒であっても、インドネシア教員グループが本校を訪問した際、廊下ですれ違うときに「Selamat siang!（スラマツシアン：こんにちは）」と、あいさつがでることがあり、インドネシア教員グループが大きな驚きと喜びを感じられていた。グローバルリーダーとしての基本的な資質であるグローバルシチズンとしての資質が全校的にこの 5 年間で高まったといえる。

（４）教師の変化について

教師の変化については、SGH 事業に関わるメンバーや、各教科における変化から考察を行う。まず 5 年前に、SGH 事業が始まった際は、必ずしも校内をあげて SGH 事業に取り組んでいこうという機運が高かったとはいえない。SGH 採択直後に行われた職員会議でも、担当者から全体に説明する際に、これまでとの違いや新しい取り組みを説明すると、「これまでの総合学科はどうなるのだ」、「グローバルばかりとりあげると、基礎的な学習はおろそかにならないのか。」といった意見が出されたのも事実である。

総合学科として、課題研究を中心としたカリキュラムや探求学習については、専門学科教員も多数いる本校では、すでに 20 年以上の経験があり、アクティブラーニングも含め、これまでの本校での教育活動と大きく変わるものではなかったといえる。しかし、これに「グローバル」という要素が加わることによって、大きな「心の壁」ができ、ハレーションを起こしてしまったことは否定できない。しかし、時間をかけて職員会議で SGH 事業を説明していくことで、徐々に理解が広がり、2 年目の年度初めの職員会議の際に、2 年目の SGH について説明を行った際は、説明終了後、拍手もおこるなど、1 年の間に校内での SGH の理解が深まったといえる。

この 5 年間で、短期長期の海外からの受け入れが増加した。本校では、筑波大学が掲げる「国際性の日常化」のもと、海外からの受け入れも特別なことではなく、そしてお客様としてよりも、共に学ぶ友人という接し方をしている（生徒にも、そのように伝えている）。そのため、できる

限り、どの授業でも受け入れてもらうようにしている。この際、1年目は受け入れに大変否定的であった教員が、2年目に入り「先生、今度受け入れるインドネシアの高校生がプリントを読みやすいように、漢字にふりがなをいれてみました。どうでしょうか。また、受け入れの機会があれば声をかけてくださいね。」と行動変容がおきた。これは、はじめは否定的であっても、実際にSGH事業に関わっていく中で、心理的な壁が小さくなり、自分の教科の視点からも様々なグローバル教育に関わっていくことができることが分かったからだといえる。

校内には、国際教育推進委員会(略称:CIS)を組織している。平成30年度の構成メンバーは、委員長が農業科、副委員長が地歴公民科、構成メンバーとして数学科、英語科、国語科、理科、家庭科と文理普専と幅広い教科構成となっている。学校設定教科である「国際科」も、同様に多くの教科の教員で構成している。この幅の広さが本校の強みとなっているといえる。

さらに、外国人教員採用による変化もここで記述しておきたい。この5年間の間に、管理機関の強いリーダーシップのもと、フィリピン人教員とインドネシア人教員(ともに教科は英語)を常勤職員として雇用することができた。この2名がいることで、職員室では日常的に日本語、英語、インドネシア語、時にはタガログ語の会話が広がることとなった。日本人教員だけでは、時に、思考が固まったり議論が硬直化してしまうこともある。しかし、2名がいることで、教員間の雰囲気が良い方向に変わったのも事実である。

本校は「グローバル人材の育成のためには、グローバル人材を育成できる教員の育成」が重要であると考えている。海外に渡航することが、即、教員のグローバル化につながるわけではないが、できる限りすべての先生方に、海外引率を経験してもらうようにしている。この5年間で、インドネシアに生徒を引率した経験のある教員は10名をこえ、カナダ校外学習、公益財団法人イオン1%クラブのアンバサダー事業、海外卒業研究支援プログラムの引率、埼玉県の研修、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)の韓国研修プログラムなどで、校内のほぼすべての教員が海外引率や研修を受けることができた。これにより、さらにグローバルに関する壁はなくなり、「国際性の日常化」が進んだといえる。

現在、海外の大学からの教育実習の受け入れ依頼が非公式ではあるがきている。筑波大学は前身が東京教育大学でもあり、海外からの教師教育に関するプロジェクトの依頼もある。海外からの教育実習生を受け入れることができれば、さらに、本校教員の意識変化も進むことが期待される。SGH終了後も、教員の質向上に努めていきたい。

(5) 学校における他の要素の変化について(授業、保護者等)

授業の変化について

授業に関しては、大きく2つの点で変化したといえる。ひとつは、すべての教科・科目について、1年生:産業社会と人間・グローバルライフ→2年生:T-GAP→3年生:卒業研究と、本校の課題研究を軸としたグローバル人材育成のカリキュラムの柱が明確になったことによって、各教科・科目が、有機的につながったことがあげられる。各教科・科目で、3年生における卒業研究に話題をとりあげたり、毎年10月に実施される3年生の卒業研究発表会を1年生、2年生も参加する形で実施することで課題研究のイメージを持たせることができた。また、毎年2月の実施する総合学科研究大会において、これも1年生、2年生ともに3年生の代表者の発表や、国際フィールドワーク、海外卒業研究、留学帰国報告を聞くことでグローバルな課題に取り組む内容が具体的にイメージできることとなった。このように異学年がともに学ぶ状況を、年に何度か作り出すことによって、学校全体の授業運営として、最終的に課題研究に収斂していく形が確立した

といえる。

2 つ目は、SDGs を共通言語として、年間指導計画を見直すあるいは、授業に取り入れる教科科目が増加したことである。これまでも、持続可能な社会の担い手を育成する ESD に取り組んできたが、必ずしもそれがグローバルな課題との関連性を意識してきたわけではなかった。そこに、SDGs を取り入れることで、ESD で取り組むべき内容が、ローカルな文脈とグローバルな社会課題とのつながりを、関連性や整理をつけて授業展開を行うことが可能となった。現在では、国語科、地歴公民科、英語科、理科、家庭科、保健体育科、農業科、家庭科、国際科など多くの教科で SDGs を取り入れた授業展開がなされるように変化してきた。

保護者の変化について

保護者の変化に関しては、ホームステイバンクの充実があげられる。本校では、国際連携協定を締結しているインドネシア・コルニタ高等学校の短期留学プログラムの受け入れ（1 か月）、高校生 ESD シンポジウムの際の受け入れ（1 週間）、同じく国際連携協定を締結しているフィリピン大学附属ルーラル高等学校の受け入れ（1 週間）等で、保護者の方々にホームステイの受け入れをお願いしている。

本校の生徒は、海外研修の地であるカナダやインドネシアで、全員がホームステイを受け入れてもらっている。一方で、日本での場合は受け入れられないというケースが散見された。生徒に聞いてみると、「これまで受け入れ経験がなく、家族の協力もなかなか難しくて。」というケースが多かった。本校では、国際教育推進委員会の教員が、ホームステイのアレンジをしている。実際に、海外からの要望にすべて答えるのが難しい場面が、現状でもある。しかし、生徒を通じて何度かお願いすることで、一度受け入れてみようということになり、受け入れていただいた例が何度かあった。多くの場合、1 度受け入れていただけると、その後も、卒業まで、受け入れていただけることが多かった。さらには、ホームステイで受け入れた生徒が、本国で卒業を迎える際に、実際に卒業式に参加するために、海外に渡航される保護者のいるケースもあった。卒業後も、相互に訪問される例も報告があり、良い国際交流が続いているケースも多い。

保護者会で、実際に受け入れた様子を報告してくださる保護者の方や、PTA としてもホームステイの受け入れ促進に向けて協力してくださるところになるなど、この 5 年間で保護者の方々の SGH や国際交流に関する理解や協力体制は大きく進んだといえる。

外部連携・依頼等の増加について

この 5 年間は、多くの外部連携や依頼が増加し、本校の教育内容を外部発信していく機会にも恵まれた。例えば、本校は留学生の受け入れをこれまでも行ってきたが、ヒップファミリークラブ、日本台湾交流協会等、新たな機関からの留学受け入れ依頼も増加した。また、国立研究開発法人科学技術振興機構「日本・アジア青少年サイエンス交流事業」のインドネシア人グループの訪問も 2 年連続で引き受けることとなった。駐日インドネシア大使館を通じたインドネシアの学校からの訪問もあった。埼玉県観光課から、インバウンド関連の学校訪問依頼もあった。韓国の IB 校との新規交流事業も実施した。このような機会がほぼ毎月あることで、本校の生徒にとっても、日ごろの語学学習の成果を試すことができた、多くの分野の方々と学びあえる機会に恵まれ、本校としては貴重な学習機会となった。今後とも、このような機会を確保していきたいと考えている。

地域 ESD の拠点としての活動と SGH の連携について

本校は、SGH 指定以前も様々な分野で外部連携や訪問の受け入れを行ってきた。例えば、本校の農場を活用した諸活動が好例で、地域の小中学生との食育支援プロジェクト、保育園児の農場見学、地域在来種の栽培と保全、子ども食堂の実施等である。地域に開かれた学校として、実績を積んできた学校である。この実績をもとに、平成 29 年度から関東地方 ESD 支援センターの埼玉県地域拠点に登録された（埼玉県内では唯一）。また、平成 29 年度から 2 年間、経済産業省資源エネルギー庁の委託事業であるエネルギー教育モデル校に指定され、「地域の里山から日本と世界の「エネルギー問題」を考え、関連付け、解決活動ができる人材の育成」というテーマで、校内のクヌギ、コナラからなる学校の森を活用し、木質バイオマスエネルギーに関する実践を行った。

これら地域の抱えている持続可能性にかかわる諸課題は、ローカルな問題だけではなく、グローバルな課題ともつながっている。地域の教育力、食糧の安全保障、エネルギー問題など地域からグローバル課題を考えられる良い学習機会であるといえる。

この 5 年間で、これまで地域の活動としての ESD であったが、グローバルとローカルをつなげる結節点としての機能も果たせるようになったといえる。実際に、2019 年 2 月 16 日（土）に、本校を会場に、関東地方 ESD 支援センターと共催で、「SDGs 時代の、学校と地域が連携した ESD を考える」というテーマで地域意見交換会 in 埼玉を開催した。当日は、40 名程度の外部からの参加があり盛況となった。ここでも SGH に関する発表を行った。

このように、グローバルの文脈でも地域社会に貢献できる学校になったといえる。

（6）課題や問題点について 日本語支援活動について

SGH 指定後に、帰国生や外国人生徒を対象とした入試（名称：SGH 型入試）を開始した。これにともない多様な経験やバックグラウンドをもつ生徒が校内に増加し、日々の教室での学びのグローバル化を加速することはできた。その一方で、英語以外の授業は日本語で行われるため、授業の理解が難しい状況も生まれ、授業ごとや放課後の日本語補習なども実施してきた。日本社会における外国人労働者の増加に合わせて、外国人児童生徒の数も増加しており、学校での受け入れ態勢もそれに合わせて整備していく必要がある。それが社会的ニーズでもある。本校でも、本年度、校内組織として「日本語支援委員会」を正式に設置したが、担当教員への負担軽減を図ることができていないのが課題である。現員では、これ以上の受け入れは難しいといえる。担当教員の負担軽減や日本語支援の充実に向けて高大連携によりバイリンガルチューターができる大学院生を探したり、地域連携により地域の日本語支援活動団体に支援を要請したり、あるいは校内でも日本語教育に興味がある本校の上級生をチューターにするなどして、教員の負担軽減をはかっていきたい。

教員の負担増と総合学科と IB の両立について

本校は、平成 29 年度に国際バカロレア機構日本語 DP プログラムの認定校となった。平成 30 年度入学生から IB 生が入学し平成 31 年度から、IB の本格的な授業が始まる。ここで問題になってくるのが、やはり教員の負担増だ。とくに、これまで SGH 事業を中心的に担ってきた教員が IB にもかかわることになっており、今後の業務分担の在り方を検討しているところである。教員の増員や外国人教師の採用もあったが、これまでの総合学科、SGH、IB のすべての活動を同じ形でこなしていくことは難しい。例えば、これまで毎月 11 月に実施してきた高校生国際 ESD シンポジウムも、IB の最終試験が 11 月にあるためこれまでの体制で行うことは難しい。本校ではじめ

てIBの最終試験にのぞむ平成32年度までに、どのような形で本校のSGH後の形を確立していくか決定していきたい。

筑波大学以外の大学との連携について

本校のSGH事業は、親大学である筑波大学との連携を中心にすすめたが、やはり距離的な問題から近隣の大学との連携も重要となってくる。実際に、東京国際大学や城西大学との授業における連携、立教大学の留学生を海外交流アドバイザーとして雇用するなど、いくつかの連携は実現できた。しかし、まだ、組織だった連携は実現できていないのが実情である。今後の大学入試改革等の動きも見据えながら、とくに東武東上線沿線の大学との連携もすすめていきたい。

(7) 今後の持続可能性について

本校のSGH指定期間の5年間は、「これまでの20年間の総合学科」での経験を踏まえ、グローバル時代に対応した「これからの20年間に対応できる総合学科」へ改革するための5年間であったといえる。今後の持続可能性について、本校のSGH事業の中核となっている、「SG入試」、「グローバルライフ」、「カナダ校外学習・国際フィールドワーク等の海外研修」「高校生国際ESDシンポジウム」について以下にまとめる。

SG入試について

まず、SG入試であるが、指定終了後も継続する。SGH事業に主として取り組むSG生（SGI型入試）、外国籍や在外の日本人学校等帰国生向けの「SGII型」そして、平成29年に国際バカロレア日本語DP校（以下IB）に認定され、平成30年度入学生からIBを学ぶ生徒を、「SG入試III型」として生徒募集を行っている。平成31年度入試でも基本的にこの形を踏襲して継続していく。一方で、本校の通常の授業は日本語で行っているため、とくに日本語支援の必要な生徒へのフォローが人員的に難しい場面が出ている。IBの授業が本格的に始まる平成31年度以降、現員のなかでどのような対応ができるか検討が必要である。また、在外の日本人学校等帰国生むけの入試は、帰国手続き等もあり、他の高校で12月に実施されている例もあり、本校も、社会的ニーズも鑑み、入試の制度設計を検討しているところである。いずれにしても、SG入試は継続していく。

地球市民性醸成のための「グローバルライフ」について

次に、グローバルライフであるが、すでに平成31年度の特例申請を済ませており継続実施していく。地球市民性を醸成し、グローバル人材育成の基礎的科目として今後とも本校のグローバル人材育成の重要科目として継続していく。また、平成31年度から新たに開発する日本の農村部における「国内フィールドワーク」および「アセアンフィールドワーク」の事前指導内容を含んだものとし、各教科科目や学校行事が有機的に連動していくようカリキュラムマネジメントに努めていく。さらに、授業開始前（4月）と、授業終了時（2月）に質問紙調査を実施し、授業効果の測定も実施する予定である。

カナダ校外学習・国際フィールドワーク等の海外研修

「カナダ校外学習・国際フィールドワーク等の海外研修」については、一部を変更して継続させていく。まず、「カナダ校外学習」は、内容は魅力的なものであったが、予算の増加や時差など

生徒および教員への負担等から渡航国を変更することとする。カナダ校外学習は保護者に毎月積み立てをお願いし実施してきたが、燃油チャージ費や為替相場の変動もあり費用負担が増加した。そこで、2019 年 4 月入学生から、SGH5 年間で関係を深めていったアセアン各国で実施することとした。開発と環境問題や先進国と途上国に関する課題をメインテーマとする「インドネシア」、経済発展・日本産業との関連・日本語教育等をキーワードにする「タイ」、そして多文化社会・グローバル経済そして英語学習を行う「シンガポール・マレーシア」の3つの選択肢から生徒の将来のキャリア選択や興味関心にあわせて選択できるものにする。

これまで、現地でのプログラム開発は、各学年団が行ってきたが、内容が毎年変化したり、開発へ教員の負担が大きく、探求型学習も 160 名全員一括渡航では実施が難しいという課題があった。そこで校内委員会の「国際教育推進委員会」が、これまでの旅行業者だけではなく、あらたに海外 ODA 案件などのコンサルティング経験のある企業と連携して、プログラム開発を継続的に行うこととした。

「国際フィールドワーク」は、本校のグローバル人材育成の核となる事業であり、予算措置を検討したうえで継続させる。現在は、7 名の選抜生徒のみの渡航となっているが、将来的にはとくに SG クラスの生徒は、事前に旅費の積み立てをするなどして、全員が高校 3 年間のうちに 1 度は、アセアンフィールドワーク以外で海外研修に参加し、それを単位化していく予定である（高校版キャンパスインキャンパス構想）。それにむけ、インドネシア以外の国でもフィールドワークが実施できるように、平成 31 に年度からフィジビリティ調査を開始する。筑波大学の海外連携ネットワークの支援も得ながら、海外の受け入れ機関や学校を開拓していく。

高校生国際 ESD シンポジウム等国際会議について

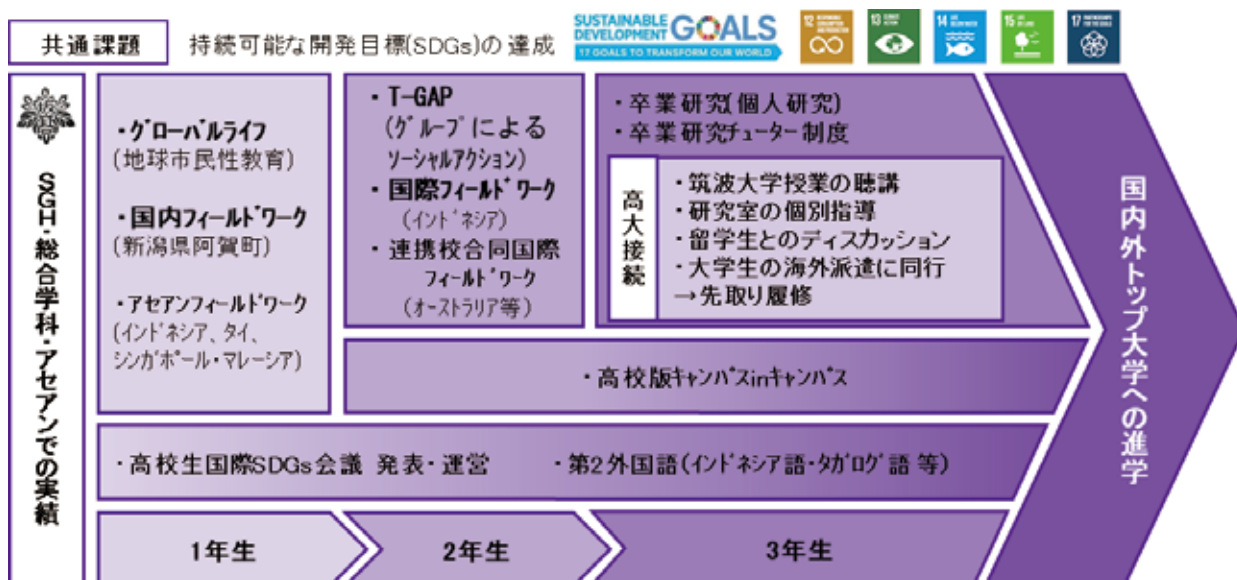
「高校生国際 ESD シンポジウム」も、管理機関の予算的支援を得ながら継続していく計画である。これまでも、多くの学校が参加し課題研究をベースとしたグローバルな学びのプラットフォームとしての機能をはたしてきた本シンポジウムは、今後も本校の重要な取り組みであるといえる。平成 27 年度、平成 28 年度 SGH 指定校、ユネスコスクール連携校、IB 校、海外連携校、さらには国内にあるインター校、日本にある各国の学校（例えば目黒にあるインドネシア人学校等）とも連携して、実施していきたい。将来的には、学びのキーワードとしている SDGs をより重視し、参加国や機関も増えた形で「高校生国際 SDGs 会議」へと発展させていきたい。

また、インドネシアで実施している「インドネシア日本高校生 SDG s ミーティング」も、国際フィールドワーク時あるいは、アセアンフィールドワーク時開催するなど予算面に配慮しながら継続開催できればと考えている。

平成 31 年度以降の学校全体の構想について

以上 SGH の各開発単位の持続可能性を検討したうえで、平成 31 年度以降の本校の構想を図にまとめた。まず、校内の課題研究の共通課題として、持続可能な開発目標（SDGs）の達成を設定する。国連持続可能な開発ソリューション・ネットワーク(SDSN)などの発表では、日本は 2018 年に国別の達成度ランクが、昨年の 11 位から 15 位に下落している。特に、「目標 5: ジェンダー平等を実現しよう」、「目標 12: つくる責任つかう責任」、「目標 13: 気候変動に具体的な対策を」、「目標 14: 海の豊かさを守ろう」、「目標 17: パートナリシップで目標を達成しよう」の低さが指摘されており、世界的には特に「目標 13: 気候変動に具体的な対策を」「目標 14: 海の豊かさを守ろう」「目標 15: 陸の豊かさを守ろう」の取組を加速する必要があると指摘されている。そ

ここで、本校の4つある科目群での学びや課題研究活動もこれらの項目に関連付けながら展開していく。もちろん、これらの項目だけではなく、課題研究テーマごとに17の目標と関連付けていく。また、各研究テーマと17の目標との関連を明示するだけではなく、17の目標を達成するために設定されている具体的な169のターゲットまで落とし込み高校生自身が具体的な解決策を掲げられるようにする。



平成31年度以降の学校全体の構想図

あらたなチャレンジとして1年次に「国内フィールドワーク」を取り入れる。具体的には新潟県阿賀町において農家民泊をしながら、日本の地域コミュニティや農村部の課題について学ぶ。農村部は、限界集落問題など地域の持続可能性に関する多くの問題を抱えているが、そこでの暮らしは自然と調和したもので、世界が抱える資源枯渇からくる持続可能性の問題をとく鍵があるともいえる。カナダ校外学習の後継事業である「アセアンフィールドワーク」とあわせ、日本の都市から農村そして海外の都市部から農村でフィールドワークを行うことで、世界の課題を複眼的・俯瞰的に考える機会を得られると考えている。

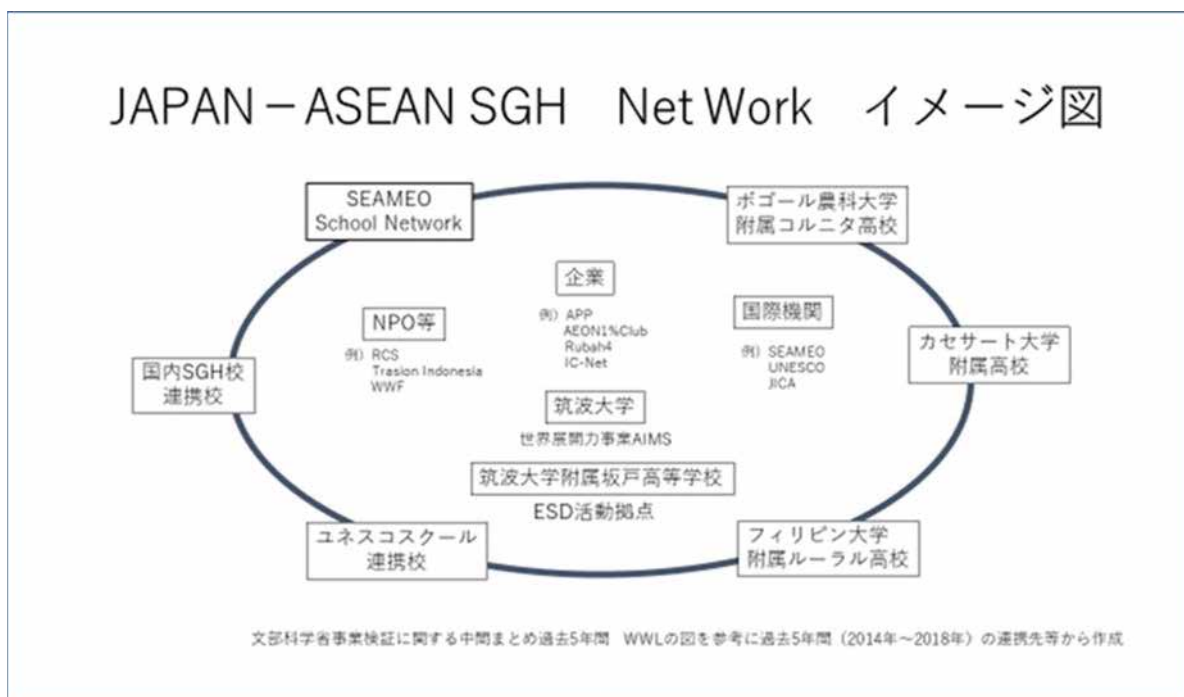
また、高校版キャンパスインキャンパス（筑波大学で実施されているキャンパスインキャンパスの高校版。海外の国際連携協定校との単位相互認定や長期休業中の海外研修を促進させるプログラム）をすすめて、より多くの高校生が海外での経験をつめる体制を整備していく計画である。1年次にアセアンフィールドワークを経験することで、海外渡航に関する心の壁は2年次には大幅に低減されていると予想され、2年次、3年次で短期または長期に海外に留学する生徒が増加することが期待される。

また、現在進めている筑波大学との高大接続事業に関して、卒業研究の指導においてより連携を深めていく計画である。とくに、海外での調査を希望する生徒には、事前に、研究対象の国・地域の留学生から指導・支援・アドバイスを受けたのちに渡航する「卒業研究チューター制度」を開始する計画である。これまでも、大学の世界展開力事業 AIMS との連携で、アセアン各国の調査に関して、アセアンからの留学生から調査内容に関してコメントをもらったことがあり、他地域においても十分可能であると考えている。

このような構想の下に、SGH 5 年間の内容を精選・整備しながらあらたま取り組みも交えてグローバル人材の育成に取り組んでいく計画である。

JAPAN-ASEAN SGH ネットワーク構想について

最後に、本校における SGH 5 年間の成果を持続、そしてさらに発展させていくための構想についてまとめる。名称は「JAPAN-ASEAN SGH ネットワーク（仮称）」である。SGH の事業検証中間報告でだされた WWL 構想図をもとに、本校ではどのようなことが可能か検討した結果を以下に図示した。



JAPAN-ASEAN SGH Network 構想図

本校は、これまでもインドネシア、タイ、フィリピンの学校と国際連携協定を締結してグローバル教育のプログラム開発を行ってきた。

構築したネットワークをさらに発展させ、各学校の教育内容をより充実をめざし、新たなネットワークを広げていきたいと考えている。ここで重要になってくるのは、管理機関との連携である。本校の管理機関である筑波大学は、国際機関「東南アジア教育大臣機構 SEAMEO-RIHED」の連携機関（Affiliate member）に日本の初めてのメンバーである。本校と関係の深いインドネシアの首都ジャカルタには、およそ 1800 校からなる SEAMEO school net の e-learning オフィスもある。AI や IoT の発展する今後の社会において、SEAMEO school net の e-learning の 1800 のネットワークとつながっていくことは大きな可能性を秘めているといえ、今後の連携がきたいできる。本校が交流のプラットフォームとなり、日本とアセアン各国の、研究交流、人材交流、単位認定、留学受け入れなどを促進していきたいと考えている。

また、これまでのインドネシア、タイ、フィリピンの学校との国際フィールドワークや連携スキームを、他のアセアン各国、あるいは地域においても活用しあらたな国際協働力育成プログラ

ムも実現できればと考えている。とくに、これまで連携実績のある SGH 連携校と合同フィールドワークが実現できれば、大きな教育効果が期待できると考えている。

また、地域 ESD 拠点として、ローカルとグローバルの交わる場所としての機能も果たしていきたいと考えている。

SDGs の達成年度である 2030 年まであとおよそ 10 年。2030 年の日本と世界の社会の姿、在り方を想像しながら、SGH5 年間の成果を生かした、これからの学校づくりを考えていきたい（完）。

【担当者】

担当課	研究部	T E L	049-281-1541
氏 名	建元 喜寿	F A X	049-283-8017
職 名	主幹教諭	e-mail	tatemoto.yoshikaz.fm@un.tsukuba.ac.jp

第 2 部 実施報告書

I 研究開発の概要および 平成 30 年度の計画

1 研究開発の実施期間

平成30年4月1日～平成31年3月31日

2 研究開発課題名

先進的な総合学科を活かした持続可能なアセアン社会を創るグローバル人材の育成

3 研究開発校の規模

全日制の総合学科高校。定員は1学年160名。総合学科における科目選択の目安である系列が4つ存在している（生物資源・環境科学系列、工学システム・情報科学系列、生活・人間科学系列、人文社会・コミュニケーション）。それぞれが各分野の学びの核となる科目群指定科目を有している。

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年以降	計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	生徒数	学級数
全日制	総合科学	162	4	159	4	164	4	2	487	12

留学者：インドネシア（3） フィリピン（1） アメリカ（1）

留学受入：台湾（1） デンマーク（1） タイ（1）

（2018年9月3日現在）

4 研究開発の概要

全生徒を対象にした、地球市民性を醸成する取り組み（グローバル・リーダーの発掘および課題研究の基礎力養成）および2年間かけて行う国際的視野に立った課題研究プログラムを開発し（グローバル・リーダーの育成）、3年間に渡った育成プログラムを開発する。具体的には、1年次において「家庭基礎」の内容を「グローバルライフ（仮称）」とし、日常生活の中から世界とのつながりを意識できるようにする。「社会と情報」の授業は「コミュニケーション英語」と連携し英語による発信能力や海外との情報共有力を高める。「産業社会と人間」では、大学や外国人教師による講演を行う。「コミュニケーション英語」では、外国語の運用に関する苦手意識を下げるカリキュラムを開発する。課題研究としては「キャリアデザイン」で、近隣の在日外国人等への聞き取り調査および発表活動を中心とした社会調査活動、カナダにおいて移民の調査や国立公園における森林開発および地域開発調査を行う「校外学習」を開発し、国際的な課題に取り組むための調査基礎力を早期に養う。2年次では、科目群選択科目（各系列の指定科目）の内容の一部を国際的な視野を涵養するものとし、インドネシアをフィールドにした「国際フィールドワーク」を開発する。3年次では、筑波大学で集中的に研究内容や英語論文の作成指導をうける「卒業研究合宿」を開発する。

本校 SGH の特徴

「課題研究」の深化を軸とする「総合学科 Ver. 2.0」へー

本校のSGHの中核は、総合学科のカリキュラムを活かした「課題研究」である。すなわち、すべての科目が「課題研究」に結びつく教育課程の開発である。1年次開発科目の「グローバル・ライフ」及び「キャリアデザイン」から3年次必修科目の「卒業研究」に至

るまでの教育課程を、「課題研究」という軸が貫く。生徒は、国内外での「課題研究」活動を通じて課題設定能力を身につけ、世界へと羽ばたくことが期待される。以下、具体的な開発単位を記す。

（１）地球市民醸成プログラム

１年次の「家庭基礎」を「グローバル・ライフ」とし、日常生活の中から世界とのつながりを意識することができるようにする。また、「社会と情報」は「コミュニケーション英語」と連携し、英語による情報発信能力や海外との情報共有力を高める。

（２）課題研究プログラム

１年次の「校外学習」では、全員がカナダに渡航しホームステイを経験する。そのなかで、外国語によるコミュニケーション能力を高めるとともに、グローバルなキャリア意識を早期に醸成する。希望者には、プレ課題研究として特別にグループ編成を行い、移民問題や森林開発、廃棄物問題、海外の企業のCSR活動等について調査する。SGクラスは「グローバルパスポート」として、グローバル企業経験者、社会起業家、留学生、留学経験者等から講話やWSでグローバルに活躍するための素養やスキルを学ぶと共に、ビジネスコンテストに参加し、実際に課題解決をビジネスから考えて行く経験をする。

２年次では、「T-GAP」において、生徒全員が、グローバルな社会課題を設定し、グループで課題解決活動を行う。また「国際フィールドワーク」をインドネシアで行ない、インドネシアの高校生と協働活動を行い、グローバルリーダーとしての資質を高める。

３年次においては、「卒業研究合宿」に加えて「国際特別演習（時間外集中科目）」を開講し、生徒の「課題研究」活動を支援する。

（３）総合学科の教育課程を活かした「課題研究カリキュラム開発」

各学年に「課題研究」に関連する科目を設置する。そして、各科目が「課題研究」へ収斂する教育課程を開発する。「課題研究」を軸とするグローバルな教育課程を開発することによって、海外の高校生と協働して「問題発見・解決」に立ち向かう能力を育成する。

（４）政策課題を意識したインドネシアでの国際フィールドワーク

グローバル・イシューを意識した国際フィールドワークをインドネシアで実施する。インドネシアは、経済成長を遂げつつある一方、「開発」に伴う環境破壊や貧富の差の拡大などのひずみも顕在化しつつある。生徒は、「環境」と「開発」が対峙するインドネシアで、何が問題なのか現地の高校生とディスカッションし、解決すべき問題を設定する。

具体的には、グヌン・グデ・パンランゴ国立公園周辺の農山村地域に入り込み、村人への聞き込みや青年海外協力隊へのインタビューを踏まえ、課題設定から解決策の提示という一連のプロセスを経験する。さらに、「課題研究」の成果を英語で報告論文としてまとめ、11月に開催される「高校生国際ESDシンポジウム」で発表することが求められる。一連のプロセスを経て、生徒は課題設定能力を身につけ、世界へと羽ばたくことが期待される。

平成 30 年度の研究開発実施計画

SGH 事業が開始された平成 26 年 4 月から 4 年が経過し、いよいよ平成 30 年度は最終年度となる。申請時に提出した開発調書には、「最終年次であるこの年は、本格実施最終段階と位置づけ 5 年間の総まとめとなる。グローバル入試で入学してきた生徒も 3 年生になり、5 年間で開発してきた成果が整う。最終年次の重点項目は 1) 5 年間を検証し、次の 5 年間の行動計画を作成する、2) 開発成果の全国への普及・発信、3) 高大接続入試の拡大・検証、である。」としていた。この基本計画に基づいて最終年度の開発を進めていくが、当初計画より大きな成果を得ているもの、予想より成果を得られていないものを整理しつつ、中間評価での指摘事項等も踏まえながら、本年度の開発計画を策定する。

まず、1) では、各開発単位のなかでも 1 年次「グローバルライフ（地球市民性の醸成を目指した家庭科科目）」、2 年次「T-GAP（グローバル課題を学び、実際にアクションプランを作成し、課題解決のためのソーシャルアクションをグループで実行する）」の開発が進み、既存の 3 年次「卒業研究（個人でテーマを設定し課題研究に取り組む）」と相まって、本校のグローバル人材育成のための 3 年間のカリキュラムの柱がほぼ完成した。この柱に、必修科目での学び、および総合学科の特徴である選択科目の学びが有機的に連結し、多様なグローバル人材を輩出できる素地ができた。最終年度は、各開発単位の検証と改善を進めるとともに、31 年度以降も実施できるように体制を整えていく。また、4 年間の間に、インドネシアだけではなく、フィリピン大学附属ルーラル高等学校および、タイ・カセサート大学附属高等学校とも国際連携協定を締結することができた。筑波大学の大学の世界展開力強化事業である AIMS プログラムとの連携から、他のアセアン各国とも関係が深まった。校内カリキュラムの検証と、アセアン各国との連携を進めながら、指定期間終了後の本校におけるグローバル人材育成プログラムを 30 年度中に確立していく。

2) の開発成果の全国への普及・発信では、本校が主催し実施している「高校生国際 ESD シンポジウム」「全国 SGH 校生徒成果発表会」を中心に進めていく。中間評価でも他校と共同して実施しているシンポジウムを評価していただいた。これまで、SGH 校を対象としたシンポジウムであったが、SGH 校以外の高校も参加できるようし、SGH の成果普及を実施していきたい。また、本校の農場を活かした地域の小中学校を対象とした「食育支援プロジェクト」を通してこれまでも、小学校や中学校との連携を図ってきたが、SGH の成果を踏まえ、「食とグローバル」の視点も交えて、支援活動と連携した SGH の普及活動を実施していく。さらに、夏季休業期間中に実施される学校説明会において高校生自らが先生役になり中学生対象に、SGH 開発科目である「国際社会」の模擬授業を実施し、中学生がリアルに SGH について学べる場を提供する。文化祭においても積極的に SGH の成果を発信し、地域への浸透も図っていく。

3) については、筑波大学全体の入試大改革の動きとあわせて昨年度に引き続き、筑波大学の教授でもある校長のリーダーシップのもとすすめていく。これまで生物資源学類との連携が中心であったが、他の 2～3 程度の学類とも連携を進めていくことが平成 29 年度中に確認されており、平成 30 年度はさらにそれを充実させていく。

現在、国際連携校の高校へ留学をする本校の生徒が複数でおり、単位認定も進んでいる。また、平成 29 年度は国際連携校の生徒が、筑波大学や研究機関、企業へ課題研究ベースの研修で来日した。筑波大学は、スーパーグローバル大学事業の中核的コンセプトとして、キャンパス・イン・キャンパス (CiC) を掲げ、海外の大学と教育研究資源の共有、教育研究能力の向上、学生、教職員の相互交流をすすめている。本校も「高校版 CiC」を掲げ、平成 30 年度はさらに、海外の高校・大学の情報収集と連携を深め、国を越えた高大接続を

すすめていく。

6 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
5年間の成果の検証と今後の計画策定	筑波大学・ 筑波大学附属坂戸高等学校	建元喜寿 (SGH 推進委員会委員長)
各開発単位の成果の検証と普及 および校内体制の整備	筑波大学・ 筑波大学附属坂戸高等学校	岡 聖美 (副校長)
SG 入試の検証と改善	筑波大学附属坂戸高等学校	熊倉悠貴 (生徒募集委員長)
国際フィールドワークの実施と検証	インドネシア (西ジャワ州、スマ トラ、ジャカルタ)	建元喜寿 (SGH 推進委員会委員長)
「インドネシア語講座」の実施と 検証	筑波大学附属坂戸高等学校	吉田賢一 (国際科・IB 担当)
高校生国際 ESD シンポジウム・全国 SGH 校生徒成果発表会・インドネシア 日本 SDGs ミーティング	筑波大学東京キャンパス・ イ ンドネシア政府環境林業省本庁	建元喜寿 (SGH 推進委員会委員長)
課題研究と連動した英語教育の 実践と検証	筑波大学・ 筑波大学附属学校教育局	福田美紀 (外国語科・IB 担当)
科目「グローバルライフ」の実施 ・検証と普及	筑波大学附属坂戸高等学校	高畑啓一 (SGH 評価委員長)
「1 年次海外校外学習」の実践と検証	カナダ (バンクーバー)	今野良祐 (1 年次学年主任)
「2 年次 T-GAP」の実践と検証	筑波大学附属坂戸高等学校	北原立朗 (2 年次学年主任)
筑波大学と海外連携校との高大接続 プログラムに関する共同研究	筑波大学・ 筑波大学附属坂戸高等学校	田村憲司 (筑波大学教授・校長)

SGHの開発仮説に基づく、
課題研究をコアにした3年間の教育課程の編成

STEP3 探求力

卒業研究（課題研究）

STEP2 実践力

国際フィールドワーク

選択科目（専門教育）

高校生国際ESDシンポジウム

T-GAP

STEP1 地球市民の醸成

産業社会と人間

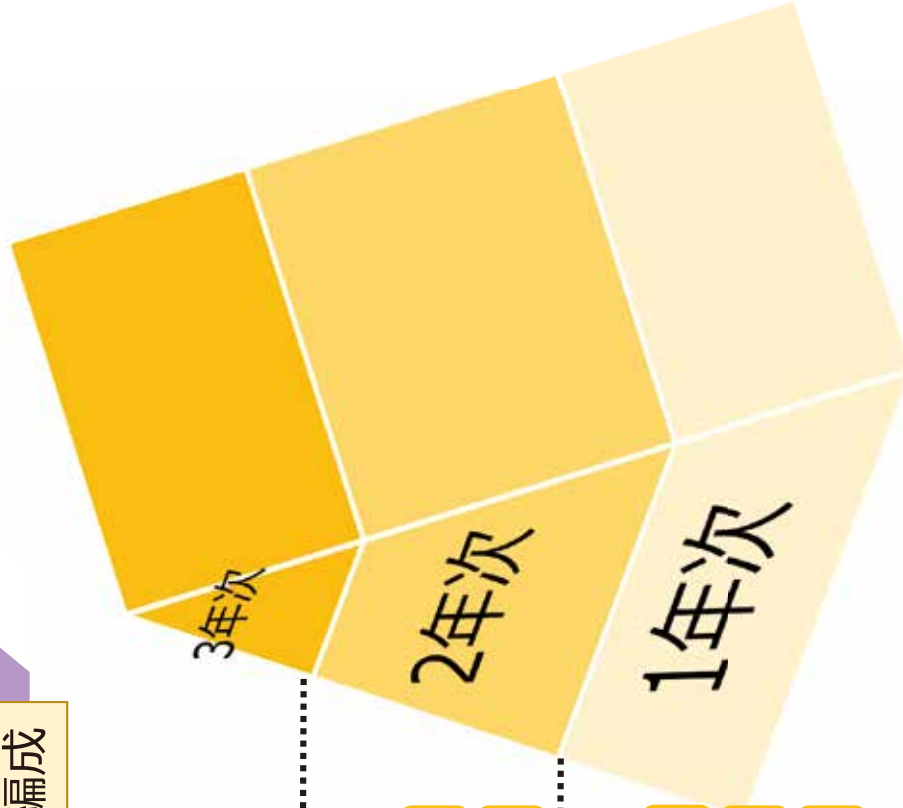
社会と情報

海外校外学習（カナダ）

グローバルライフ

インドネシア語講座

コミュニケーション英語



Ⅱ SGHにおける本校の特徴的な取り組み

この章では、本校の SGH 活動のうち、特徴的な活動である、1) 国際フィールドワーク、2) 第 2 回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング@ジャカルタ、3) 第 7 回高校生国際 ESD シンポジウム、4) 第 4 回全国 SGH 校生徒成果発表会について報告する。

国際フィールドワーク

1 概要

国際フィールドワークは、本校の SGH 事業の中核となる活動の一つで、国際的な課題に対して、本校の生徒が海外の高校生と協働し、課題の解決策を自分たちで考え、そして解決にむけた行動をとれるようになることを目的に開設している。また、将来、グローバル人材として世界のリーダーとなり活動できるようになるため、広い視野と国際的感覚を育成するとともに、将来世界で活躍する際に必要になる、世界とのネットワークを高校時代から生徒自身が構築することも目指している。

5 回目になった 2018 年度のフィールドワークも、「インドネシア 100 年の森プロジェクト」とし、インドネシアの姉妹校であるボゴール農科大学附属コルニタ高校、およびインドネシア環境林業省附属高校の高校生の代表各 7 名合計 21 名で実施した。おもなフィールドは、西ジャワ州チアンジュール県のグヌングデパンランゴ国立公園とその周辺村落、とくにサロンゲ村で実施した。「人と森の関係について考え、持続的に森が維持されていくための具体的な方法」を探究するため、本年度も昨年度と引き続き、エコツーリズム班、環境教育班、地域開発班の 3 グループにわかれ、各グループに、本校、コルニタ高校、環境林業省附属高校の生徒がそれぞれ入るようにグルーピングを行い実施した。班ごとに、アクションプランを作成した後、それに基づいて国立公園周辺の村落を中心に活動を行った。

2017 年 12 月に実施したボゴールリーダー会議（8 月のフィールドワークにむけて各校の代表が 2 名ずつ集まり、フィールドワークに向けて活動内容を話し合う）で、バナナペーパーが現地で、継続的に利用されていることが判明し、「バナナペーパー」を活動の核に据えつつ、開発最終年度にあたるため、地域貢献と成果の普及・還元を図るため、3 か国語による地域開発促進のためのガイドブックを最終成果物として作ることにした。

2 実施内容（29 年度からの改善点）

本年度は、日程表にも記載したように、実施期間は平成 30 年 7 月 28 日から 8 月 17 日で行った。2018 年は、日本とインドネシアが国交を樹立して 60 年の記念すべき年であったため、後述する「第 2 回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング」を外務省から「日本インドネシア国交樹立 60 周年記念事業」に認定していただき実施した。

SGH としての国際フィールドワークは、今回が最終回となる。各校で成果が出ているところであり、また指定 5 年を経過した後、5 年間の成果をどうまとめ、何を継続させていくか検討する時期に入っている。本校は、5 年経過後もインドネシアをはじめ、アセアン各国との関係は維持していきたいと考えている。また、SGH の成果を、国境を越えて還元していきたいと考えている。そこで、5 年間の成果を「サロンゲ村ガイドブック」という形で 3 か国語で作成することで、今後も日本、インドネシアさらには他国の皆さんも、サロンゲ村を訪問しやすいようにまとめて発信することとした。

本年も昨年に引き続き、現在、グヌングデパンランゴ国立公園に赴任中の、JICA 国際協力機構の青年海外協力隊員として活動されている浅川氏にも協力をいただいた。フィールドワーク活動の質を上げていくためには、このような現地でのサポート体制があると大変ありがたい。今後とも、学校外の様々なネットワークづくりを進めていきたい。

班別の活動では、地域開発班の活動で特に、一昨年度から連携している地元サロンゲ村の婦人会組織（PKK）と継続的に連携を図ることができた。これまでの活動で、PKKをはじめ様々な組織が、地元産品を利用した商品開発を行っていることがわかった。一方で、商品のプロモーションやブランディング、あるいはデザインなどがやや不足しており、そこに高校生が貢献できることが多いことが分かった。本年も、PKK の商品を国立公園訪問者に販売実習をおこない、多くのフィードバックをえた。それをまた PKK にも伝えるという活動を行った。

昨年度新開発した、サロンゲ村石鹼×SGH「バナナペーパー」パッケージングが、継続的にサロンゲ村で使用されており、さらにはサロンゲ村が作成したプロモーションビデオにもこのコラボ石鹼が紹介されていた。地域開発班の活動の活動が、5 年の時を経て地域に貢献できているエビデンスとなるものであった。青年海外協力隊員等が地元には張り付き技術移転を試みたとしても、実際に地元で根付いていくことは稀で、隊員が帰国後は活動が終わってしまう場合も多い。そのことは、本校の 3 名の協力隊経験のある教員も熟知している。しかし、この 5 年間で、高校生の熱意とアイデアが地域住民の方々に伝わり、将来的に環境へ配慮した商品開発に貢献したり、SDGs の達成に向けた行動変容を引き起こす可能性が示唆された。

エコツーリズム班は、上述した 3 か国語の「サロンゲ村ガイドブック」を作成することを主な仕事とした。このため、これまで訪問経験のある観光スポットとのより深い聞き取りと、新たに地元住民から聞き取ったスポットの試行を行った。具体的には、新商品である「サンバルソース」の試食会とフィードバックを行ったり、地元が開発に取り組んでいる「農村ホームステイ」に参加し、こちらもフィードバックを返した。筑坂は、2019 年度からインドネシアで 1 年生対象の校外学習を新規に開発する計画があり、それに向けても本年度の活動は有意義なものであった。

環境教育班は、新規のチャレンジとして「環境イラストコンテスト」と、中学校での環境教育 WS にチャレンジした。環境イラストコンテストは、小学生の環境への意識を高め、さらに絵に残し自宅で家族と話すなどリフレクションを促進し、また表彰することでモチベーションを高めるというアイデアのもと実施した。中学校へは、国立公園職員の提案で、日本とインドネシアの交流学習をより発展させていきたいという提案のもと行った。

本年度も、最終報告会にジャカルタからインドネシア政府環境林業省幹部が参加し、生徒の発表に対してコメントを多数寄せてくれた。あわせて、11 月に東京で実施する「第 7 回高校生国際 ESD シンポジウム」への参加代表生徒の選抜も合わせて実施してくれた。SGH の開発当初に掲げたインドネシア政府への提言を実現しつつ、実質的な連携がさらに進んできた。この協力関係をさらに発展させていきたい。

3 来年度以降の継続について

本年度の国際フィールドワークは2年生5名、3年生2名で構成した。うち3年生2名は、そのまま現地に残り1年間の留学をスタートさせた。開発当初に形が実現できたと考えている。前年からの引継ぎ、3月のボゴールリーダー会議での計画に基づいた8月のフィールドワークの実施と一連の流れを作ることができた。

来年度は、どのような形で実施するか予算面の課題もあり検討中であるが、1年次で実施しているカナダ校外学習をインドネシア、タイ、シンガポール・マレーシアの3つから選択する形で計画を進めている。SGHで開発した国際フィールドワークは、「バックグラウンドの違う人たちと一緒にプロジェクトを実施できる力」すなわち「国際協働力」の育成を重視しており、グローバルリァリティーをじかに学べる、非常に意義深いものであると考えている。ひとまずは、1年生対象の新校外学習で基礎的な部分は継続させ、2年生、3年生向けのプログラムも予算を検討しながら開発していきたい。

また、国内で実施している「高校生国際ESDシンポジウム」とインドネシアで実施している「インドネシア日本高校生SDGsミーティング」は、できる限り継続して実施していきたいと考えている。世界共通語となってきたSDGsをベースに、国内はSGH校、SSH校、ユネスコスクール等が参加し、海外校も参加し世界の高校のハブとして「筑坂」が機能を果たしていきたいと考えている。



3校の生徒が作成したガイドブックの表紙（インドネシア語）



インドネシアに植栽されている桜を紹介するページ（英語）

第2回インドネシア日本高校生 SDGs ミーティング@ジャカルタ

1 概要

インドネシア日本 SDGs ミーティングは、2015 年に国連で採択された、国連持続可能な開発目標（SDGs）の17にわたる目標に対し、高校生がどのような形で貢献できるかを、各学校の活動内容を共有しながら議論を深めていくことを目的に、平成30年8月9日に、中央ジャカルタにあるインドネシア政府環境林業省本庁を会場に第2回目を実施した。前年度から担当者が変更になり、事前の会議でやや時間を要したが無事、開催することができた。

参加校は日本のSGH校2校（本校、中部大学春日丘高等学校）、インドネシアからは5校（ボゴール農科大学コルニタ高校、インドネシア政府環境林業省附属林業高等学校、国立ブカシ第1高等学校、国立ダルマガ第1高等学校、国立タンゲラン高校、私立ウムルクロ高等学校）であった。

2 実施内容

各校のSDGsに関連する活動報告を行った。持ち時間は各校15分から20分とし、質疑応答も行った（スケジュール参照）。ミーティングはすべて英語で実施した。司会は、コルニタ高校の生徒と、現在、筑波大学生物資源学類2年生でインドネシアに一時帰国中であったコルニタ高校卒業生が行った。冒頭のあいさつは、環境林業省の人材開発局長からのご挨拶を、副局長からいただいた。

3 来年度以降の展開

参加者からは、今後も継続的に参加したいという声が寄せられた。準備期間が短い中で、各校の参加者は素晴らしい発表ができたと思う。環境林業省からのバックアップもあり、有意義な会を実施できた。昨年度よりポスターセッションも充実させることができたが、費用負担面など自走できる形を考え、国境をこえて高校生がSDGsをテーマに議論できる場を提供していきたい。



第2回インドネシア日本高校生SDGsミーティング
@ジャカルタを開催
(平成30年8月9日@中央ジャカルタ環境林業省)



日本インドネシア国交60周年記念事業として実施
高校生SDGs宣言を発表
(平成30年8月9日@中央ジャカルタ環境林業省)

The Commemorative Event of
the 60th Anniversary of Japan – Indonesia Diplomatic Relations

The 2nd INDONESIA–JAPAN High School Students' Meeting@Jakarta



Date : 9thAugust 2018 (Thu) Registration 8:30 Start 9:00
Place : Ministry of Environment and Forestry Indonesia (Ruang Rimbawan)
Theme : SDGs × Indonesian & Japanese High School Students
–We Are the Change Maker for 2030. –

Participating schools

Indonesian High Schools :

Indonesian Forestry Vocational High School
SMA KORNITA IPB BOGOR
SMAN1 Bekasi
SMAN1 Dharmaga
SMAIT UMMUL QURO BOGOR
SMAN 2 Kota Tangerang Selatan

Japanese High Schools :

Senior High School at Sakado, University of TSUKUBA
Chubu University Haruhigaoka High School

Time Table

9:00 Opening address

Representative of Ministry of Environment and Forestry Indonesia

9:15 Presentation 1 : 3 high school collaborative project

Senior High School at Sakado, University of TSUKUBA

Indonesian Forestry Vocational High School

SMA KORNITA IPB BOGOR

9:35 Presentation 2: Indonesian SGH friends' School1

SMAN1 Dharmaga

9:55 Presentation 3: Indonesian SGH friends' School2

SMAN 2 Kota Tangerang Selatan1

10:15 Intermission & Poster session

10:55 Presentation 4: Japanese SGH

Chubu University Haruhigaoka High School

11:15 Presentation 5: Indonesian SGH friends' School3

SMAIT UMMUL QURO BOGOR

11:35 Presentation 6: Indonesian SGH friends' School4

SMAN1 Bekasi

11:55 Declaration for SDGs from all schools (by representative)

“What can high school students do for making sustainable society?”

12 : 25 Photo session

13 : 00 End



This event is certified as

“The Commemorative Event of the 60th Anniversary of Japan – Indonesia Diplomatic Relations”

写真による振り返り



コルニタ高校におけるセレモニー
(平成30年7月30日@ボゴール農科大学)



コルニタ高校におけるファーストミーティング
(平成30年7月30日@ボゴール農科大学)



SGH最後の国際フィールドワーク
(平成30年7月31日@グヌングデパンランゴ国立公園)



コルニタ高校生によるアイスブレイク
(平成30年7月31日@西ジャワ州サロンゲ)



日本側教員からの5年間の歩みの説明
(平成30年7月31日@西ジャワ州サロンゲ)



Mr. Dayat氏による地域特産品の説明
(平成30年8月1日@サロンゲバレー食堂)



SD Pasir Sarongge 小学校の先生方と議論
(平成30年8月1日@西ジャワ州チアンジュール県)



SD Pasir Saronggeのゴミの組成分析
(平成30年8月1日@西ジャワ州チアンジュール県)



SD Pasir Saronggeで小学生対象ゴミ分別ゲーム
(平成30年8月3日@ジャワ島西ジャワ州サロンゲ村)



SD Pasir SaronggeでPPTで説明
(平成30年8月3日@ジャワ島西ジャワ州サロンゲ村)



SD Pasir Saronggeで森林保全を伝える演劇
(平成30年8月3日@ジャワ島西ジャワ州サロンゲ村)



SD Pasir Saronggeで環境お絵描きコンテスト
(平成30年8月3日@ジャワ島西ジャワ州サロンゲ村)



毎晩の3校合同振り返り
(平成30年8月4日@サロンゲバレー食堂)



地元の小学生と交流する筑坂生
(平成30年8月4日@サウンサロンゲ前広場)



農村ホームステイのトライアル1(エコツー班)
(平成30年8月3日@サロンゲ村ホームステイ協会)



農村ホームステイのトライアル2(エコツー班)
(平成30年8月3日@サロンゲ村ホームステイ協会)



PKK地域婦人会と石鱈作り(地域開発班)
(平成29年8月3日@サロンゲ村PKK施設)



PKK地域婦人会とサンバルソース作り(地域開発班)
(平成29年8月3日@サロンゲ村PKK施設)



地域住民と宿舎周辺の清掃活動
(平成30年8月4日@サロンゲバレー周辺)



サロンゲ村のプロモーションビデオに採用された石鹸
(平成29年8月4日@西ジャワ州サロンゲ村)



今年も婦人会の皆様にお世話になりました
(平成30年8月4日@サウンサロンゲ)



婦人会の皆さんが改良したバナナペーパー
(平成30年8月4日@サウンサロンゲ)



PKKとの最終活動日の昼食の様子
(平成30年8月6日@サウンサロンゲ)



環境林業省職員への最終プレゼン後の記念撮影
(平成30年8月7日@グヌングデパンランゴ国立公園)

第 7 回高校生国際 ESD シンポジウム

今年第 7 回を迎えた高校生国際 ESD シンポジウム (High School Students' International ESD Symposium @ Tokyo) について、大会運営と生徒によるプレゼンテーションの内容について述べる。2012 年 10 月の第 1 回大会から本校主催で毎年開催されているこの行事は、本校国際教育の中核の一つである。この大会に関して①生徒による大会運営②大会までの各学校との交流③保護者・教職員の協力の 3 点について具体例を挙げながら説明する。

1 概要

(1) 開催日：2018 年 11 月 8 日 (木)

(2) 場所：国立大学法人 筑波大学 東京キャンパス

(3) 大会テーマ：SDGs × High School Students

– What will you do to make tomorrow's world better. –

(4) 参加者：全国の SGH 及びアソシエート校の生徒及び教職員 (約 200 名)

海外招聘校：5 校 (タイ、フィリピン、インドネシア)

今年度の ESD シンポジウムも、国連の持続可能な開発目標 (SDGs) を前面に打ち出し、開催した。SGH 校は、多様な課題研究に取り組んでいる。いずれのテーマも SDGs の達成に貢献する内容が多いことから、主催者には国際的な政策課題に照準を合わせた大会にするという意図があった。

また、昨年度と同様に、生徒間の交流を図るため、生徒「分科会」を開催した。SDGs の目標に沿ったテーマを設定し、各分科会での内容を「スローガン」としてまとめてもらった。

今年度の特徴は、海外からの参加校が増えたことである。カセサート大学附属高等学校のキャンパス、そして Singapore National Junior College の 2 校が海外参加校として新たに加わった。且本の参加校からの誘いで、海外校の参加が増えたことは、SGH のネットワーキングの成果のひとつであろう。

①生徒による大会運営

本校では、課題研究の成果報告会として、本シンポジウム (11 月) と SGH 研究大会 (2 月) のふたつの機会を設けている。生徒は、これらのふたつの機会をめがけて、課題研究活動に取り組んでいる。そのため、生徒の間で本シンポジウムは成果報告の重要な機会として認識されている。

そして、教員も本シンポジウムと SGH 研究大会での成果報告を意識して、課題研究活動の指導に当たっている。内容の指導だけにとどまらず、当日の運営についても生徒と共に作り上げることを意識しているため、生徒は運営にも積極的に参加する。

第 4 回大会から、大会の運営はほぼ全て本校の生徒及び姉妹校のボゴール農科大学附属高校の留学生が行っている。受付や会場設営、照明や視聴覚機材の操作はもちろん、全体司会も生徒が行う。

生徒による運営を可能にするための具体的な取り組みは、小さな行事運営を何度も経験させること、活動の継続性を図るため 1 年生を積極的に参加させることの 2 つがあげられる。インドネシア

姉妹校から生徒を受け入れる歓迎会、筑波大学の留学生が訪問する際の歓迎会、文化交流会等の行事をシンプルな形にしたうえでルーティン化し、生徒に何度もそのような行事の準備・会場設営・司会進行等経験させる。英語の司会原稿等も先輩から受け継ぎ、慣れてくるとインドネシア語を織り交ぜるなどして工夫を加えていく。また1年生のときから積極的に重要な役割を与え、行事へ参加させることで、進級したとき後輩にノウハウを教える環境ができる。小さな行事の運営で自信をつけ、先輩からやり方を受け継ぐことで、教員に頼らずとも大きな行事を運営できるようになるのである。

なお、毎年参加者からのアンケートに「生徒による運営が素晴らしい」というコメントをいただいている。今後も、生徒がホスピタリティをもって大会運営に当たれるように指導したい。

②大会までの各学校との交流

今年度は姉妹校であるボゴール農科大学附属コルニタ高校(インドネシア)から10月に生徒7名、シンポジウムに合わせてタイ、フィリピン、インドネシアより生徒11名が約1週間ホームステイと本校での授業に参加した。期間中は本校生徒の各家庭で食事をし、日本式の風呂につかり、週末を楽しみ、日本語で授業を受ける。全教職員協力の下、生徒は様々な文化の違いや言語の壁を互いに乗り越えていく。この長期受入れの経験が、生徒教員保護者の異文化に対するハードルを下げ、シンポジウム期間中23人の生徒教員を受け入れる中でも、より活発な交流を促進していると考えられる。

③保護者・教職員の協力

ESDシンポジウムのような大きな国際的行事を開催するにあたって、保護者・教職員の協力は不可欠である。本校では年間を通してアジア各国の生徒や教職員を迎えて交流を行う。その際、授業での受け入れやホームステイ受け入れは最も大切な部分であるとともに最も苦勞の多い部分であることも確かである。

本校では「ホストファミリーバンク」への登録を呼びかけ、多くのご家庭が登録して下さっている(約50家庭)。日本で外国の生徒を迎え、共に生活する国際交流を保護者の皆さまが理解して下さるおかげで、毎年多くのご家庭からホームステイ受け入れ希望を頂いている。本校国際教育活動は保護者の協力によって支えられているのである。

また教職員の理解とサポートも大きい。当初は日本語のできない外国人生徒の受け入れに戸惑いもあったが、現在は海外からの生徒を受け入れることでクラスに良い影響があるという声も聞かれるようになった。HR担任や教科担当者の努力と創意工夫が、海外生徒の学校生活を支えている。

保護者・教職員という国際交流活動をサポートする大人の存在はSGH活動に不可欠な要素である。国際交流に直接関わる担当者が丁寧に時間をかけて説明し、充実感のある交流活動を続けることで、教職員全体、保護者の国際交流に対する受容度が高まる。

少しでも不安のあることに対しては何度でも相談に乗り、初めてホームステイを受け入れるご家庭には緊急時の対応をきちんと伝える等して、受け入れの「成功体験」を何度も共有することで、「受け入れは当たり前。次はどう工夫するか」という雰囲気が醸成される。

2 ハイライト

シンポジウムにおいて、各参加校とも、SDGs の諸課題に関連するテーマを設定し、課題研究活動に取り組んだ。ここではそれらの発表の中から、いくつかを抜粋し紹介する。

①筑波大学附属坂戸高等学校（日本）、ボゴール農科大学附属高等学校、インドネシア政府環境林業省附属高等学校 3校合同プレゼンテーション「Forest Conservation in Indonesia」

3校合同プレゼンテーションは、2018年8月に実施した「国際フィールドワーク」の内容を紹介した。「国際フィールドワーク」は、3校の生徒が「インドネシアの森林保全」をテーマに、3校の生徒が協働して取り組むことが期待される。その成果報告を本シンポジウムで発表した。

3校の生徒は、森林保全のための観点としてエコツーリズム、環境教育、Community Development のみっつのテーマを設定し、グループに分かれて活動した。活動の結果として辿り着いたのが、スライドの図である。生徒は、地域に根付いたのが下の図である。

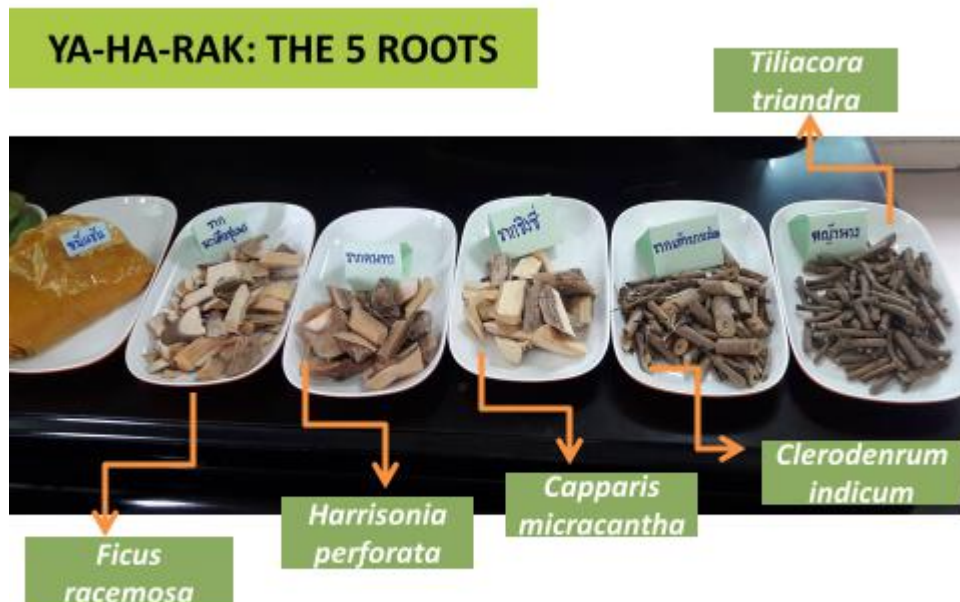


活動を通じて、生徒は国際協力を成功させるためのキーワードとして3つのCを提案した。すなわち、commitment、cooperation、そして collective impact である。参加生徒は、森林保全という難問に挑むためには、個人の力ではなく、さまざまな得意分野を有する人や組織が協働することの大切さを実感した。その結果、辿り着いた結論がみっつのCだった。

②カセサート大学附属高校バンキン校舎(タイ)

1. *The study and development of herbs for decreasing rash and itching skin*

世の中には、肌が弱い人や敏感な人がいる。市販の石けんを使って体を洗うと、かゆみや傷がついてしまう人もいう。パットハララダさんは、このような健康に関する問題を解決するため、タイでよく見かける Ya-Ha-Rak というハーブを使ったハーバルソープを開発した。そして、それがもたらす肌への効果を検証した。



6. Results of the study

1. Reason for trying the soap

Question	Child percentage	Adult percentage
1. Cleanse the skin well	82.76	86.66
2. Help reduce acne rash	79.31	63.33
3. Smooth skin	34.48	53.33
4. Reduce oiliness on face	37.93	30.00

2. Table of volunteers' comments after use of herbal soap.

Question	Child Percentage	Adult Percentage
1. Skin is soft and moist	62.07	73.33
2. Reduce acne on the face and back	55.17	23.33
3. Cleanse the body without residue	51.72	56.67
4. Reduce rash and itching	41.38	40.00
5. White face	24.14	10.00
6. Deodorant	13.79	23.33

2. The Study of Sunflower Morphology In Cross-Breeding

カセサート大学は、農学分野の研究に力を入れている。ピーラビットさんは、タイと日本のひまわりを交配し、不稔花を作成する研究に取り組んだ。その結果、交配したひまわりの方が、花びらの色、形などの遺伝的な親の特徴を有していることが判明した。

Experimental Result 1

	Thai sunflower	Japanese sunflower	F1 Hybrid sunflower
Color of petal	Yellow	Yellow-dark red	Yellow-dark orange
Petal forming	close and overlapping	separated	separated and not overlapping
Petal feature	Small, narrow, pointed end	Big, round end	Big, pointed end
height	25 cm	18 cm	19 cm



Experimental Result 2

	Hybrid sunflower	Sterile sunflower	F2 Hybrid sunflower
Color of petal	Yellow-dark orange	Yellow	Yellow-slightly red
Petal forming	separated and not overlapping	close and overlapping	close and not overlapping
Petal feature	Big, pointed end	Big and wide	Big, wide, pointed end
Stamen	Have	Not have	Not have



③フィリピン大学附属高校(フィリピン)

1. *Determination of disaster awareness and preparedness, perception of community resilience of high school students in Bay, Laguna, Philippines*

フィリピン大学附属高等学校のアンドゥリュウさんは、フィリピンにおける活火山と台風の多さに着目した。日本もフィリピンも災害大国であるが、人々の災害への備えや意識はどの程度備わっているのだろうか？ アンドゥリュウさんは、フィリピン大学附属高校の生徒への質問票調査と回帰分析を通じて、フィリピン人の災害への意識調査を実施した。

Results and Discussion

Table 1. Percentages of Respondents who Answered Positively in Different Aspects

ASPECT	GENDER		YEAR LEVEL			
	M	F	Grade 7	Grade 8	Grade 9	Grade 10
AWARENESS LEVEL ON NATURAL DISASTER						
Awareness on Disasters (Pearson r)	0.4509	0.1347	-0.3302	-0.0081	0.3464	0.5250
	moderate	weak	weak	weak	weak	moderate
Awareness of the DRRM Office in locality (Spearman r)	0.0193	0.3559	0.4278	0.2244	0.1767	0.0359
	weak	weak	weak	weak	weak	weak
Knowledge on Presence of Appointed Officer	64%	40%	85%	52%	46%	38%
Knowledge on DRM Programs	40%	34%	57%	31%	53%	22%
Knowledge on Effective Response of Officer	72%	31%	57%	47%	61%	38%
PREPAREDNESS LEVEL						
In Terms of Access to Programs by Local Government	56%	37%	57%	57%	38%	33%
In Terms of Participation in DRRM Activities	32%	5%	14%	21%	23%	11%
In the Family	32%	87%	85%	84%	76%	72%
PERCEPTION OF RESILIENCE						
In Terms of Building Safety	60%	46%	57%	63%	53%	38%
In Terms of Emergency Response	60%	62%	57%	73%	76%	38%
In Terms of Emergency Supplies	56%	50%	57%	68%	61%	27%
In Terms of Financial Reserves	56%	59%	42%	63%	53%	44%

Results and Discussion

Major Findings

- Male respondents have relatively **higher awareness, preparedness and perception** compared to female, but **female** respondents have **higher level of preparedness** with regards to their **immediate family**
- **Grade 7** showed the highest level of **awareness**, while **Grade 8** have the **highest perception of resilience** in terms of level of **preparation** and **emergency response**
- The top 3 sources of information of the respondents are: social media, local TV news, and SMS (text messages)

2. *Agriwaste adsorbent: a sustainable solution to cleaning oil-spilled water*

フィリピン大学附属高等学校のアレクサンドラさんは、重油の流出事故が引き起こす環境への影響に着目した。フィリピンは災害大国である、タンカーが座礁した結果、重油が流出する事故が発生している。現在、重油の回収方法は、化学物質を散布する方法やスキミング等である。しかし、これらの方法は環境にさらなる悪影響を与えてしまう。そのため、アレクサンドラさんは、フィリピンで日常的に目にするバナナの皮、稲わら、カポック（kapok）の繊維、ポメロ（pomelo）という果物の皮の4つが、どの程度重油を吸収することができるか比較研究し、重油の回収方法について提案した。

Natural Sorbents



- (L-R) banana peels, rice straw, kapok fiber, pomelo peels
- agricultural wastes abundant in the Philippines
- Natural and environment-friendly
- Oleophilic and hydrophobic

Measuring and recording data

the volume of oil and water left in the residual mixture were measured and recorded

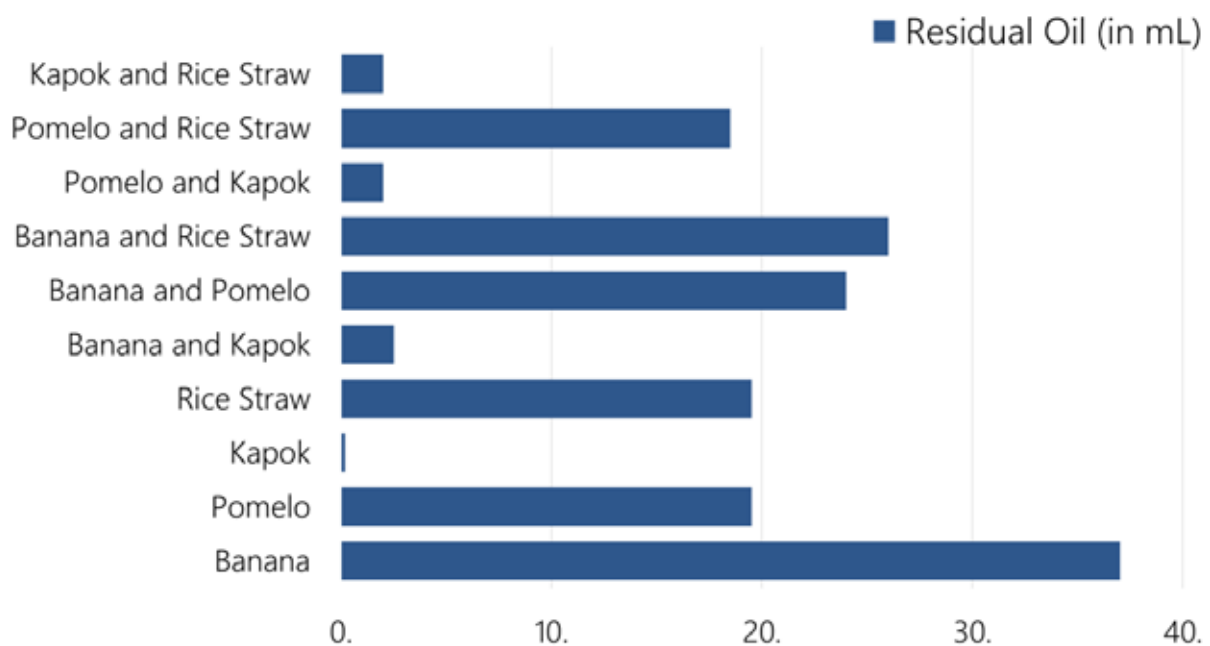


Figure 1. Average volume of residual oil after the removal of sorbents in both trials.

Conclusion



- Natural sorbents can remove oil from oil polluted saltwater with varying effectiveness.
- The most effective oil adsorbent is the **kapok fiber** with almost 100% of the original volume of oil, and lowest oil concentration in the residual oil-water mixture of 0.013 average concentration.
- Kapok fiber is the most hydrophobic as it adsorbed the least amount of water

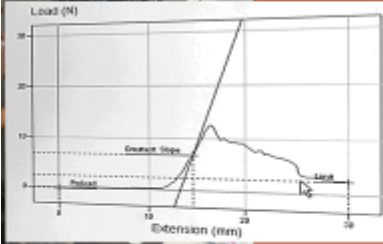
④カセサート大学附属高等学校カンペンセーン校舎（タイ）

Single step cooking of pork steak using OHMIC HEATING

カセサート大学附属高等学校カンペンセーン校舎のチャヤボンさん、ナチャヤさん、パナボンさんのグループは、「オーミック加熱」を用いたポークステーキの調理に挑戦した。オーミック加熱による調理は、45度～85度の低温で調理するプロセスのことである。実験の結果、オーミック加熱による調理の場合、豚肉の表面が焦げにくく良い見た目の仕上がりとなる。また、エネルギー効率も良いことが判明した。

07 Analysis

TEXTURE ANALYSIS



Texture analyzer
with plane V
shear blade

60 mm/min

PERCENT MOISTURE CONTENT

oven



$$MC = \frac{(w_1 - w_2) \times 100\%}{w_1}$$

Drying overnight at 105.5 °C

PERCENT YIELD



>>Cooking>>
process



$$\text{Percent yield} = \frac{w_1}{w_2} \times 100\%$$

ENERGY CONSUMPTION

$$1. P = IV \quad (W)$$

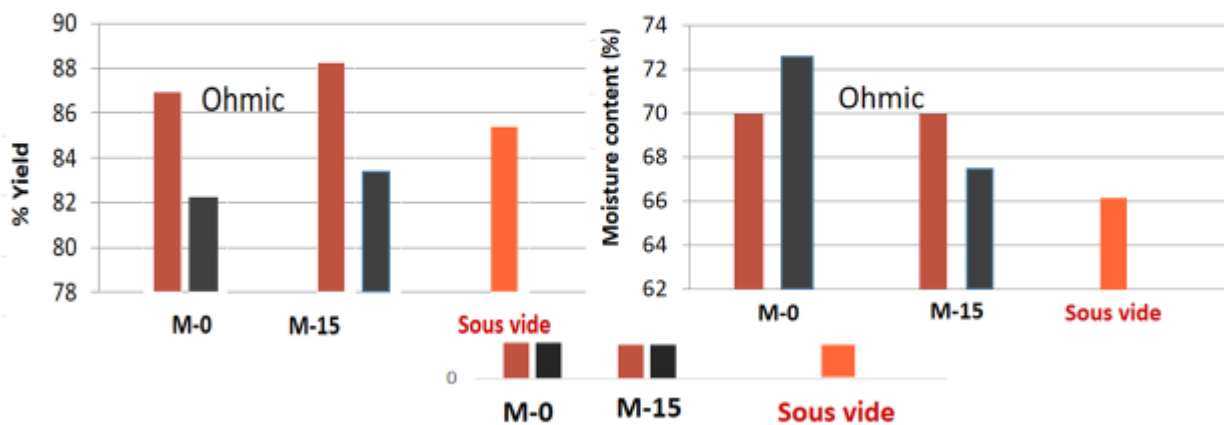
$$2. E = \sum Pt \quad (J)$$

$$3. \text{Cost} = \frac{E}{3,600,000} \times 3 \quad \begin{matrix} \text{(kW-h)} & \text{(B/ kW-h)} \end{matrix}$$

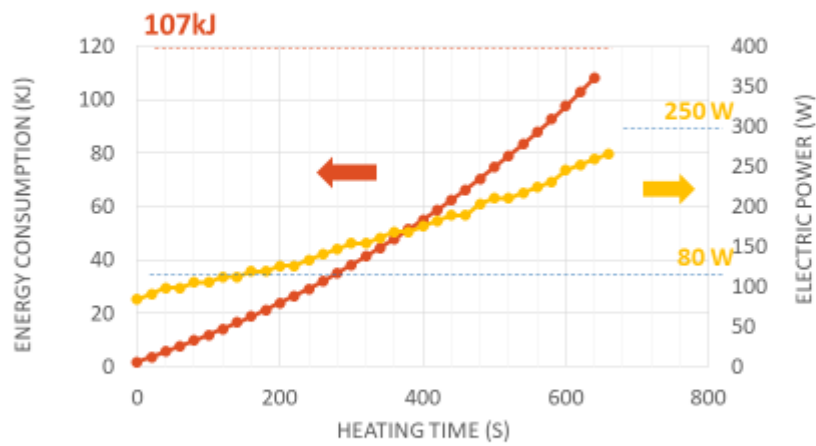


08 results

Texture



09 Result-Energy consumption



10 Conclusion



3 来年度の展開

このシンポジウムは、2012 年(平成 24 年)度から、「参加者とその在籍校生徒・教員が持続発展可能な社会を目指して地球的課題に主体的に取り組む姿勢を涵養」し、「本校の国際教育を推進するための礎をより強固なものとする」目的で行われてきた。

これまでの内容を引き継ぎつつ、より活発で有意義な大会にするために、以下のような事項が今後の課題として考えられる。

①発表要旨の作成

今年度も作成を検討したが、各国間の事前調整が甘かったせいで、作成することができなかった。オーディエンスにとっても、専門的な用語もあるため、発表要旨があった方が理解しやすい。来年度は、できる限り事前に準備できるようにしていきたい。

②World Wide Learning Network の構築に向けて

SGH 指定 5 年間にわたり、本シンポジウムは国内外の高校生が課題研究活動を軸に交流する機会を提供してきた。年々、課題研究活動のレベルも上昇しており、さらなる深化が期待される。イノベーティブなグローバル人材育成に対する需要は、国内外で急速に高まっている。そのため、高度な「課題研究」や「イノベーション」に強い興味関心を抱く国内外の高校をつなぎ、互いに切磋琢磨するラーニング・ネットワークの構築が求められている。本校は、国内外の高校をつなぐ「コネクター・スクール」として、本シンポジウムを核にしながら、その役割を全うしていきたい。

(文責：公民科 吉田賢一)

第4回全国SGH校生徒成果発表会

本校は2014年度にSGHに指定された。その後、新たに67校がSGHに指定され、現在123校のSGHが存在する。それぞれの学校が、「グローバル人材」の育成に向けて研究開発に取り組んでいるが、その成果を生徒自身が発表し、他のSGH校の生徒と共有する機会はなかった。

そのため、本校は全国に先駆け、SGH校の生徒間交流を促進させるため、2015年に「第1回SGH校生徒成果発表会」を企画した。従来SGHは教員間の情報交換に主眼を置いていたのに対し、本企画は、SGH校の生徒間の交流とコラボレーションを図ることを主要な目的とした。

そして、今年度も「第4回全国SGH校生徒成果発表会」を開催した。今年度は、国連の持続可能な開発目標（SDGs）をテーマとし、それぞれの課題研究がSDGsのどの目標達成に貢献するか、ポスターに掲示した。また、SDGsの目標に準拠した「課題別分科会」を設け、生徒間のコミュニケーションを深めるしかけを準備した。

なお、本企画は「第7回高校生国際ESDシンポジウム In 東京 2018」と同日に実施された。そのため、当日は東南アジア諸国からの招待生徒や筑波大学関係者も多数参加した。その結果、SGH校の生徒だけではなく、東南アジアの高校生とも意見交換の輪が広がった。「SGH」、「SDGs」、「ESD」そして「課題研究」という4つのキーワードを通じて、世界各国の生徒が活発に意見交換する場を提供することができた。

1. 概要

- ・実施日：2018年11月8日（木）
- ・場所：国立大学法人 筑波大学 東京キャンパス
- ・形式：ポスターセッション及び分科会
- ・来場者数：約200名
- ・参加校及び機関（順不同、視察を含む）

インドネシア共和国環境林業省附属高等学校（インドネシア）

ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア）

フィリピン大学附属高等学校ロスバニョス校舎（フィリピン）

カセサート大学附属高等学校（タイ）

カセサート大学附属高等学校カンペンセン校舎（タイ）

シンガポール ナショナルジュニアカレッジ（シンガポール）

群馬県立中央中等教育学校

栃木県立佐野高等学校

明治学園高等学校

中部大学春日丘高等学校

長野県上田高等学校

静岡県立三島北高等学校

順天高等学校

東京学芸大学附属国際中等教育学校
九里学園高等学校
愛媛大学附属高等学校
佐賀県立佐賀農業高等学校
早稲田大学本庄高等学院
筑波大学附属坂戸高等学校
愛知県立時習館高等学校
千葉県立印旛特別支援学校
埼玉県立坂戸高等学校
沖縄県立那覇高等学校
埼玉県立所沢高等学校
公益財団法人 AFS 日本協会
JTB 国際交流センター
早稲田大学大学院
IC・Net 株式会社
エイピーピー・ジャパン株式会社
公益財団法人イオンワンパーセントクラブ

2. ハイライト

①生徒主体の運営

当日の大会運営は、主に S-CIS（生徒国際教育推進委員会：Students' Committee of International Studies）の生徒が担当した。すなわち、受付、全体司会、ランチセッションの運営、参加校の校名ボード作成など、その活動は多岐にわたった。既に学年をまたいでノウハウが引き継がれており、今後も当日の大会運営は生徒に任せられるレベルに達している。

②ポスターセッション

午前と午後の二部構成でポスターセッションを開催した。ポスターセッションは、参加校の配置に気を配っている。たとえば、フィールドワークをフィリピンで開講している学校の横には、フィリピン大学附属高校のポスターを配置した。また、課題研究のテーマの関連性を意識したポスター配置とした。主催者の意図は、参加校のさらなるネットワーキングに貢献することである。特に、海外校とのネットワークを築くには時間もカネもかかるため、課題研究活動を通じて、ネットワークを広げてもらいたい。

なお、今年度は昨年度のようにポスターセッションの時間を削ることなく、大会を運営することができた。



③「分科会」

今年度も、生徒間交流を加速させるため、分科会を開催した。分科会は、以下のテーマに基づき、開催された。

(1)「SDGs と私たちの生活」

SDGs と私たちの日常生活が、いかに密接に関わっているか、グループに分かれて議論する。そ

のことで通じて、SDGs を遠い世界の政策目標ではなく、自分事としてとらえていくことを目的とする。

(2) 「SDGs and Our Daily Life」 offered in English.

分科会 (1) の内容を英語で実施する。

(3) 「生徒版！SGH 評価委員会」 presented by 筑波大学附属坂戸高等学校

今年度で SGH 指定第一期校は、5 年間の研究開発期間を終える。SGH は、課題研究を軸に、各学校の特色を活かしながら、授業やカリキュラムの開発に取り組んできた。本分科会は、SGH 校で学ぶ生徒が、自らの学習体験を振り返り、SGH の問題点や改善点を浮き彫りにし、NEW SGH を高校生の視点から文部科学省に提案する。

(4) 分科会④「水問題と SDG s」

facilitated by 関東地方 ESD 活動支援センター&静岡県立三島北高等学校。

日々の暮らしに欠くことのできない水。しかし、生活者として排水口の向こう側や、水が抱える問題について考えたことはあるだろうか。この分科会では、SGH で水問題について研究している三島北高等学校の海外研修チーム 6 girls が開発している学習プログラム「生活排水ラボ」を体験し「水」の中でも特に身近な生活排水をキーワードに、持続可能な社会について考えていく。

(5) 「『森林保全』という難問に挑戦する」 facilitated by インドネシア共和国環境林業省

世界の森林問題は、待ったなしの状況である。国際社会は、問題解決に向けて数多くの施策を講じてきたが、いまだに多くの課題に直面している。本分科会では、インドネシア共和国環境林業省の国立公園の現役職員をお招きし、森林保全の最前線で何が行われているか、そして森林保全に向けて私たちができることとは何か、考えることを目的とする。

(使用言語：英語、インドネシア語、日本語のミックス)。





各分科会の成果は、「スローガン」としてまとめ、最後のエンドロールにて流した。分科会内においては、非常に活発な議論が展開されたが、その内容を全員が共有することはできなかった。限られた時間の中で、いかにして共有を図っていくか、今後の課題だと思われる。

3. 今後の展開

(1) World Wide Learning Network の構築

学校によって得意とする課題研究の分野は異なると思われる。そうであるならば、他校の生徒を受け入れたり、または送り出したりすることによって、より深い学びへとつながっていくのではないだろうか。事実、本校は今年度に1校のSGH校を受け入れ、互いに課題研究の成果を発表しあった。また、海外の姉妹校からのインターンシップも受け入れることができた。

今後は、学習した内容を相互に評価する体制を整え、単位認定することを計画している。まずは、海外の姉妹校との単位認定を模索し、その後、国内のSGH校との連携も検討していきたい。

(2) Post SGH における課題研究活動

今年度で、SGH 初年度指定校はSGHの研究開発期間を終えることになる。この5年間で、国際的な課題研究活動に取り組んだ結果、生徒の課題研究汎用スキルや英語力は上昇することが明らかとなった。今後も、全国の高校生が課題研究活動を軸に交流することができる場を創出していきたいと考えている。



(文責：公民科教諭 吉田賢一)

Ⅲ 大学・外部機関等との連携

SGH では、国際化をすすめる大学や、企業、国際機関（OECD、UNESCO 等）、非営利団体等と連携した活動を求められている。本校の平成 30 年度および 5 年間の連携実績についてまとめる。

1 筑波大学および海外の大学との連携

SGH 事業において、筑波大学とはとくに、アセアン横断型グローバル課題挑戦的教育プログラム（AIMS）」（平成 25 年度文部科学省・大学の世界展開力強化事業）との連携を 5 年間にわたり深めてきた。AIMS は本校の SGH プログラムと非常に親和性が高く、世界展開力事業としての文部科学省の指定は昨年度で終わったが、筑波大学独自の事業として継続され本年度も、アセアンからの留学生が一堂に本校を訪問した。生物資源学類とは、3 年生の卒業研究（課題研究）の指導や、筑波国際農学 ESD シンポジウムを通じて連携を図った。ただ、組織立てて連携は進んでおらず、来年度以降、管理機関である附属学校教育局と、大学国際室とで SGH 指定後の形を検討していく。

本校が大学の附属高校である利点をいかし、筑波大学が国際連携協定を結んでいる海外の大学およびその附属学校と連携した取り組みは進展している。インドネシアボゴール農科大学附属コルニタ高等学校とは 2011 年に、SGH 指定 5 年間の間にはフィリピン大学附属ルーラル高等学校およびタイ・カセサート大学附属高等学校とも国際連携協定を締結した。さらに、カセサート大学附属カンペンセン校とも連携が進んでおり、2019 年度、国際連携協定締結に向けてすでに協議を開始している。カセサート大学からは、外国人向け特別入試の情報提供があり、TOEFL500 点で海外からの学士入学を受け入れているということであった。今後とも、このような人材の世界的な流動性は高まると予想され、本校の生徒も日本だけではなく、海外の大学への進学を含んだ進路指導を進めていきたい。また、カセサート大学附属高校からは 2019 年 4 月から 1 年間の予定で 2 名、本校に留学の予定である。本校からも留学生を派遣できるように準備をすすめている。

フィリピン大学とは、附属ルーラル高等学校との連携から、課題研究の質的向上で相互のリソースを提供しあっている。2018 年 12 月に、昨年に引き続き日本におけるサイエンスインターンシップを受け入れた。本校の生徒のフィリピンでの課題研究にも調査協力をしていただいている。

ボゴール農科大学コルニタ高等学校の卒業生が、現在、筑波大学生物資源学類で 3 名学んでおり、うち 2 名は本校との国際交流がきっかけで日本での学びを希望した。このような形で今後とも、留学や課題研究の質的向上で国を越えた高大接続を進めていきたい。

2 インドネシア政府機関・ユネスコ関係機関との連携

5 年間にわたり、インドネシア政府機関、とくにインドネシア政府環境林業省および教育文化省（ユネスコ国内委員会）、そして駐日インドネシア大使館と連携しながら SGH 活動を行った。インドネシア政府環境林業省幹部から「インドネシアの森林問題を現場で学び育った、環境林業省附属林業高等学校から将来の大臣を出すのが目標です。」と話をいただき、本校の生徒も、そのような高校生たちと、高校時代に学びあい、高めあい、将来にわたっ

て関係性を築いて行けることは持続可能な世界を構築してうえでも、大変有意義であると考えている。そして2017年8月から2018年6月にわたっては、日本からは初の「環境林業省附属林業高等学校（全土に5校）」留学が実現し、本校の生徒が1名、西ジャワ州カディパテン校で学び、2018年8月からはさらにスマトラ校で1名が学んでいる。また、林業附属高校から筑波大学に学士入学している生徒もいる。

2012年に、国際協力機構 JICA のプロジェクト専門家からの紹介ではじまり、年々、連携内容が深くなっている。2018年8月には第2回目の「インドネシア日本高校生 SDG s シンポジウムを開催した（詳細は第Ⅱ章に記述）。この際、環境林業省には会場の使用に始まり、発表機材の準備、インドネシア側参加校の選定、インドネシアに合わせた会の運営など、1回目に続き様々な面で支援をいただいた。当日は、100名を超える参加者が集い、第1回目に続き大成功であった。会は、「日本インドネシア国交樹立60周年記念事業」に認定された。

3 グローバル企業および国際機関 SEAMEO との新たな連携

企業との連携は、国際フィールドワーク、2年次「T-GAP」、高校生国際 ESD シンポジウム、卒業研究等で連携を行ってきた。本年も、国際フィールドワークではインドネシアの企業、アジアペーパーアンドパルプ（APP 社）に協力をいただき、現地フィールドワークを実施できた。5年間で連携のあった主な企業等を以下に示す。

- ・住友化学アジアパシフィック株式会社
- ・テンプスタッフ株式会社
- ・エイピーピー株式会社（APP）
- ・エイピーピー・ジャパン株式会社（APPJ）
- ・公益財団法人イオンワンパーセントクラブ
- ・IC-NET 株式会社
- ・国際協力機構 JICA
- ・地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）
- ・WWF ジャパン
- ・株式会社 Rubah4

これらの企業との関係づくりは、基本的に、これまで本校の何らかのつながりがあったところから進めている。例えば、エイピーピー・ジャパン株式会社は、国際フィールドワークで協力いただいている APP 社の日本法人である。また、公益財団法人イオンワンパーセントクラブは、本校がイオンワンパーセントクラブの実施する「日本インドネシアアンバサダープログラム」参加校に選出されたことからのつながりで、SGH 各校に、イオンワンパーセントクラブの活動の広報もできるところから連携をお願いした。イオンワンパーセントクラブは、2018年12月のSGH全国フォーラムでもSGHの支援をされた。このように、

高校にも企業にも何らかの利点がある関係を築いて行ければ、良い協力関係を継続できると考えている。

国際機関では、5年間指定後は、とくに東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）と連携を深めていく計画である。SGH 指定終了後も本校は、アセアンとの連携活動は継続していく予定である。筑波大学が、SEAMEO の日本 Affiliate member であり、1800 校ある SEAMEO School Net との連携強化も期待される。今後とも、SGH で得たネットワークをさらに発展させ、そのリソースを本校のみならず、他校へも機会提供等を行い、国立大学附属学校としての責務を果たしていきたい。



インドネシア環境林業省附属林業高校でインドネシア人
高校生と全寮制高校で1年間学ぶ本校生徒
(右から3番目)



フィリピン大学附属ルーラル高校
サイエンスインターンシップ@日本財団
(2018年12月)



カセサート大学において機能性食品の
食味調査に参加（2019年1月）



カセサート大学附属高校と連携協議
(2019年1月)

IV 平成 30 年度 SGH 関連科目及び諸活動の報告

SGH開発科目「グローバルライフ」5年間の振り返り

農業科 建元 喜寿・家庭科 石田 光枝

1. SGHカリキュラムにおける本科目の位置づけと授業運営

本校のSGHは、1年次では地球市民性の醸成を、2年次では実践力を、3年生は探求力と実現力を身につけることを目指しカリキュラムが組まれている。1年次では必修科目を中心に学習し、2・3年次では、生徒一人一人が選択した科目を中心に学んでいき、最終的に個人で設定したテーマで「卒業研究」を行う。このような教育課程の中で「グローバルライフ」は、すべての生徒がグローバルな課題と向き合い、世界の諸課題に対して当事者として関わっていける素養を身に付けるために（地球市民性の醸成）、高等学校必修科目である「家庭基礎」をベースに開発を行った。1年次生必修科目として2単位で設置した

本科目をSGHの基礎科目として開発するにいった背景に、「国際問題」「グローバル化」といった事柄に対して、自分とはあまり関係ないあるいは一部の特別な人が関わるものだと考える生徒そして教員も少なからずいる現状があげられる。この課題を解決するために、「日常生活がすでに世界と繋がっている。これからは、誰もが世界とのつながりを考えたうえで生活をする必要がある」という当事者意識を芽生えさせる必要があると考えた。これを学校教育のなかで実現するには、家庭科の力がもっとも大きく、そして家庭科と他教科が協働することでその可能性をさらに広げられるという仮説のもと、本科目開発を行った。

学習指導要領「家庭基礎」の目標に、地球市民性を育むため、1)日常生活の中から世界とのつながりを意識させること、2)地球規模で考え、地球に暮らす一人としての意識を持たせることの2点を追加し、さらに地歴公民科、外国語科、国際科、農業科、工業科など複数の教科の教員で授業案の作成や授業運営を行った。当初は、家庭科教員のみで担当したが、2年目から4名の教員で授業を担当し、4クラス同時並行のローテーションで授業展開する形が最終形態となった。

2. 本科目の目標

上記のような科目開発の背景をふまえ、本科目の目標を次のように設定している。

「人の一生、生活に関する学びを地球規模で考え、地球に暮らす一人としての意識を持たせる。家族・家庭及び福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な知識と技術を習得していく中で、日常生活の中から世界とのつながりを意識し、自分の生活、家庭、地域の生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実向上を図る能力と実践的な態度を育てる」

さらに、生徒に身につけてほしい力を次のように設定した。

「日本と世界とのつながりを理解し、これからの自分の生活を創造するための3つの力を身につける」

- 1) 日常生活の先にある世界を想像できる力
- 2) 日常生活から世界の課題を発見できる力
- 3) 自分の考えを他者に伝え相互に共有できる力

これらの3つの力を身につけるため、教員による知識伝達以外にも「自ら調べ、課題を発見すること」「他者との意見共有」などの時間も重視した。

3. 学習内容

本来の「家庭基礎」における学習内容は多岐にわたる。そのため、家庭基礎で身につけさせたい概念などをふまえて、生徒が実感しやすく発展的に考えることのできる分野を絞り、開発していくこととした。最終的に、衣分野、食分野、社会との共生分野、生活とグローバル課題を考える分野の4分野で内容を構成した。本科目では、いかに“自分のこと”としてとらえられるかを大切に、身近なことから考え続けていくことを願い、題材を選定した。

4. 最終年度における年間学習指導計画

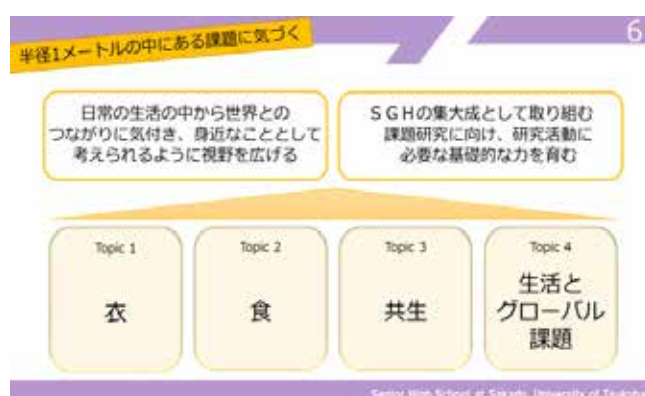
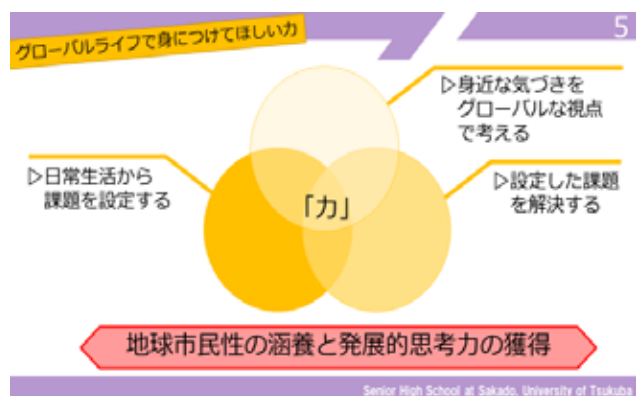
H30 グローバルライフ 授業計画【月5・6】									
1学期									
月	日	曜	回	学校行事	A組	B組	C組	D組	
					学習項目	学習項目	学習項目	学習項目	
4	16	月	1		1-1)事前アンケート、ガイダンス				
	23	月	2		1-2) 1枚の写真から自分の日常生活と世界とのつながりを考えてみよう				
	30	月		振替休日					
5	2	水	3	月曜授業	1-3) 世界の写真の紙芝居ミニストーリーを共有しよう				
	7	月	4		1-4) その向こう側を想像してみよう (チョコレート)				
	14	月	5		1-6)共生①	1-6)食①	1-6)衣①	1-6)生活とグローバル課題①	
	21	月	6	短縮45分	1-7)共生②	1-7)食②	1-7)衣②	1-7)生活とグローバル課題②	
	28	月	7		1-5)中村徹先生講演「写真の先の世界について」				
6	4	月	8		1-8)共生③	1-8)食③	1-8)衣③	1-8)生活とグローバル課題③	
	11	月	9		1-9)共生④	1-9)食④	1-9)衣④	1-9)生活とグローバル課題④	
	18	月	10		1-10)共生⑤	1-10)食⑤	1-10)衣⑤	1-10)生活とグローバル課題⑤	
	25	月	11		3-6) 勝浦信幸先生講演「地域社会における外国人との関わり」				
7	2	月	12		2-1)食①	2-1)衣①	2-1)生活とグローバル課題①	2-1)共生①	
5-10期末考査					1ターム目考査				
2学期									
9	3	月	1	短縮45分	2-2)食②	2-2)衣②	2-2)生活とグローバル課題②	2-2)共生②	
	10	月		黎明祭片づけ					
	14	金	2		2-3)食③	2-3)衣③	2-3)生活とグローバル課題③	2-3)共生③	
	17	月		敬老の日					
	24	月		振替休日					
	26	水	3		2-4)食④	2-4)衣④	2-4)生活とグローバル課題④	2-4)共生④	
10	1	月		開学記念日					
	4	木	4		2-5)食⑤	2-5)衣⑤	2-5)生活とグローバル課題⑤	2-5)共生⑤	
	8	月		体育の日					
	15	月	5		2-6)衣①	2-6)生活とグローバル課題①	2-6)共生①	2-6)食①	
	16	火		必修考査	2ターム目考査				
	22	月	6		2-7)衣②	2-7)生活とグローバル課題②	2-7)共生②	2-7)食②	
	29	月	7		2-8)衣③	2-8)生活とグローバル課題③	2-8)共生③	2-8)食③	
11	5	月	8		3-7) ザ・トゥルー・コスト ファストファッション 真の代償				
	12	月	9		2-9)衣④	2-9)生活とグローバル課題④	2-9)共生④	2-9)食④	
	19	月		マラソン大会代休					
	26	月	10		2-10)衣⑤	2-10)生活とグローバル課題⑤	2-10)共生⑤	2-10)食⑤	
27-30期末考査					3ターム目考査				
3学期									
12	3	月	1		3-1)生活とグローバル課題①	3-1)共生①	3-1)食①	3-1)衣①	
	10	月	2		3-2)生活とグローバル課題②	3-2)共生②	3-2)食②	3-2)衣②	
	17	月	3		3-3)生活とグローバル課題③	3-3)共生③	3-3)食③	3-3)衣③	
1	9	水	4	月曜授業	3-4)生活とグローバル課題④	3-4)共生④	3-4)食④	3-4)衣④	
	14	月		成人の日					
	21	月	5		3-5)生活とグローバル課題⑤	3-5)共生⑤	3-5)食⑤	3-5)衣⑤	
	28	月	6		3-8) 国際環境NGO FoE講演				
2	4	月		一般入試準備					
	11	月		建国記念の日					
	15	金			2/15 研究大会授業公開				
	18	月	7		3-9)10) 1年間のまとめ・事後アンケート				
25-28期末考査					4ターム目考査				

本年度の授業実施内容を一覧表にした。定期的に、外部講師の講話をいれつつ、基本的には4分野を1年間ローテーションして、行く形で授業を運営した。

5. 指定5年終了後の計画について

家庭科の視点から、日常生活とグローバルな社会課題をつなげ、「自分事」あるいは「当事者性」を高めるという本授業の狙いは、生徒の振り返りシートや、アンケート調査からおおむね達成できたと考えている。2年次の「T-GAP」および3年次の「卒業研究」の課題設定に際し、「グローバルライフ」での気づきから課題設定を行ったという生徒が相当数いることでこれらが裏付けられている。

SGH5年指定終了後も、特例申請を行い（すでに許可が下りている）引き続き、グローバルライフを高校1年段階で実施し、地球市民性向上への効果をより詳しく測定していきたいと考えている。



平成31年2月15日（金）第5回SGH研究大会での発表資料より

1. 本科目の目標

インドネシア語で留学生と簡単な会話をすることを目標とする。本校は、毎年 10 名前後のインドネシア人留学生を受け入れている。また、課題研究活動でインドネシアに渡航する生徒も多い。当然、英語によるコミュニケーションが主体となるが、ホームステイの受け入れや日常の場面において、インドネシア語ができることで、よりコミュニケーションが円滑に進む。そのため、本校では、第二外国語としてインドネシア語を開講するに至った。

2. 「インドネシア語」の開発および授業の進め方

本校には学校設定教科として「国際科」があり、国際科の学校設定科目として開発をすすめることとした。「インドネシア語 I（初級）」は簡単な挨拶や自己紹介、現地でのコミュニケーションが最低限とれることを目標にし「インドネシア語検定 E 級合格」を目指すレベルとした。「インドネシア語 II（初中級）」は、買い物や簡単な質問ができ E メールや SNS など短い文章のやりとりができることを目標とし最終的には「インドネシア語検定 D 級合格」を目指すレベルとした。平成 30 年度は、教員の担当コマ数の影響で、「インドネシア語 I」のみ開発をすすめた。

担当者は、本校国際科教員でインドネシアでの 2 年間の業務経験がある教員 1 名が担当し、立教大学に留学しているインドネシア人留学生 1 名を海外交流アドバイザーとして雇用し、授業開発をすすめた。実際の授業はおもに国際科教員 1 名がメインティーチャー、インドネシア人留学生がサブティーチャーに入る形で実施した。「インドネシア語 I」は月曜日 7 時間目（帰りの SHR の後、3 時 50 分から 4 時 40 分）に開講し、全学年対象の科目として開講した。「インドネシア語 I」の履修者は 20 名であった。放課後の開講であったが、意識の高い生徒が多く授業は毎回盛況であった。

3. 一年間の授業内容

（1）インドネシア語 1

＜1 学期「インドネシア語の発音」「挨拶や自己紹介」「インドネシアを知る」＞

すべての履修者にとって、インドネシア語は初習言語である。そのため、アルファベットの発音からレクチャーを始めた。また、挨拶や自己紹介などをペアワークで学習した。語学学習に加えて、インドネシアの食や宗教などの基礎的事項の紹介も行なった。

＜2 学期「インドネシア語の語順」「買い物」＞

2 学期は、インドネシア語の語順について学習した。インドネシア語は、英語と同じく SVO を基本文型としている。語順の学習と平行して、表現のバリエーションを増やすため、日常的によく使われる単語もインプットした。さらに、ケーススタディとして買い物を想定し、必要な表現の習得に努めた。

＜3 学期「疑問詞」＞

5W1H に関する表現を中心に練習した。実際の会話において、疑問文は極めて重要である。そのため、2 学期以降は評価項目に「スピーキング」を導入し、実際の言語運用能力も評価に含めるように工夫した。

4. 今年度の授業を振り返って

今年度の新たな取り組みは、「スピーキングテスト」の導入である。2 学期以降、実際の場面を想定し、疑問文を作る練習を始める。しかし、実際に運用できるかどうかを評価してこなかった。その問題点を克服するために、今年度は 1 人あたり 5 分間のスピーキングテストを実施し、面接形式の考査も導入することにした。幸い、生徒は事前によく練習した上で試験に臨んだため、極めて高いパフォーマンスを示してくれた。来年度以降も、4 技能を評価できるようにしていく所存である。

(文責：国際科 吉田賢一)

<インドネシア語 I 教材例>

Bahasa Indonesia

インドネシア語

• Pertanyaan

1. Apa? (なに)

A: Apa itu? (あれは何ですか?)

B: Itu pohon. (あれは木です。)

A: Pohon apa? (何の木ですか?)

B: Pohon cemara. (松の木です。)

2. Di mana? (どこ)

A: Di mana rumahmu? (お家はどこですか?)

B: Di samping gereja. (教会の隣です。)

A: Di mana itu? (あれはどこですか?)

B: Sekitar 500 meter dari sini. (ここから 500m ぐらい。)

3. Siapa? (だれ)

A: Siapa dia? (彼は誰ですか?)

B: Dia tetangga baru kita. (新しい隣の人です。)

A: Siapa namanya? (お名前は何ですか?)

A: Namanya Budi. (Budi と言います。)

4. Kapan? (いつ)

A: Kapan ulang tahunmu? (お誕生日はいつ?)

B: Tanggal 7 Juni. (6 月 7 日。)

A: Kapan kamu sampai di Jepang? (いつ日本に来た?)

B: 3 hari yang lalu. (3 日前。)

5. Kenapa/Mengapa? (どうして・なぜ)

A: Kenapa kamu menangis? (どうして泣いていますか?)

B : Karena aku sedih. (悲しいからです。)

A: Kenapa kamu sedih? (どうして悲しいですか?)

B: Karena aku tidak punya uang. (お金がないからです。)

6. Bagaimana? (どう)

A: Bagaimana cara membuat kue ini? (このケーキの作り方はどうですか?)

B: Caranya tertulis di buku ini. (作り方はこの本に書いてあります。)

A: Bagaimana rasa Nasi Goreng ini? (このナシゴレン (の味) はどうですか)

B : Rasanya enak. ((味は) おいしいです。)

平成 30 年度 2 年次「T-GAP」実践報告

1. 科目の位置付けと本年度の基本構想

(1) 科目の位置付け

「T-GAP」は Tsukusaka Global Action Program の頭文字を取ってつけられたもので、本校 SGH 研究開発科目の 1 つであり、学校設定教科「国際科」(2 単位)として開講している。2 年次での学びの柱となるこの科目では、生徒たちが社会課題を発見・設定し、高校生ができる解決策を考え、グループでアクションとして実行することを課している。本校のキャリア教育が、1 年次「産業社会と人間(以下、「産社」)」・「キャリアデザイン(以下、「CD」)」、2 年次「T-GAP」、3 年次「卒業研究(以下、「卒研」)」という流れで構成されている中で、2 年次の「T-GAP」は、グループで課題発見・解決活動を中心に行った経験を、「卒研」において求められる個々人の研究活動に活かすという意図で構成されている。「T-GAP」のようなソーシャル・アクション型の授業は、本校も認定校となっている国際バカロレア (IB) プログラムのコア科目「CAS (Creativity, Action, Service)」で、社会への奉仕活動などが求められているように、近年国内外の多くの学校で取り組まれ始めている。本校では、毎週土曜日 (1・2 時間目) に開講し、基本的には 2 年次学年団の教員 8 名で担当する。

(2) 本年度の基本構想

「T-GAP」は、平成 27 年度の試行的実施以来、本年度で 4 回目の実施であり、生徒の実態に応じて改良を重ねながら科目開発が進められてきた。科目目標や授業の大きな枠組みは大きく変わらないが、養いたい資質や能力のどれに焦点を当てるかは当該年次によってやや異なる。例えば、平成 28 年度・29 年度では、下記の資質・能力が重点項目として育成が目指されている。

【平成 28 年度】

① アジア地域、特に ASEAN に関する基礎的・基本的な理解を図りながら、国際的な日本の立場や役割について考察できる視点、② 国際的な視点を持って身近な課題を発見し、協働しながらその課題を解決しようとする態度、③ 自らの興味関心をもとに課題を発見し、その課題について客観的な視点を持って探求していくための方法について理解し、積極的に実践しようとする態度

【平成 29 年度】

① 自ら社会課題を設定し、解決に向けて考えて動く力、② 設定した社会課題の解決に向けて、グループで取り組む力、③ アクションした内容を適切なスタイルでプレゼンし、文章にまとめる力

1 年次「産社」・「CD」の授業を通し、獲得したスキルを活かしつつ、3 年次「卒業研究」へつなげることを意識しながら、本年度は、① 自分の興味に基づくテーマを複数の立場で見る力、② 見つけた問題について、学校内外の人や組織と関わることで解決のアプローチを知り、考え、行動する力の育成に注力して取り組み、これらを通し、困難な状況にも負けず、課題に前向きに向き合い続ける態度を生徒に養うことを目指した。生徒に対しては年度当初のガイダンスで、目標として (a) 自分が生きる社会の現状を知り、見つけた課題について多様な人と関わることで解決の方法を考え、行動に移す、(b) 自分の興味に基づくテーマを複数の観点から見たり、それらのつながりを意識したりできるようになる、(c) 活動の過程で新しいスキルを習得することなどを通して、自分の長所・成長すべき点を認識する、の 3 点にして示した。

(3) 年間計画

本年の「T-GAP」では、2学期に自分たちにとって身近な場で何らかの課題解決を目指して取り組む活動を最終目標である「アクションⅡ」として据え、その課題設定が妥当かアドバイスを受け、活動の実施に必要となる知識やスキルを習得することを目的に、当該の社会課題を扱う外部団体を探し、夏季休業中に訪問することを「アクションⅠ」として課すという構成にした。その中で、「T-GAP」が3年次「卒研」との間に位置づくことも意識して、3回の活動・計画に関わる発表会（ポスターセッション、またはパワーポイント形式）並びに2回の報告書の提出を組み込み、生徒の探求学習に関わるスキルの向上を図った。そして、アクションを終えた3学期には、「プレ卒研」として、3年次の卒業研究のための準備期間という構成とした。次節から各学期の詳細を述べて行く。年間計画は資料1に示しているので併せて参照されたい。

2. 1学期－「アクションⅠ」実施に向けて－

(1) pre T-GAP（カナダ校外学習・事後学習）

SGHに指定されて以降、生徒に早期に海外経験を積ませ、海外への興味関心を喚起することを目的に、本校では1年次3月にカナダへの校外学習を実施するようになった。一方で、年度の切り替わりのタイミングに重なり、帰国後十分にふりかえりの活動ができないまま、「T-GAP」に移行していたことから、24期生では4月の授業をpre T-GAPとし、カナダ校外学習・事後学習を兼ねた「T-GAP」のイントロダクションを行った。そこでは、① カナダ校外学習をふりかえって大切だと考えたことは何か、② 私達が生きている社会はどんな社会だと考える



校外学習ふりかえりディスカッション

か、自分たちはその中でどう生きていくか、という問いでグループディスカッションを行った。これは、カナダで触れた多文化主義やグローバル化の進む社会の中でどのように主体的に関わっていくか、考えることを通し、後の「T-GAP」において、自分の生きる社会で実際に起きている課題を解決する、つまり、アクションを起こすための心構えをもたせることを狙いとして行った。当日は、保護者の方もディスカッションに加わってくださり、活発な意見交換がなされていた。

(2) 「アクションⅠ」計画の指導

既述の通り、本年度のT-GAPは「アクションⅠ」と「アクションⅡ」の二段構えで実施した。最終的に、自分たちの身近なところで課題解決のための行動を起こす「アクションⅡ」実施を目標に、そもそも課題の設定が妥当かを確認し、そのために必要となる知識やスキルを習得するため、該当する社会課題を扱う外部団体を訪問することを「アクションⅠ」として位置づけ、夏季休業中に行うことを課した。生徒に対しては、資料2といった形で年間を通したT-GAPの活動の流れを提示した。

まず、課題を発見・設定するにあたっては、生徒個人で興味を持つことやそれに関わる課題、自身の特技などをワークシート（資料5）に書き出し、いくつか活動の候補を出させた。それらで出た内容から分野を大きく4つに分けて各会場に生徒を集め、それぞれの希望を発表させた上で、同様の興味関心を持った生徒で3～5人のグループを結成させた。その後、班内で取り組む社会課題を調査し、

高校生が取り組みそうな課題解決のための活動（＝「アクションⅡ」）を考えてもらった。その前段階である「アクションⅠ」として、活動の実現のために必要となる知識や情報を得るなど、アドバイスを受けたリ、共に活動したりすることを目的に、該当する課題に取り組む外部の団体（NPO、企業、地方自治体等）を探し、訪問計画を生徒主体で立てさせた。社会課題を発見し、適切な訪問先を探し、決定するために、ワークシートを用い、文献やインターネット上の情報を用いながら取り組みたい分野の調査・情報収集をすることを課した。また「アクションⅠ」の計画立案にあたっては、各グループ分野に応じた担当教員が付き、適宜アドバイスをもらいながら進めた。その後最終確認として、年次の教員複数名で活動審査会を行い、活動の安全性、並びに訪問先・活動が妥当であるか、事前調査は十分に行われているかを確認している。



アクションⅠ 計画発表会

「アクションⅠ」実施前には、各班の計画を発表するとともに、互いの計画にアドバイスをし、より有意義な活動ができるようにすることを目的として、活動計画発表会を設けた。1グループあたり10分（発表時間6分、質疑3分）で、パワーポイントを用いた形式で、5会場に分かれて行った。当日は、生徒同士で互いの計画にアドバイスをし合ったのみならず、参観していた保護者の方から活動に関する助言も多く頂戴することができ、生徒たちはアクションの妥当性や実施計画について見直す機会となったようであった。

（３）「アクションⅠ」活動実践

計画発表会を終え、生徒たちは各々夏季休業中に「アクションⅠ」を実施した。一部、交渉が難航した班や、突発的なトラブルで夏季休業中の訪問が叶わなかった班もあったが、昨年度の「産社」における職場体験で生徒自身が訪問先を決め、交渉から計画・実施まで主体となって行った経験を活かし、ほとんどの班が関連団体を訪問できた。

「アクションⅠ」のふりかえり活動としては、活動内容や学んだことをまとめた報告書の提出、ポスターセッション形式の活動報告会を行い、これに併せてアンケート調査を実施した。ポスターセッションは、昨年度から数えて3回目であり、資料作成技術、並びにプレゼンテーション能力の向上が



アクションⅠ 活動報告会ポスターセッション

感じられた。報告書については、A4 用紙2～3枚程度で、「① 問題意識、② アクション全体の対象・目的（活動の意義）、③ 先行研究のまとめ ④ アクションⅠの内容（訪問先・活動）、⑤ 考察 / 今後の展望（アクションⅡに向けて）、⑥ 参考引用文献（3つ以上）」についてまとめるよう指示した。

夏季休業中に行った「アクションⅠ」は基本的には外部での活動となるため、実際の活動内容は教員には見えにくい。学びの様子は本年度より導入したClassi（ベネッセ）を用いて実施したアンケート調

査から伺い知ることができたので、ここでいくつか紹介したい。「アクションⅠ」の意義に関する質問

では、有効回答数 125 人（159 人中）のうち、「意義があった」と答えた生徒が 67 人（41.6%）、「やや意義があった」が 49 人（30.4%）、「想定とは異なったが意義があった」が 6 人（3.7%）と、約 8 割の生徒がアクションⅠについて何らかの意義を感じていた。その理由として、「今、何が問題になっているのか想像や考えだけで活動していたが、こうして訪問したことにより現実を見える形で学ぶことが出来たため。また、分野のプロに話を聞くことで普段目を付けないところに目を付けることが出来たり、事前調査の内容を深めることが出来たりとかなり充実したものになったから。」という感想をはじめ、課題の最前線で活動している人の話を聞き、課題解決に必要な知識や情報を獲得することができた様子が伺える感想が多く見られた。一方で、「私達が計画していたアクションⅡでの活動があまり意義のないものだ」と確信出来たため。」といった感想も少なからずあり、場合によっては課題の設定が適切でなかったことに気付かされ、軌道修正を余儀なくされたグループもあった。しかし、これらの気づきは、実際に現場に行ったからこそ得られた新たな視座であり、生徒に示した科目目標の（a）のうち、社会の現状を知り、課題について多様な人と関わり、解決の方法を考えるという部分、（b）の複数の観点から見る、という部分に相当する。「アクションⅠ」を通し、社会の課題について知見を深め、課題に関わる多様な考え方に触れる中で、自身の認識や考え方を変容させていったことが伺い知れる。同アンケートの生徒のふりかえりの抜粋は、5. まとめ、各班の活動内容・訪問先は、資料 3 を参照されたい。

3. 2 学期 — 「アクションⅡ」実施に向けて—

（1）「アクションⅡ」計画の指導

「アクションⅠ」での学びをもとに、2 学期は各班「アクションⅡ」を再考し、実施し、活動の報告会までを行った。興味関心の変化等から、一部メンバー変更の生じたグループもあったが、概ね「アクションⅠ」から継続して活動を続けた。

「アクションⅠ」では、主に外部団体を訪問し、既存の活動に参加するという形であったのに対し、「アクションⅡ」は生徒が主体となって、身の回りの社会や世界での「課題」を生徒自身で見出し、その課題に向けて実現可能な活動をチームで考えて実現させる、というものであり、1 学期に比べて難易度が高い活動であったと言える。特に、今年度の活動は例年に比べ、とりわけ生徒の自主性を重んじた内容であった。「アイデアを生み出す」ことはとても難しいことであり、ましてやそのアイデアを共同活動で、しかも限られた時間と制約の中で実現させるためには数々のハードルをクリアする必要がある。

また、多くの班が外部の人を対象に活動を実施することを希望したため、安全面など配慮しなければならないことも多くでてきた。そのため、活動にあたって留意すべき点をまとめ、全体に説明し、1 学期と同様の活動計画書の提出に加えて面談チェックシートを配布し、教員との面談をしながら安全性を確認し、必要な準備を進め、活動につなげていった。そのため、多くのグループがアクションのアイデアを出すこと、実現のための計画書作り、審査会に通ることに 2 学期の多くの時間を割くこととなってしまったようであった。



アクションⅡ「アダプテッドスポーツの普及」

（２）「アクションⅡ」活動実践

11月下旬を目処に実施するように期限を設定した「アクションⅡ」であるが、実現が困難と思われたアイデアをみごとに実現したチームから、期限までに思うような形で実施がかなわなかったグループも少なからず見られるなど、活動内容や実現度には幅があったのは否めない。しかし、「アクションⅡ」の実現について、生徒たちは0から1を作ることの難しさ、アイデアを実現させることの大変さを体験から理解したのではないだろうか。各班が最終的にどのような活動を行ったかについては、「活動一覧」（資料4）としてまとめているので、参照していただきたい。

「アクションⅡ」のふりかえり活動は、パワーポイントを用いた活動報告会に加えて、「アクションⅠ」と同様に報告書の提出を課し、アンケート調査を実施した。活動報告会は、1グループあたり9分（発表時間6～7分、質疑1～2分）を目安に5会場に分かれて実施した。活動内容の発表に加えて、「T-GAP」全体のふりかえりとして、「クロストーク」と題し、グループ混合の班を新たに作り、「T-GAPを通して学んだこと」について自由にディスカッションをしてもらった。

「協力すること」、「計画性の大事さ」、「楽しく取り組むこと」といった意見が多く出た。中には、「複数人で同じ課題について考えると、様々な視座・アプローチを産み、より良い考えを作る」ことができる一方で、「協同することの難しさも出てくる」といった意見も出てきた。「T-GAP」の活動全体を通し、生徒が異なる背景を持つ他者と関わりながら、考えを変容させ、小さいながらも行動を起こし、他者に何らかの影響を与えたことを通し、大きく学び、成長した様子を議論から垣間見ることができた。

報告書については、A4用紙3～5枚程度で、「1. 課題設定（1）課題と設定理由（2）文献調査 2. 活動内容（1）活動の目的と方法（2）アクションⅠについて（3）アクションⅡについて（4）成果と課題 3. 考察 4. T-GAPに取り組んで <参考引用文献>」についてまとめるよう指示した。「これに関しては、本年度に入って具体的なレポートの書き方等について指導する時間は設けられなかったため、体裁や引用などの基本的なルールが守られていない報告書が多くなってしまった。そのため、書かれた内容に重きを置いた基準を作成し、評価したが、「卒研」につなげることを鑑みると、3学期の「卒研」に向けた指導の中だけではなく、1～2学期の「T-GAP」の指導計画にリサーチスキルの指導を何度か組み込むことも必要だったと考えられる。Classiを用いたアンケートは、「アクションⅡ」単体ではなく、「T-GAP」の活動全体に関してのものを取ったので、「アクションⅠ」のものと共に5. まとめに抜粋している。



アクションⅡ「障害者の疑似体験ワークショップ」



アクションⅡ「ゲームの有効性を考える」



アクションⅡ「古墳の魅力を広める」

4. 3学期－「卒業研究」に向けて－

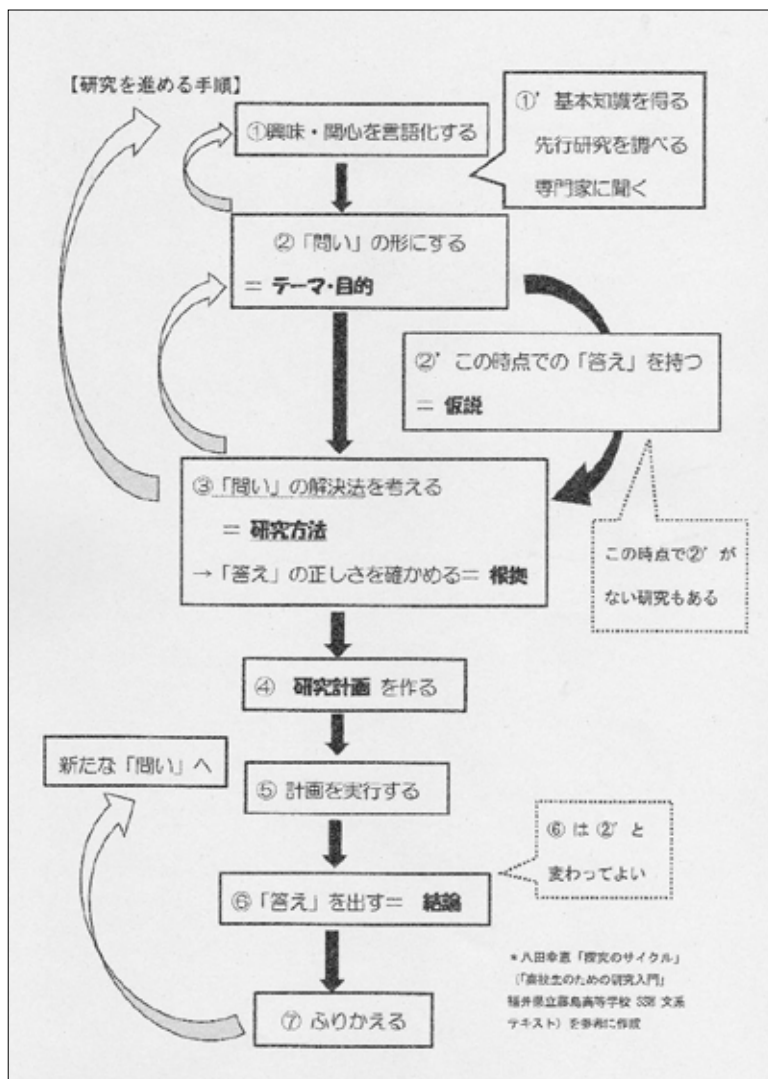
（１）10月：「研究とは何か」を知る

科目としての「卒業研究」は3年次から始まるが、例年「T-GAP」の活動の終了後あるいは並行した2年次10～11月に卒業研究のガイダンスを始めている。

本年度は10月20日に筑波大学教授である校長の研究講話を行った。研究になるように課題を設定すること、何より楽しんで取り組むのが大事であること等、研究の心構えを知った上で翌週の3年次・卒業研究発表会に臨むことができた。

毎年「卒業研究」で課題としてあがるのが、テーマ設定の難しさである。その原因として、高校生が扱えるレベルまで絞り込めないことが考えられる。研究初心者としては当然であり、試行錯誤しながら進めていくしかないのだが、一方で生徒は最初から完全なテーマを作ろうとして苦しみがちである。そこで本年度は初回到右の図を示し、計画を立てるまでは何度でも修正する

必要があることを説明した。またテーマも、「〇〇について」という形式では漠然としていて抽象的なレベルから抜け出しにくい。よって初めの数ヶ月は「テーマ設定」でなく「『問い』を立てる」と称し、取り組みたいテーマを「問い」（疑問形）で示させることにした。



（２）12～1月：「問い」を立てる

T-GAP アクションⅡ 報告会が終わった12月上旬から、本格的にプレ卒業研究に入った。12月は個人で興味・関心から問いをできるだけ多く立てる作業を経た後、科目群ごとに5～6名のグループを作り、それぞれが作った問いを回覧・添削する活動を行った。他の人が立てた問い、書き込んでもらったコメントを見ることで新たな視点を得ることができたようである。次に、文献の読み方を指導した。全体でのガイダンスの後、各科目群で同じ論文を扱って論の立て方を理解させるとともに、多様な論点があることに気づかせた。冬休みには関連する本や論文を読ませている。1月は研究方法を説明し、自身のテーマに近い教員との面談をし、漠然としていた「問い」を徐々に具体化させていく。

（３）2～3月：研究計画を作る

本年度は2月上旬に研究計画を共有する活動を設定する予定である。3月の構想発表会の前に研究のタイプやテーマは様々であることに気づかせ、計画を練り直させる機会とする。2年次に立てた「問

い」が3年次秋の最終レポートでは具体的な形となり「答え」が示せるように今後、指導していきたい。

5. まとめ

以上、本年度「T-GAP」の主な内容を学期ごとに紹介してきた。ここでは、「T-GAP」の活動で生徒たちが考えたこと・感じたことの一部をふりかえりより引用する。科目目標として、(a) 自分が生きる社会の現状を知り、見つけた課題について多様な人と関わることで解決の方法を考え、行動に移す、(b) 自分の興味に基づくテーマを複数の観点から見たり、それらのつながりを意識したりできるようになる、(c) 活動の過程で新しいスキルを習得することなどを通して、自分の長所・成長すべき点を認識する、の3点を生徒に提示した。ふりかえりのコメントに、該当する記号を付した。

【アクションⅠ】

・こんなにたくさんの人が日本のバスケ界に関わっているとは思わなかった。色々な人、企業、場所があつてこそ私たちの会社だが、たくさんの一般企業とも繋がりがあり、自分がバスケができて、好きでいられるこの環境に感謝したい。－ (a)

・外来種を撲滅だといっているが、実際は特定の外来種を悪者にして撲滅だといっているだけで、実際に外来種を全て撲滅すると、植物はほぼ日本からいなくなり、生態系が壊れてしまう。なので、外来種撲滅という考えへの考え方感じ方が変わった。－ (a)、(b)

・自分が考えつかなかったことを班員が考えていることが多々ありました。自分の考えだけでは、1つの方向からしか物事を見ることができませんでしたが、班員の考えを聞くことによって色々な面から物事を見ることができたと思います。また、訪問先の方とは、私たちが疑問に思っていることについて、とても詳しく教えてくださいました。それに加えて、外国人の考えや現在の外国人に対しての日本の行動を教えてください、日本人と外国人の気持ちがいより理解できたと思ったからです。－ (a)、(b)

・実際に体験して自分たちが考えないような発想に出会い、考える幅が広がった。また活動している人に話を聞いてその人が目指しているもの自分たちの目指すものについてアドバイスをもらうことができた。そこでアクションⅡをよりよくするための意見をたくさんもらうことができた。－ (b)

・インタビューは、自分たちの準備不足を痛感するものでもあった。話を聞いている内に自分たちの目の行っていない面が次々に出てきたことから、アクションプランⅡのプラン作成ではこのインタビューを活かして、より細かく内容を決めていく必要がある。－ (c)

・周りの人の為に何かをするということを、いままで行ったことがありませんでした。だから、今回は、何が今の私達に出来るのかなどを考えるのがとても難しく、またそれが良い経験となりました。－ (c)

・初めてこういった授業で班長になり、アポ取りなどをすることが出来た為、とても良い経験になりました。班の活動では他の班員が進んで発表準備などの役割をしてくれたので、班で協力することが出来ました。アクションⅡに向けてアクションⅠでの活動を活かし、これからの活動も積極的に行いたいです。－ (c)

・意見が合わなくて、自分の思っていることも今まで以上に自分が1番に言えるようにとか色々考えたりもしてすごく大変だったけどそれ以上に学べたことがたくさんあったので諦めないでよかったと思いました。でもこれからがもっと大変なので頼りつつもしっかり自分の意思を持って行動していけるように努力しようと思いました。－ (c)

・今回のアクションⅠを通して、殺処分の現状を第一線で活躍する方々の目線で理解することができた。前述のように、持続することが大変だという点についてはインターネットにはない第一線で活躍している方からこそ分かる視点なのだったと思った。(中略) 少ない寄付だが役立てて欲しいと思う。今回こうして自分に出来ることを探し実践したがこれからも自分に出来ることを探していきたい。－ (a)、(b)、(c)

【アクションⅡ】

・最初は、皆やりたいこともバラバラだったし、やりたいことも特に見つからなくて大変だったけど、もし1人だったら、否定してくれる人もいないし、話を広げていく人もいなくて進まなかったと思う。結果的にまとめることが出来たのは皆の個性や協力性あったからこそだと思う。また、訪問先の方とも一度きりの交流で終わるのではなく、継続的に活動を行っていくので、交流も続けていくと思うし、訪問先の方のサポートがあったからこそ、活動をしてこれたと感じたから。－ (a)

・今取り上げられている問題の裏にもまた別の問題があること、そしてそれは実際に体験しないとわからないと言うことがわかった。－ (a)、(b)

・今まで身の回りにある多くの問題は自分とは全く関係ないものだと思っていたが、T-GAPを行う中で問題と自分との繋がりをよく考えるようになった。例えば最近、登下校中に道に空き缶や袋などが落ちているのを見つけた。もしこのまま誰も処理をしなければ道はゴミで覆われ、そして自分もその道を通ることが困難になるだろうと、自分の影響について考えるようになった。－ (a)、(b)

・自分たちが主体的になって活動することによって社会についての理解をより深めると共にスキルを身につけることができるから。－ (a)、(c)

・産社やキャリアで身につけた力を使ってステップアップした課題をする事で成長できたとし、卒研につながるような発表のコツ・目的に向けたアプローチ方法を知ることができた。自分でやりたいことをどうしたら活動に起こせるか、というやり方を知ることができた。－ (c)

・T-GAPを通して様々なスキルや人を動かす難しさなどたくさんのことを学ぶことができたから。また、T-GAPを通してたくさんの反省が生まれ（良い点悪い点含め）今後の自分の生活に生かして行けそうだから。具体的に班員と協力するために様々な試みをしたことは良いことで今後も続けていくと共にもっといい方法を模索したいと思った。また、悪い点として自分は科目での学びと活動を結び付けることがあまりできなかったのもそこは反省して次に生かしていきたい。－ (c)

・班で同じことを行なっているけど、全員の考えが異なることがあった。一人では、考えることがなかったアイデアが出てきて、一つのことを様々な面から捉えることができたから。また、一人一人の得意分野の仕事を分担して、お互いの長所を活かしてできたから。－ (a)、(b)、(c)

・自分が大好きで将来その世界に入りたいと思っているところの現場を生で見ることができた。今までは完全にサービスを受ける側の視点でしか問題や見解をできなかったが、提供側に回ることによって提供側の苦労や頑張り、また問題も見つけることができ、卒研にもつながるような事も見つけられた。アが取りはととても大変だったが、卒研や社会に出たときに絶対に役に立つと思う。－ (a)、(b)、(c)

・T-GAPという授業自体はすごく意味のあるものだと思っているが、それを100%良いものにできるかは自分次第だと思いました。そしてその中で僕はかなり受け身側になってしまったと感じています。メンバーの2人が優秀ということが、主体的に動くと言うより頼り続けて、言われたことをやるという形になってしまったと思います。ただ得られたものもあります。今回の私たちの班のT-GAPはかなり一貫性のあるものだったと自負しているので、卒業研究の前段階として、よい論理的思考を巡らせることが出来たと思いました。－ (a)、(b)、(c)

・課題解決では話し合いだけで考えるより実際に行動したほうがはるかに効果的であるということが分かった。社会ではこういったことがずっとあるので疲れそうだが自分次第では楽しそうだなと思った。－ (a)、(b)、(c)

(a)、(b) についてコメントが多く出ることは想定していたが、(c) で掲げられたスキルについても、アクションの実現を通して生徒自身が気づき、体得していったことが、ふりかえりから見て取れる。生徒も挙げた「他者と協働する力」、「アイデアの実現力」をはじめとして、より一層多様な背景を持つ人々が集い、課題を解決し、かつ利益を生み出すための事業を考えることが求められる今日の社会において、これらは必要不可欠なスキルばかりである。1年次の「産社」・「CD」で学んだことを深化させ、3年次の「卒研」につながるスキルを身につけることができた、と述べる生徒も多く、程度に差はあれど、どの生徒も本授業で様々な経験を通し、着実に成長したと言えよう。

ここでいくつか課題についても示しておく。第一に、アクション実施までのスケジュールが過密であったことが挙げられる。4月に前年度のカナダ校外学習の事後学習に時間を割いたことは、グローバル化が進み、多様化する社会の中での生き方・関わり方について考えるなど、「T-GAP」への移行には有意義だったと考えられる一方で、やはり「T-GAP」の開始が遅くなってしまったところは否めない。特に、9月末から1ヶ月半で計画から実行まで到達させた「アクションⅠ」は、初めてプロジェクト型学習に取り組む生徒が多い現状を鑑みると厳しい部分があった。また、本年度は各グループに担当教員は決められていたものの、基本的には共通の面談や審査会での状況確認を行う形を取った。これは、本年度、都合により実質6人で授業を担当しており、更には授業日が土曜日という関係から、部活等での年次教員の出張が避けられず、生徒の実態を把握し、統一基準で安全性を担保するためであった。一方で、生徒たちの時間が活動自体よりも面談・審査会への準備に奪われてしまった部分は否めない。「時間が足りない。プリントが配布されているのにそのまま聴く時間について無駄だなあと考えたことや、グループワークとはいえ、違う認識を持った同士でやってしまったので、こういった深入りできるような活動はできなかった。」といった生徒のコメントから見て取れるように、授業時間内だけでは活動が完結せず、放課後を使って活動する生徒が想定以上に多く、部活動等の活動との両立に悩んだ生徒も少なからず出してしまったことも反省すべき点の1つである。「T-GAP」に限らず、本校では様々な教育活動が授業時間内外で展開されており、生徒によっては、優先順位をつけるのが難しい。教員が互いの教育活動について知り、認め合い、実施のバランスを考えるとともに、生徒が重点的に取り組みたいものを尊重することも必要であろう。比較的ゆとりがある夏季休業期間に、「アクションⅠ」に相当する外部団体へのアプローチ、「アクションⅡ」に相当する生徒たち主体の活動まで行えるよう、教員が継続してグループの活動をモニタリングする形式を取る方法も考えられる。

次に、リサーチスキルの指導不足である。先述の通り今年度の「T-GAP」では、3回の口頭発表



付箋を使って課題点やアイデアを共有する



保護者を交えて「課題」を考えるディスカッション

の機会、2回のレポート提出を課したが、特にレポート作成スキルについては課題が残る。24期生では、探求学習のテキストとして『学びの技—14歳からの探求・論文・プレゼンテーション』（後藤芳文ほか、玉川大学出版）を1年次より持たせ、これをもとに最低限守るべきルールについて指導した。しかし、2年次「T-GAP」の授業時間内では、レポート作成に関わるスキルを説明する時間を設けられず、基本的には該当ページを伝え、生徒たちが自習として参照する形となった。課題として出すだけではなく、書き方を指導する機会を1・2学期の間に設けておくことで、より充実したレポートになり、3学期の「プレ卒研」にもつながると考えられる。ただし、アクションを構成する段においてもそうであったが、講義型で一斉に指導をしてもなかなか生徒には届かない部分があり、実践の中から学ぶことも多い。レポート作成のスキルについて、本校でもより生徒の身につくように様々な工夫を凝らしてきているが、来年度の「卒研」本格実施に向けて、より良い指導のあり方を考えていきたい。資料7は、T-GAPを担当した年次教員が本科目の意義や生徒の変容だけでなく、運営上の課題について述べたものであるので、併せてご覧頂ければ幸いである。

最後に、高校生にできる「課題解決」について述べたい。本校に限らず、ソーシャル・アクション型の授業が昨今多くの学校で取り入れられているということは冒頭で述べた通りである。しかし、そもそも大人でさえ手をこまねく社会課題に対し、はじめて課題解決に取り組むような高校生が果たして有効な手立てを考え、実践まで落とし込むことができるのか。もちろん、そういった生徒が存在しない、とは言わないが、うまくいかないことが当たり前にも関わらず、我々教員が生徒にあまりにも高い目標を要求してはいないだろうか。大学入試の改革とともに、



活動報告会にてお互いの活動内容をふりかえる

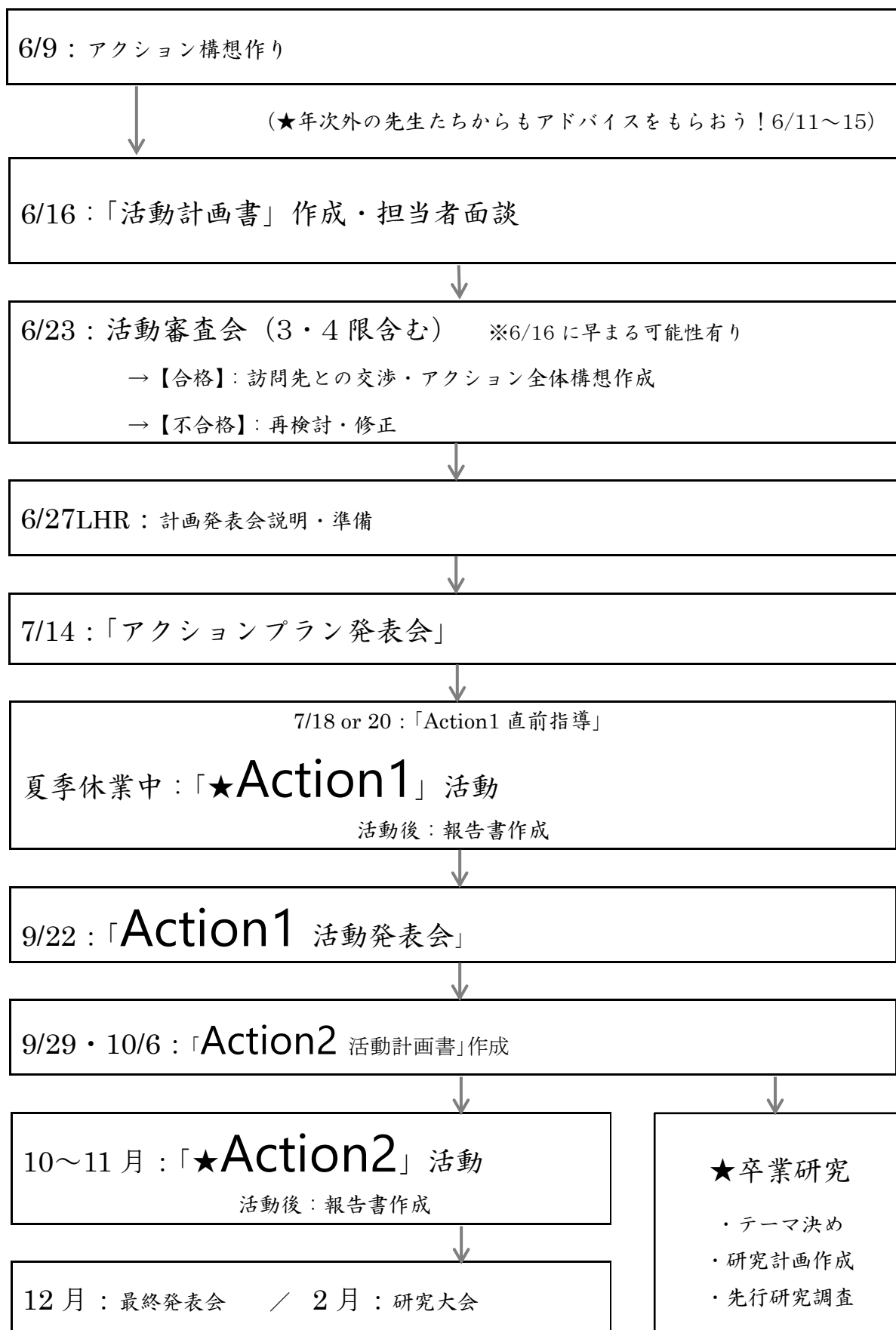
に、このような、生徒が自由に取り組める課題解決型の活動実績が評価されるようになればなるほど、進路につながるか否かという観点からこういった活動の良し悪しが判断され、教員をはじめとする大人が子どもに失敗させまいと、サポートを時に過剰に与えてしまう側面もあるように感じられる。今回の「T-GAP」活動において、特に「アクションⅡ」の活動では予想通り生徒たちはアイデアを出すことに多くの時間を割き、また実現のための計画書作りに四苦八苦していた。しかしそのような状況であっても、教員は極力生徒たちの力に任せ、具体的なアイデアが作られるのをじっと待つという方針で臨んだ。「T-GAP」の意義は、生徒が自由に何かに挑戦し、安全に失敗できる場を提供することで、失敗から学び、困難な状況にも負けず、課題に前向きに向き合い続ける態度を生徒に養うことであると考えられる。

【資料 1】平成 30 年度 T-GAP 年間指導計画

回	月 日	単 元	内 容
1	4 月 9 日	プレ T-GAP(カナダ校外学習振り返り)	個人テーマ・レポート発表準備
2	4 月 10 日	プレ T-GAP(カナダ校外学習振り返り)	個人テーマ・レポート発表準備
3	4 月 14 日	プレ T-GAP(カナダ校外学習振り返り)	カナダ校外学習発表会
4	4 月 21 日	プレ T-GAP(カナダ校外学習振り返り)	「私たちはどのような社会で生きていくのか」
5	4 月 28 日	ガイダンス	T-GAP のイントロダクションと活動目標
6	5 月 12 日	課題学習(アクションⅠ)	グループディスカッション・構想シート記入
7	5 月 26 日	課題学習(アクションⅠ)	グループづくり・アクションⅠの内容を考える①
8	6 月 2 日	課題学習(アクションⅠ)	アクションⅠの内容を考える②・計画書作成①
9	6 月 9 日	課題学習(アクションⅠ)	アクションⅠ計画書作製②
10	6 月 16 日	課題学習(アクションⅠ)	アクションⅠ審査会
11	6 月 23 日	課題学習(アクションⅠ)	構想発表会準備
12	7 月 14 日	課題学習(アクションⅠ)	アクションⅠ構想発表会
	夏季休業中	課題学習(アクションⅠ)	アクションⅠ活動
13	9 月 15 日	課題学習(アクションⅠ)	活動報告会準備
14	9 月 22 日	課題学習(アクションⅠ)	アクションⅠ活動報告会(ポスターセッション)
15	9 月 29 日	ガイダンス	グループ再編成・アクションⅡを考える
16	10 月 6 日	課題学習(アクションⅡ)	アクションⅡ計画・審査会①
17	10 月 13 日	課題学習(アクションⅡ)	アクションⅡ計画・審査会②
18	10 月 20 日	プレ卒業研究	卒研ガイダンス①校長研究講話・卒研導入
19	11 月 10 日	課題学習(アクションⅡ)	アクションⅡふりかえり
20	11 月 17 日	課題学習(アクションⅡ)	活動発表会準備
21	12 月 1 日	課題学習(アクションⅡ)	アクションⅡ活動報告会
23	12 月 8 日	課題学習(アクションⅡ)	アクションⅡ代表者報告会・卒研テーマを考える①
24	12 月 15 日	プレ卒業研究	卒研ガイダンス②文献の読み方・探し方
	冬期休業	プレ卒業研究	卒研に向けた参考文献を読む(冬休み宿題)
25	1 月 12 日	プレ卒業研究	卒研ガイダンス③研究計画の作り方
26	1 月 19 日	プレ卒業研究	テーマ探し・研究計画作成
27	1 月 26 日	プレ卒業研究	テーマ探し・研究計画作成
28	2 月 9 日	プレ卒業研究	研究計画の共有
29	2 月 16 日	研究大会	研究大会 T-GAP 発表
30	3 月 1 日	T-GAP(卒研に向けて)	構想発表会準備
31	3 月 13 日	T-GAP(卒研に向けて)	構想発表会直前準備
32	3 月 15 日	T-GAP(卒研に向けて)	卒業研究構想発表会

【資料 2】 T-GAP 活動の流れWS

T-GAP 活動の流れ



【資料 3】 T-GAP アクション I 訪問先一覧

班	訪問場所	活動概要
1	農業技術研究センター	子ども対象の農業体験の企画
2	農家カフェ・ベリーズ	収穫祭開催
3	NPO法人フードバンク狛江	日本の食品ロスと貧困問題の解決
4	八景島シーパラダイス	魚による癒やし効果の測定
5	埼玉県立川の博物館	中学生に向けた指標生物に関する講座開催
6		森林環境保全
7	ピットイン今村	バイクのデモラン、試乗
8	ニンテンドーゲームフロント	ゲームの試遊会開催
9	アートファクトリー玄	分別を意識するゴミ箱作成
10	NICT-情報通信研究機構/NTT技術史料館	動画編集・公開
11	株式会社チアリー	小中学生対象のプログラミング教室
12	NPO法人「不登校生徒」	不登校児・保護者に向けたホームページ作成
13	東松山障害者就労支援センターザック	障害者と共に働くための活動
14	集英社 Seventeen編集部	ファッションショーの開催
15		
16	坂戸市立南小学校	英語教室の開催
17	埼玉県庁観光課	外国人観光客向け埼玉PR動画の作成
18	女子栄養大学	和食を通した子ども・高齢者との交流
19	ピースワンコ・ジャパン 世田谷譲渡センター	ペット譲渡の広報活動
20	NPO法人 おさかなポスト	外来種の保護活動
21	ペットショップコジマ 浦和店	動物の殺処分を減らす
22	NPO法人 持続可能な社会をつくる元気ネット	食品ロスについてのワークショップ
23	千代田保育園	野菜の大切さを子どもに伝える
24	かすかべこども食堂ひなた	貧困問題を子どもと考える
25	日本礼儀作法協会	訪日外国人を対象日本のマナーの動画作成
26	伝統工芸青山スクエア	東武東上線伝統工芸品のマップ作成
27	株式会社ブルークス	筑坂のPR動画作成
28	越谷市立光陽中学校	社会問題を考える音楽作成
29	百舌鳥古市古墳群	古墳模型の作成
30	川越クリアモール献血ルーム	中・高校生に向けた献血PR
31	埼玉医科大学病院	子ども・病院・ビジネスに関わる活動
32	NPO法人クラブしゅーず	小学生対象外遊び考案
33	澤の屋旅館	訪日外国人へのサポート
34	東京隅田川ユースホテル	子どもに向けた異文化体験
35	埼玉県障害者交流センター	福祉に関わるホームページ、ポスター作成
36	日本バスケットボール協会	スポーツの普及活動支援
37	つくしんぼクラブ（学童）	子供向けスポーツ教育
38	NKFC（サッカーチーム）	小学向けサッカー教室開講
39	Let's Go 車椅子バスケットボール	パラスポーツの普及活動
40	メットライフドーム	小学生への野球講習会

【資料 4】 T-GAP アクションⅡ 活動内容一覧

班	活動概要／タイトル	活動内容	協力団体
a1	小中学生対象食に関するワークショップ	小豆の収穫体験と調理・食事会・食育の講義	
a2	セキュリティに対しての動画制作活動	セキュリティ人材不足に対して知識を知ってもらい興味を持ってもらう活動	
a3	小学校中・高学年のための英語教室開催	小学生に興味を持ってもらえる英語の授業の実践	坂戸市立南小学校
a4	小学生対象食に関するワークショップ	食品ロスに関するワークショップ（小学5年生対象・総合的な学習の時間）	坂戸市立坂戸小学校
a5	入院小児患者のための遊具の作成・贈呈	入院小児患者のための遊具を作成し、小児患者に送る	チクチク会
a6	バラスポーツ普及のための体験会	バラスポーツを広めるためシッティングバレー（座ったままバレー）を行うイベント開催	
a7	野菜スタンプを作るワークショップ	野菜スタンプを作るワークショップを子供たちと行い野菜に興味を持ってもらう活動	
b1	食品ロス削減のために	フードロス削減のためのポスターを作製し飲食店に掲示してもらう	
b2	小学生向けプログラミング教員の講習会	小学生向けのプログラミング教室の開催し体験してもらう	株式会社チアリス マスタープログラミングスクール
b3	埼玉県の魅力を伝えるため	行田市の観光場所の撮影をしPR動画を作成する	埼玉県庁観光課
b4	子ども食堂での勉強会開催	子ども食堂の運営の手伝い、学習活動のサポートを行う	かすかべ子ども食堂ひなた
b5	自分たちが考えた遊びで小学生の体力向上	自分たちが考えた遊びをNPO法人しっきーず所属する子供と一緒に 行う	NPO法人しっきーず
b6	野球振興のため小学生対象の野球教室を開く	小学生対象の野球指導法を考え、体験してもらう。	
b7	小学生への異文化ワークショップ	留学生の児童とともにクイズや遊びを通した異文化交流会の開催	上広谷児童館
c1	ヒト・魚のどちらもが心地よく過ごせるために	魚を教室に飼うことで生徒のストレス軽減への影響調査	
c2	親子世代へのe-スポーツの意義の普及と意識改善	親子でゲーム体験をしてもらいゲームの有意義性の調査する	坂戸市立南小学校
c3	障害者サポートのためのワークショップの開催	障害者の疑似体験や、障害に関する講義を行うワークショップを校内で行う。	
c4	埼玉の工芸品マップを作る	観光客に向けた埼玉の工芸品マップを作り東上線駅に置いてもらう	
c5	訪日留学生に対するシェア活動	邦人留学生向けの日本についての紹介ガイドブックを作成し、ホテルや施設などに置いてもらう	
c6	子供たちに音楽やダンスの楽しさを伝える	近隣幼稚園でイーブイマーチの踊りを通して音楽やダンスの魅力を伝える	坂戸ひまわり幼稚園
c7	森林保護に対する意識向上のための広報活動	個別相談待ちの中学生対象に森林保全の大切さをレクチャー	
d1	若い人にバイクの魅力を伝える	バイクの安全運転教室の実施	
d2	お年寄りと子どものための料理交流会	調理を通した小学生とお年寄りの交流会	
d3	殺処分の現状を知ってもらう	自分たちで育てた花の苗を配布し殺処分の現状のための募金活動	埼玉県動物指導センター
d4	筑坂の知名度を上げるためのPV作成	中学生・保護者に対する筑坂の知名度を上げる動画作成・公開	株式会社ブルークス
d5	外見だけじゃない！ヘルプマークの心の代弁	①障がい者理解につながるHP作成②筑波大学での広報活動	埼玉県障害者センター
d6	地域の川を考える	川の環境保護につながるポスターを作り掲示してもらう。	川の博物館・環境学館いすみ
e1	いじめ問題を考えさせるためのPCゲーム作成	希望者を集めゲームをやってもらい感想を聞く。	
e2	小学校5.6年生に向けた英語の授業の実践	英語の得手不得手が出る時期に向けた英語の授業実践	
e3	外来種問題と向き合う	外来種の問題点と解決法を考え、る。	
e4	古墳を校内に作る	古墳を作り伝統文化を考え、古墳についてってもらう活動	
e5	バスケットボールが出来る環境を届けるために募金活動	バスケットボール施設を国内に増やすための、バスケットボールの試合会場来場者に向けた募金活動	日本バスケットボール協会
e6	子どもに対しての農業ミニ体験	筑坂で開催される子供食堂参加者との野菜収穫体験	子供食堂
f1	分別しやすいゴミ箱を作る	ゴミ問題解決のためのゴミの分別を促すボックスの設置	
f2	筑坂女子のためのファッションを考える	筑坂女子生徒に向けたファッション雑誌の作成とファッションに対する調査活動	
f3	殺処分の現状と保護施設の存在	動物の殺処分の現状を知ってもらうワークショップの開催	
f4	若者の献血に対する意識向上	献血車を校内に呼び献血を呼びかけ、献血の必要性を広める広報活動	日本赤十字社
f5	外遊び推奨のため新たな遊びを考える	楽しいドッジボールのルールを考えポスターにして小学校に掲示	鶴ヶ島市立藤小学校
f6	礼儀作法に関する動画作成	外国人に役立つ日本の礼儀作法の見本例を動画で配信	

T-GAP アクション 構想シート

(1) マインドマップの活動を通して気づいた自分の興味・好きなことを3～4つ書き出そう
分野やキーワード、それに関する状況や課題など知っていることがあれば書いてみよう
自分の興味・好きなこと

それに関して知っていること（現状・課題）

(2) 自分が持っている特技・スキル、T-GAPの活動に少しでも活かせるような過去の体験、最近学んだこと、今後挑戦してみたいこと・伸ばしたいことをたくさん書き出そう

【特技・スキル】 例)・人前で話すのが好き ・体力がある ・細かい作業が得意 ・ギターが弾ける	
【過去の体験】 例)・留学生のホームステイ 受け入れ ・児童館でのボランティア ・スポーツ大会への参加	
【最近学んだこと・今後挑戦してみたいこと・伸ばしたいこと】 例)・日本国内の教育格差 （「国際社会」の授業） ・旅をしたい（熊本とか） ・英語の力を伸ばしたい	

【資料 5】 T-GAP アクション IWS

(3) (1)・(2) で書いたことから T-GAP で取り組んでみたい活動内容を次の3つの観点から考え、アイディアを書こう（必ず3つ考えること。①～③の観点はどの順番で考えても OK！）
①「活動内容」具体的な内容がなければ、関心を持つ分野やキーワードだけでも書くこと
②「活動目的」活動は誰のためか（誰と関わりたいか）、活動にどんな意義があるかなど
③「特技・スキル・経験」活動に少しでも活かせるような特技や過去の体験、学んだこと、今後挑戦してみたいことなど

	① 活動内容	② 活動目的	③ 特技・スキル・経験
I	分野： _____ 当てはまるものに○（C・A・S）		
II	分野： _____ 当てはまるものに○（C・A・S）		
III	分野： _____ 当てはまるものに○（C・A・S）		

(5) 自分のアイディアを友だちに見せて、最低2人からコメントを書いてもらおう
【1人目：2年 組 氏名 _____】
「良いと思ったアイディアとその理由」
「より良くするためのアドバイス」
【2人目：2年 組 氏名 _____】
「良いと思ったアイディアとその理由」
「より良くするためのアドバイス」

T-GAP アクションⅡ 活動計画書

★グループNo () ★メンバー名 ()

1. アクションⅠからアクションⅡへ

(1) アクションⅡのタイトル *～に対する○○活動、など簡潔にまとめる。

(2) 問題意識 *アクションを通してどんな課題に変わり、その解決に向けて貢献していきたいか。

(3) アクションⅠについて
【内容】 *どこで (何を対象に) どのような活動をした、という形で。

【気づいたこと・学んだこと、アクションⅡへの展開】 *失敗や活動内容の変更も含む。

(4) アクションⅡの概要
【内容】 *内容を簡単に、制作の場合は公開日とその場所を書く。

【日時】 月 日 () : ~ : 【場所】

【主催者 (当てはまるものに○)】
a. 生徒のみ b. 協力団体あり (b. の場合、下に必要事項を記入)
団体名: (所在地: 県・郡 市・町)
連絡先: (担当者:)

【対象者と募集方法】 *制作の場合は告知方法 (あれば)・公開期間を書く。
対象・人数: () 人
募集方法:
募集期間: 月 日 () ~ 月 日 ()

2. アクションⅡの具体的な活動内容

(1) 内容の詳細 *何らかの活動を行う日は当日の決りを記入欄まで。映像等の作成を行う日は構成等を書く。

(2) 実施上の留意点と対処法 *想定される問題 (安全等) とその対処法を記入欄まで書く。
・
・
・

(3) 当日/公開までに行う主な準備 *計画を実行する上で必要となることを記入欄まで書く。
・
・
・

(4) 使用物品・活動費用 *学校の物品を借りる場合は「入手先」欄に「備品 (所蔵書)」と記入。

使用物品名 (co ラジカセ等)	入手先 (店の名前等)	価額	費用
			円
			円
			円
			円
			円
合計			円

審査日 2018 / / 結果 合 ・ 再 審査者

- 85 -

【資料 7】教員から見た T-GAP での学びの意義・生徒の変容・運営上の課題

本年度の実践にあたった教員が、T-GAP での学びの意義や生徒の変容、計画・運営上の成果や課題を記した。

[a]

前年度の校外学習の振り返りから、「グローバル」「多文化共生」についての考えを深め、社会で問題となっていることに目を向けるところから T-GAP の活動が始まった。その後、仲間とのディスカッションなどを通して、興味のあることがどのように社会と繋がっているか、そこにはどのような問題があり、自分たちはどのようなアクションを起こすことが出来るのか考えていった。はじめからやりたいことが明確なグループ、興味はあるがどのように自分たちが関わっていけば良いか分からないグループ、何から手をつけて良いのか分からないグループなど、スタート地点もそれぞれ。生徒たちは、与えられた課題をただこなすだけではない、「自由」だからこそその難しさも感じていたようだ。また、一つのプロジェクトを成功させるためには多くの人の協力が必要なこと、一つ一つの行動には意味があること、先を見通して計画を立てる必要があることなど、試行錯誤を繰り返しながら学んでいた。

「卒業研究」とは違い、グループで取り組むところにもこの科目の意義はあると考える。同じような興味関心を持ち、同じゴールを目指していても、すれ違いは起こる。どのようにしたら相手に伝わるのか、どのようにして折り合いをつけていくのか、悩みながらも前に進まなければならない中で、自然と「協働学習」を学んでいった。体験を通して学んだことは、難しい参考書を読むよりも多くのことを教えてくれる。社会に出たら必ず他人と関わり合い、協力しながら生きていく。その縮図とも言えるこの活動を通して生徒が得たものは大きいだろう。生徒たちは、これから「個」に返り、卒業研究を進めていく。この 1 年間で学んだことを生かして、それぞれの集大成となる研究を行ってほしい。(外国語科 小石川 瞳)

[b]

T-GAP は、1 年次と 3 年次の学びをつなぐ大きな役割を担っている。この 2 年次での活動の良し悪しが、その後の進路選択に影響すること、現 3 年次の進路選択の様子から見る事ができる。特に、本校では、3 年次に個人での課題研究である「卒業研究」が控えており、T-GAP におけるグループでの課題解決型の学習は、卒業研究に必要な能力・スキルの下地を作るうえで重要な過程（課程）である。T-GAP では、自らの興味関心に合わせて課題を見つけ、同じような課題意識を持った仲間とグループを作り、協力して課題の解決を行っていく。課題を設定するための論文検索や解決方法を考えるためのエビデンスの収集など、基礎的な研究スキルを身に着けることが求められた。なれない作業ということもあり課題設定や計画立案では、多くのグループが苦勞していた様子であった。また、グループ内での役割分担や協力が、アクションを起こすうえでとても重要な要素となっており、ときには意見が対立しながらも、最善の解決策を求めて試行錯誤をして活動を行うことで、他者との協働の難しさや重要性を感じていたのではないだろうか。まとめの発表では、活動を通して、学校内外の人々を巻き込んでいき、学内にとどまらない活動を行うことで、視野の広がりや新たな気づきを得ていることを確認することができた。特に、普段の学校生活では見ることができない生徒たちの表情や行動を、アクションの中で垣間見ることができたことは、とても新鮮であった。普段の授業では考えるだけで終わってしまうことが多いが、T-GAP では実際にアクションを起こしその効果や影響を肌で感じることができるところに、この授業の意義があるのではないだろうか。(保健体育科 松川 想)

[c]

アクションⅡまでを振り返ってみると、特に2学期が慌ただしかった。9月末から1ヶ月半で実行まで到達させる計画は、初めてプロジェクト型学習（PBL）に取り組む生徒が多い現状を考えると無理があったように思う。また課題の設定や解決方法を考えさせる上で必要な情報収集や原因の分析、先行事例の調査はアクションⅠに関連する学習活動であったが、期日までに審査を通すことが優先され、十分に時間を取ることができなかった（アクションⅡでも同様）。これらのリサーチスキルについて1学期のうちにある程度指導しておく、3学期の「プレ卒業研究」にもスムーズに移行できる。

本年度は授業日をほぼ6名の教員で担当し活動班への目配りが行き届かなかった点、1年次末に実施する校外学習の事後学習を充実させようとする「T-GAP」の開始が遅くなる点などを考えると、上記の課題はやむを得ないところもある。重要なのは「T-GAP」の重心をPBLのどこに置くかということだろう。自分たちでアクションを起こすという「提案・実行」を重視するなら、審査でなく担当者面談制にして夏休みにアクション（本年度のアクションⅡ）を行い、自己評価と修正を経て2学期に再度アクションを実施する方法も有効だと考える。

本年度の「T-GAP」は3つの目標を設定している。12月実施のアンケートでは、活動の性質上、目標（a）（b）の多様な視点や当事者意識、協働の重要性へのコメントが多いことは予想されたが、（c）の自己について触れた生徒もいた。特に班内の衝突や計画の難航など困難を乗り越える過程で短所を克服したり自身の成長を感じたりしている。PBLの場合、どんな結果が出せたかよりも、先回りせず自由にさせてみて結果から何に気づけるか、得たこと・考えたことを次の行動に活かせるかが重要になってくる（もちろん最低限のガイダンスは必要であるが、何が最低限かというのも議論すべき問題である）。これから始まる「卒業研究」も関わっていく社会でも、物事は単純かつ簡単には進まない。失敗から学ぶ場を提供できること、困難な状況でもあきらめず前向きに取り組む気持ちを育てられることが「T-GAP」の意義ではないだろうか。（国語科 塗田 佳枝）

[d]

T-GAPのアクションを実施するまでに生徒たちはいくつかの活動経験を積んできている。主なものは1年次「産業社会と人間」における職場・施設訪問と「キャリアデザイン」で準備し、校外学習カナダで実施したトロント市内班別自主研修である。職場・施設訪問は前年までは学校が事前に準備した場所を訪問していたが、この学年からは活動班で見学先を決めアポイントメントを取るやり方に変えた。これはT-GAPでのアクションを先取りする新しいチャレンジであった。しかし、交渉が進まない班も見られたが多くの企業がCRS活動の一環として訪問者を受け入れる体制が整っていたため順調に計画を遂行することができた。トロント市内班別研修は異国での活動であったため計画通り進まない班もあった。その中で校外での活動は如何に計画・準備、そしてシミュレーションが大切に気づかされる貴重な経験となった。

これらを基にT-GAPのアクションを実施してきたが予想以上に険しい道となりとなったようだ。企業にCRS活動の土台は出来て来たのは確かだが、見学や体験の受け入れはあっても高校生との活動、協働といったアクションになるとハードルが高かったようだった。ましてやNPO法人やサークルなどの小規模の団体になると受け入れが難しかったり、形だけの活動にとどまってしまったりしたケースが見られた。さらには校内における活動においてすらアクションへの理解が得られないものがあつたのは残念であった。そんな茨の道を進んだ甲斐もあり、この一年で生徒たちはタフに育ったような気がする。失敗を恐れずチャレンジする力が次第に身に付いてきたようだ。この力が次年度生徒一人一人で行う「卒業研究」で開花することを期待している。（農業科 嶋田 昌夫）

SGH開発科目「国際社会」の実践

外国語科 福田 美紀 ・ 地歴公民科 高畑 啓一

1. 本校における「国際社会」の概要

SGH 開発科目「国際社会」は、2012 年に「国際科」の 2 年次学校設定科目として設置された。その目標として「国際社会において、他国の人々や文化などの関わりを意識しながら、社会人として生活するために基礎的な知識、能力を養う」こと掲げ、様々な取り組みを行ってきた。

初めの 4 年間は、外国語科・国語科教諭によるティーム・ティーチング（以下、TT）で、①生徒の英語によるプレゼンテーション、②新聞等の切り抜きを集めるスクラップブックづくりを継続的に実施することで、生徒の調査研究能力や英語プレゼンテーション能力の向上を中心としてきた。

SGH 指定 3 年目には、「持続可能な開発目標（以下、SDGs）」を授業に取り入れると同時に、外国語科・公民科教諭による TT に変更。類似した教科・科目との差異化を図るため、内容の充実を図り、基礎的な知識を得る機会を増やした。昨年度は自然や環境といった理系的な分野の充実を意図し地歴公民科・農業科教諭による TT で授業を行った。

2. 日本における SDGs の広まり

2015 年、ニューヨーク国連本部において「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が採択され、17 の目標と 169 のターゲットからなる SDGs が掲げられた。この目標の達成には、途上国における開発目標だけでなく、先進国も含めたすべての国とすべての人による行動を必要としている。

2016 年、日本においても政策会議に「持続可能な開発目標（SDGs）推進本部」が設置され、普遍性・包摂性・参画型・統合性・透明性と説明責任という原則が重視されながら、SDGs が推進されつつある。社会課題に取り組む NPO・NGO での活動に留まらず、民間企業が SDGs を経営戦略や CSR に取り入れるなど、新たな取り組みが行われるようになってきている。2030 年までの目標達成に向け、社会における SDGs の広がりは今後も広がっていくことが容易に予想される。SDGs について学ぶ機会を持つことは、昨今の社会を理解することのみに留まらず、生徒たちが卒業後、進路選択した先で当たり前のように SDGs に関連する活動に関わり、より良い社会を形成する市民となるにあたって有効であると考えられ、昨今、教育の現場でも多く取り入れられるようになってきている。

3. 本年度の国際社会の特徴

本年度は、基本的には昨年度同様、17 ある SDGs の目標を 1 年間のうちに何らかの形で 1 度はカバーできるよう、数ある国際的な諸課題の中からテーマを選び、生徒の視野を広げ、また理解を深めることを主眼に置いて授業を設計した。生徒の興味関心を喚起することで、生徒のディスカッションを促し、多角的な視点を得たり、自身の認識についても批判的に考察したりする力を養うため、なるべく話題になっているトピックを活用し、授業展開を行ったのも本年度の取り組みの特徴である。基本的な授業のスタイルとしては、内容に関する資料を読み、動画を視聴し、基本的な知識を得た後、全体やグループの中で自由に「対話」をし、自分の考えを深め、視点を増やすことができるようにした。

今年度は、外国語科・地歴公民科教諭による TT に再度変更した。うち 1 名が対象年次の教諭であり、生徒の実態把握を踏まえ、授業内容や方法の選択を柔軟に行うことができた。取り組んだ教材や、扱ったトピックについては、平成 30 年度「国際社会」年間カリキュラムを参照されたい。

表 平成 30 年度「国際社会」年間カリキュラム

	テーマ	活動・教材	関連するSDGs
1 学期	【ガイダンス】	・世界地図とイメージ：情報の偏り	
	【全般】	・「世界が100人の村だったら」	SDGs- All
	【教育】	・「世界一大きな授業」	SDGs- 1, 4, 5
	【経済】 【格差】	・貿易ゲーム	SDGs- 1
	【言語】	・国際語としての英語のあり方	SDGs- 1, 2
	【多文化共生】	・「映画HAFU」 / 「アフリカ少年」	SDGs- 10
	【グローバリズム】	・「国際」を学ぶ意味とは	SDGs- 4
	【スポーツ】 【人権】 【格差】 【公正】	・ワールドカップにおける格差問題 ・多くの人に開かれたサッカーのルールづくり	SDGs- 3, 5, 10, 16, 17
	【SDGs】	・インドネシア高校生の受入 ・SDGsについてディスカッション	SDGs- All
	【SDGs】	・1 学期のまとめ（SDGsの観点から）	SDGs- All
	【スポーツ】 【人権】 【格差】 【公正】	・多くの人に開かれたサッカーのルールづくり ・作成したルールに基づいた試合の実施	SDGs- 3, 5, 10, 16, 17
2 学期	【差別】 【偏見】	・「タトゥー」について（入れ墨と文化）	SDGs- 4, 10
	【ジェンダー】	・女の子と玩具、職業選択について（「LEGO社への手紙」）	SDGs- 4, 5, 8, 10
	【高齢化社会】	・「忘れてもいいレストラン（認知症）」	SDGs- 3, 8,
	【倫理】 【公正】	・フェアトレード / ・トロッコ問題	SDGs- 1, 2, 8, 10, 12
	【環境問題】	・生物の多様性について	SDGs- 13, 14, 15
	【差別】 【公正】	・入試における差別	SDGs- 4, 5, 8, 10, 16
	【ジェンダー】	・ディベート（アファーマティブアクション）	
	【環境問題】	・インドネシアにおける森林保全	SDGs- 8, 13, 14, 15, 17
	【SDGs】	・ESDシンポジウム参加	SDGs- All
	【SDGs】	・SDGsに関わるリサーチ	SDGs- All
	【SDGs】	・2 学期ふりかえり（SDGsのつながり）	SDGs- All
3 学期	【社会におけるSDGsの取り組み】	・社会におけるSDGsの広まり	SDGs- All
		・SDGsに取り組む企業調査	
		・企業調査・班決め・アボ取り	
		・インタビュー調査準備	
		・インタビュー調査準備・まとめ	
		・インタビュー結果まとめ	
		・発表準備	
		・研究大会での発表	
		・3 学期のまとめ	

4. 本年度の取り組み

1 学期には、国際的な諸課題についての理解とその考察をしていくことに重点を置いた。その際、体験型の授業を取り入れることを心がけた。例えば、自分たちでサッカーのルールを考え、「幸福・正義・公正」の状態についてプレーをしていく中で学んだりすることで、具体的に何が問題で、何に困っているのかなどを考えることを通し、扱う課題を「自分ごと」としてとらえられるようにした。

2 学期には、トピック学習を中心に思考を深め、多様な視点の獲得を目指した。「フェアトレード」をトピックとして取り上げた際には、まず、フェアトレードを解決するためにどのようにしたらよいか検討、その後「トロッコ問題」を通して正義を考えることで、人間は判断のジレンマに陥ることを認識する。その後、フェアトレードを異なる視点でもう一度検討することで、生徒の自己認識・変容を促した。そして、2 学期のまとめとして、自分たちでトピックを振り返りながら SDGs と関連付け、SDGs が様々なものと関連することを再確認し、トピックと SDGs の認識の深化を行った。

3 学期は 1・2 学期を通して学習してきた SDGs を踏まえて、社会の中で SDGs が実際にはどのように取り扱われ、広まっているのかについて、企業の SDGs に関する取り組みを対象に追跡することとした。SDGs は国際的な諸課題の解決に目が向けられるが、企業の経営戦略としても取り入れられていることは既述の通りである。そこで、キャリア教育の観点を取り入れ、日本で SDGs を取り入れている企業を調査し、授業とは異なる視点を学ぶことで、SDGs についての理解を深める活動とした。

5. 成果と課題

今年度の成果としては、生徒がグローバルと身近なことをつなげて考えられるようになったこと、異なる他者との「対話」から自身の認識を問い直すことができたこと、SDGs や課題を複眼的・批判的に考察することができるようになったことが挙げられる。

具体的には、生徒から 1 年を振り返り、国際社会を「今、自分が生きている社会。人との関係を持っていないと生きていけない社会。次々に変化する。私達がそれをつくっている。」ととらえるコメントや、「SDGs を知ることで、できることの幅が広がりました。これからはその学びを自分の興味のある分野にいかにしていかせるかを考えていきたいです。」などのコメントが見られた。これらからは、1 年間の学びを通し、生徒がグローバルと日常における彼らにとって身近なことをつなげて考えられるようになったことがうかがえる。

また、「自分の考えをだれにも否定されず、そういう意見もあるよねと受け入れてもらえる経験が今まであまりなかったので、新しい体験だったので楽しかったです。たくさんの知識を持つ人たちと意見の交換をして、物事の捉え方が変わったり、見方が変わったりニュースを見るのが楽しくなりました。」というコメントからは、今までは不十分であった異なる他者との「対話」から、自身の認識やステレオタイプに気づくとともにその妥当性を問い直し、それらを協議することで、新たな「楽しさ」や「興味関心」を見出すことができたとも考えられる。そして、「普段考えないようなことも、当たり前になっていたことも、すべてこの授業を通して新たな見方をするきっかけになったり、広い視野で問題を見ることができるようになりました。」というコメントは、SDGs や課題を複眼的・批判的に考察することができるようになったことを生徒自身が認識していることが考えられる。

一方、課題としては、学習するトピックの選出と、SDGs をどのように関わらせていくかということである。「授業で取り上げることが発展途上国に関係することが多く、個人的にはヨーロッパや先進国のことについても学びたかった。(SDGs に関係させている以上しょうがないのかもしれないが。)」という生徒のコメントにもあるように、国際社会、特に SDGs を関係させていく中で、比重の偏りがあった可能性がある。また、SDGs の取り扱いについても「ゴール」としてなのか、「ツール」としてなのか、SDGs の認識が多様化していく中で、どのような取り扱われ方がされているのか、どちらの側面も考えることができるようなトピックやきっかけを提示していくことが求められている。今後、引き続き SDGs を始め、グローバルイシューへの関心を持ち続けることで、より良い授業実践につなげていきたい。

平成30年度入学 1年次「SGクラス」の現状

現1年次の生徒を対象とした平成30年度入学生選抜では、従来の「SGⅠ型」(国内生徒対象の入学者試験)、「SGⅡ型」(海外帰国生・外国人対象の入学者試験)に加え、新たに「SGⅢ型」(国際バカロレア・ディプロマプログラム受講生対象の入学者試験)と呼称される方法で行われ、計43名(Ⅰ型:31名、Ⅱ型:3名、Ⅲ型:9名)の生徒を選抜した。これにより、本年度の1年次SGクラスは、先述のSGⅠ型およびⅡ型で選抜された生徒(以下、SG生と略記)とSGⅢ型で選抜された生徒(以下、IB生と略記)が混在するクラスとなった。SG生とIB生は、同じクラス・年次に所属しているものの、教育課程が全く異なる。IB生は2年次よりディプロマプログラムの教育課程を履修することになるため、1年次時に日本の一条校の卒業認定に必要な必修科目を受講する必要がある。そのため、IB生がSG生とともに受講する科目は「保健」、「体育」、「社会と情報」、「グローバルライフ」(「家庭基礎」の代替となる学校設定科目)、「グローバルパスポート」(「総合的な学習の時間」の代替となる学校設定科目)の4科目のみである。学級担任としては、こうした状況下にあるSGクラスの学級経営に対して、SG生とIB生との間の人間関係形成の面で当初は不安を覚えていた。しかし実際には、SG生とIB生が学校生活の中で共に過ごす時間は少ないものの、互いの学校生活に対する目的意識の違いや個々のバックグラウンドを理解し、とりわけ分け隔てなく友好関係を築いている様子である。

生徒の家庭環境に目を向けると、アメリカ、カナダ、フィリピン、ネパール等の外国での居住歴を有する生徒が例年に比べても多く、教室内では日常会話の中で英語を用いる場面が多々見受けられる。こうした環境もあり、積極的に英会話に取り組もうと励む生徒もおり、良い刺激となっているようである。2019年1月末現在の実用英語技能検定の取得者数は、準2級取得者が15名、2級取得者が13名、準1級取得者が5名おり、1年次の段階で高校卒業程度の英語力とされる実用英語技能検定2級以上をクラスの約4割の生徒が保有している。また、2019年1月末現在で留学している生徒が1名、さらに来年度以降に留学を希望する生徒が2名おり、「グローバルパスポート」や「インドネシア語」等の本校独自のグローバル教育を指向した授業を通して、今後さらに留学希望者数が増加することが見込まれる。

その一方で、現在抱えている早急に解決すべき課題として、以下の2点を指摘しておきたい。

第一に、日本語での授業についていくことが困難な生徒への支援である。特に「SGⅡ型」で選抜された生徒の中には、日本の小学校段階で習得すべき学習内容を理解できていない生徒もいる。日本語支援員の雇用やオンライン学習を活用したリメディアル教育の充実等、校内での支援体制の構築が急務である。

第二に、学校側・生徒側の「グローバル教育」という言葉に対する認識の齟齬である。本校はSGH校として、「グローバル人材の育成」を教育目標とし、「グローバル教育」にこれまで尽力してきた。この「グローバル教育」という言葉の定義や解釈は広範にわたるが、大まかには「学習者に地球的視野を持たせ、地球規模の問題に取り組む態度や行動力を身につけさせるための教育」

といえよう。しかし、生徒の「グローバル教育」という言葉の認識には、「インターナショナル・スクールのように英語で授業を行う教育」、「生徒一人一人の個性を尊重する教育」といったように解釈している生徒もいる。こうした学校側と生徒側の「グローバル教育」という言葉の意味解釈の齟齬によって、海外渡航歴のある生徒が日本語での授業についていくことに困難を示したり、生徒指導に対して抵抗感や嫌悪感を示したりといった問題が生じていることもまた事実である。こうした背景を踏まえ、「本校が目指すグローバル教育とは何か」について生徒募集時や入学後の生徒への十二分な説明をするとともに、教員側も授業方法の工夫といった教材研究を継続的に実施していくことが必要となろう。

(文責：1 年次 SG クラス担任 斉藤真吾)

平成29年度入学 2年次「SGクラス」の現状

SGクラスには、多様な背景を持っており、海外研修や課題研究など、主体的に校内外での活動に積極的に参加を希望する生徒が多く集まる。24期生SGクラスには、海外からの帰国生徒が3名、外国籍の生徒が1名在籍する。2年目を迎えたクラス・生徒の様子について担任としての所見を述べたい。

本校では、国内外からの来校者・留学希望者が多く、SGクラスにおいて英語科の授業はもちろん、多様な授業の中で受け入れを積極的に行っている。本年度は、タイ人留学生を年度当初の4月から12月までの9ヶ月間、姉妹校であるコルニタ高校からの留学生を1ヶ月間受け入れた。彼女たちが積極的に周りの生徒と関わり、日本語・日本文化を習得しようという彼女たちの姿勢を見て、生徒たちは大いに刺激を受けていた。また、同じ総合学科のSGH校であり、農業を通した学びを重視する愛媛大学附属高校の生徒が来校した際は、同じく生物資源について学ぶSGクラスの生徒が共に合宿をしながらアセアン諸国の米文化について学び合った。フィリピン大学附属高校の生徒が来校したときは、日本とフィリピンの持つ社会課題とその解決策についてグループディスカッションを行った。それらの活動を通し、多くの新たな知見を得たようであった。

また、校内外のSGH関連のプログラムに参加し、活躍する生徒も多い。特にインドネシアにおける国際フィールドワーク参加者の5名全員がSGクラスの生徒であったことから、普段の日常会話の中で互いが参加したプログラムで学んだことを共有し、影響を与え合っている様子を見ることができた。これらの活動を通し、自分とは異なる他者と共に学び、何かに取り組む、ということが当たり前になってきたように感じられる。

SGH関連の活動での学びを通し、英語学習への意欲や関心が高まった生徒も多く、留学や海外大学への進学を進路の選択肢に挙げる生徒も増えてきた。英語外部検定試験を受験する生徒の数は、他のクラスに比べて圧倒的に多い。学校として受験を奨励していた英語検定に関しては、本年度第2回までで39名中37人が準2級以上を取得しており、高校卒業程度とされる2級取得者はうち10人である。さらに準1級に挑戦し、合格した生徒が2人出ている。このことから、本校生徒、特にSGクラス生の英語学習に関する意識、並びに運用能力の両方が向上していると結論付けることができよう。これからも継続して、英語のみならず、より多くの人と対話をすることを可能とする外国語の習得を奨励していきたい。

「グローバル」という言葉からは、しばしば英語の運用能力ばかりが連想されがちである。しかし、それ以上に多様な価値観が混在するこの社会の中で、他者を尊重しながらどこかで折り合いをつけ、どのような時でも諦めずに前向きに生きる態度こそ、不可欠なものであろう。卒業までの1年間で、本校だからこそ得られるたくさんの学びの機会を通し、なるべく自身とは異なる存在に出会うことで自分にとっての「当たり前」を疑い、様々な価値観を受け入れるとともに、他者を助け、助けられながら協働できる姿勢をより一層、育んでいきたい。

(文責：2年次SGクラス担任 福田 美紀)

平成 28 年度入学 3 年次「SG クラス」の現状

平成 28 年度入学生は、SGH 最終年度（平成 30 年度）に卒業する。すなわち、平成 28 年度入学生（総合科学科第 23 期）は、SGH 完成年度の学年となる。

1. 生徒概要

SG 入試を突破した 45 名が入学した。その内訳は、以下の通りである。

- ・単願 31 名
- ・併願 14 名

そのうち、英語のみで学力試験及び面接を受験することができる SG II 型入試を突破して入学したものが 6 名いる。6 名中 5 名の英語力は、相当に高い。一方で、6 名中 2 名の日本語力は、通常の一条校で授業を受ける水準に達していない。出自や言語のバックグラウンドにおいても、多様な生徒が集まる集団となった。

2. 英語の成績

入学前から相当英語力の高い生徒がいたが、現在、在籍 43 名中 32 名が英検 2 級以上の級を取得した。この数値は、今までの本校にはなかった人数であり、一定レベルの英語力が SG クラスの特徴である。

3. 高校留学という選択肢

SG クラスから 2 名の生徒が、現在インドネシアの姉妹校に留学中である。2 名とも 2 年次において「国際フィールドワーク」を履修し、インドネシアに渡航した経験がある。その経験に基づき、課題研究活動をインドネシアで取り組みたいという希望を抱き、1 年間の留学を決断するに至った。

留学を特別な選択肢にしないことは大切である。一方で、留学中の課題研究活動をいかにサポートしていくか、日本側の後方支援体制の確立も重要な課題である。現状では、担任がすべてを引き受けている状況であり、現地校と連携した指導体制のあり方を模索する必要がある。

4. 課題研究活動について

「卒業研究」においては、筑波大学の研究室から協力を得た生徒や学外での諸活動や調査に積極的に関わり、卒業研究を完成させた生徒が見受けられた。2 年次「T-GAP」から続く「考動力」を生かしている生徒が出てきたことは、課題研究活動を軸に展開するカリキュラムデザインが、一定程度機能していることの証左であると評価している。

5. 進路選択について

目指す進路は多様であるが、総じて 4 年制大学に進学を希望する生徒が多い。例年に比べて、一般入試で進学を目指す生徒が多い傾向にある。結果が出そうなのは、2019 年 3 月となるまで、それまでの間、動向を注視していきたい。

（文責：3 年次 SG クラス担任 吉田賢一）

日本語支援の状況

1. 日本語支援の概要

(1) 本年度の概要

SGⅡ型入試は中学校時代を外国で過ごした生徒、外国籍を有する生徒を対象としており、日本語が母語でない者（以下、JSL生徒）もいる。SG入試が始まって2年目の平成27年度末に日本語支援担当が置かれ、支援のあり方を検討してきた。本年度も、平成28年度に決められた方針（①授業開始前に日本語力を把握し、必要であれば「国語総合」の時間に取り出し授業を行う、②日本語力やカリキュラムの違いによって理解が困難な場合の評価方法）に従って支援を進めた。なお日本語指導のため、日本語教育を専攻する大学院生に日本語支援員をお願いしている。

本年度変更になった点は、日本語支援の校務分掌上の位置づけとSGⅡ型入試の選考方法である。後者については(2)で述べる。校務分掌において、昨年度は支援教育委員会内に位置し、各年次の支援教育担当と連携を取りながら進めていった。本年度は委員長と副委員長、各年次1名（兼務可能）からなる「日本語支援委員会」となり、SGH事業を担当する研究部内に置かれた。

(2) SGⅡ型入試の選考方法について

平成27年度入学生（平成26年度実施）からSG入試が始まった。今までの選考方法は以下に示した。なお波線は前年度から変更された点である。

(a) 平成27・28年度入試

学力試験「英語」、小論文、面接 ※小論文と面接は英語・日本語の選択制

(b) 平成29・30年度入試

学力試験「英語」、小論文（英語・日本語の選択制）、面接（日本語）

(c) 平成31年度入試

学力試験「英語」「数学」、小論文（日本語）、面接（日本語）

(a)の初期段階では、受験生の日本語運用力を測る手段がなかった。海外からの帰国生だけでなく、一定数のJSL生徒が受験・入学するようになり、入学前にどの程度の日本語力があるのかを把握する必要性に迫られた結果、(b)の段階では日本語面接を実施することにした。問題のレベルは日本語能力試験N4・N3・N2程度とし、出題形式は短い問いに答える、比較的長めの説明を聞いて答える、文章を読んで答える、とバリエーションを持たせ、ある程度の「話す・聞く・読む」力が測れるようにした。

本年度行った(c)31年度入試からは、数学と「書く」力も測れるように変更された。特に数学で顕著であるが、理系科目で理解が進まないのは日本語力の不足によるのか、基礎的な知識の欠如によるのか分からないという問題が毎年起こるためである。ただ本年度の方法だと、日本人帰国生とJSL生徒を同じ基準で評価してよいのかという新たな課題も生じる。引き続き検討していくべきだろう。

2. 生徒への支援状況

(1) 入学前

入試の状況を見て、日本語の支援が必要な新入生に入学前面談を実施している。JSL生徒には家庭での使用言語や日本語の学習歴、帰国生には海外にいた期間と日本語の使用

状況を尋ね、その他、日本語でできること・できないこと・困難を感じていること、日本の学校ではどのように授業を受けてきたか、高校生活に関する要望（授業やサポートの希望、希望進路）などを聞き取っている。その結果をもとに、個々の実情に合わせた支援方針を立てている。

（２）１年次の取り出し授業

通常の「国語総合」に参加するのが難しい場合、取り出して日本語の運用能力を高める授業を実施している。指導がしやすいように週２回２時間続きとし、本年は国語科教員と日本語支援員が週１回ずつ担当した。日本語のレベルに合わせたテキストに取り組ませるほか、他教科で理解が難しい日本語の支援や、レポート・ワークシートのふりかえり等の作成補助も行っている。また学習語彙・漢字のドリルを購入させ、宿題としている。

本年度は２学期から取り出し授業に加わった生徒がいた。日常会話は流暢にこなすが、漢字・語彙の力が弱かったため、高校入学前課題の説明文の読解に取り組ませた。自分のペースで調べながら読む学習を通じて、本人は２学期当初より読解力が向上した手応えを感じている。

（３）放課後の補習

２年次以降は選択科目が増え、国語科の必修科目もないため、取り出し授業は行っていない。その代わりに、日本語支援員が週１回２時間ほど支援にあたっている。１年次の時と同様、日本語のテキストに取り組むこともあるが、年次が上がるにつれて各科目で課されたレポートや発表準備、自己推薦書などの進路関係の書類作成にかかる時間が多くなる。

（４）各科目担当者の工夫

各科目担当者は授業形態や補習、試験問題を工夫して指導にあたっている。たとえば、クラスメイトの支援を受けやすいグループ学習にする、文章を読む授業では英文のものに差し替えたり別の課題を与えたりする、試験前の放課後に補習をする、試験問題にふりがなを付けたり別の問題に差し替えたりする、などである。

３．課題

本年度「委員会」に格上げされたものの、年次と授業の教員をつなぎ組織として支援していく体制が十分に作れないことは、支援担当として毎年大きな課題と感じている。個々の生徒に対して授業担当者と年次教員が協議できる場を作れば、よりよい支援ができると思われる。またバイリンガルチューターができる大学院生を探したり、日本語教育に興味がある本校の上級生をチューターにしたりすれば、教員の負担を軽減できるだろう。

次に、授業や評価のあり方の検討を挙げたい。いくら事前に授業は日本語で行うと説明しているとは言え、J S L生徒を入学させている以上、従来の授業形態や評価に合わない者を切り捨てるのは難しい。日本人生徒の中にも、音声情報のみでは理解しにくい、手順が分かっていないと不安になる、長い文章が書けないなど、特定の学習活動に困難を抱える者はいる。よってJ S L生徒が学びやすい教育は、誰にとっても学びやすいユニバーサルな教育とも言える。

最後に、J S L生徒の母語や文化を活かしたプログラムを作ることも課題である。どうしても日本の文化や日本語を学ばせることが中心になるが、彼らの国の文化や外から見た日本について話してもらうことは、日本人生徒にとって有益であるとともに彼らの文化を保障することにもなる。S G II型入試合格者のように、多様な背景を持つ生徒が集まっている強みを活かした教育を考えていく必要があるだろう。（文責：塗田佳枝）

V 平成 30 年度評価活動報告

1. 評価の目的と今年度の評価活動

SGHの研究開発では、「共創的対話力」の育成を目指しており、具体的な力として「相手を受け入れる」力、「自分でたしかめる」力、「自ら行動する」力、「一緒にプロジェクトを実施できる」力の育成を重視している。評価活動では、①SGHに関する文科省に提出している設定目標が達成できているかを評価すると共に、②生徒等の変容を調査し、目指す人材像が育成されているか、研究開発の効果について検証し、開発活動にフィードバックする。

外的評価として、設定目標の達成状況を調査すると共に、内的評価として生徒の意識についてアンケート調査、自由連想法などの質的調査を実施した。平成30年度は5年計画の最終年にあたる。様々な活動を行った結果、生徒の意識がどのように変容したのか、質的な調査を今年度も重点的に取り組んだ。

2. 調査結果

(1) 設定目標の達成状況

目標達成状況シートに準じて、アウトカム及びアウトプットの諸項目についてその内訳を提示する。

1) 平成30年度 アウトカム

- a) 自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数 SG 66 人、IG113 人
 - ・ホームステイバンク登録者 50 名 (SG27 名、IG23 名)
 - ・地域でのボランティア・社会貢献活動 SG30 名、IG60 名
- b) 自主的に留学又は海外研修に行く生徒数 SG 10 人 IG 2 人
 - ・長期留学 インドネシア SG 3 名、アメリカ SG 1 名
 - ・SGH 国際フィールドワーク SG 7 名
 - ・国際的視野に立った卒業研究支援プログラム IG 1 名
- c) 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合
SG27 名 (18%) IG46 名 (12%)
- d) 公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数 SG3 人 IG2 人
 - ・東京学芸大学 SGH/SSH 課題研究成果発表会 SG3 名
 - ・第46回毎日農業記録賞 高校生部門 優秀賞 IG1 名
 - ・日本菌学会第62回大会学生口頭発表中高生ポスター賞 優秀賞 IG1 名
- e) 卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力として CEFR の B1～B2 レベルの生徒の割合
 - ・3年次生160名中、CEFRのB1～B2レベルの準1級保持者が4名、2級保持者が47名の計51名、うちSGクラスの生徒は44名中32名、人文社会コミュニケーション科目群のSGH対象生徒は17名、SGH対象生徒のCEFR B1～B2レベルの取得率は約60%
SGクラス：英検2級以上：32人
IGクラス：英検2級以上：18人（うち5人が人文社会コミュニケーション科目群選択者）
- f) 卒業時におけるインドネシア語検定E級以上取得者数 SG1 人

2) 平成30年度 アウトプット

- a) 課題研究に関する国外の研修参加者数 計 21 名
 - ・国際 FW@インドネシア SG 9 名

- ・日本インドネシア高校生 SDGs ミーティング SG 9 名 IG2 名
- ・卒研支援@シンガポール IG 1 名
- b) 課題研究に関する国内の研修参加者数 計 49 名
 - ・国際 FW 入門@黒姫高原 23 名
 - ・長野県上田高校主催「北陸新幹線サミット」 17 名
 - ・東京学芸大学主催 SSH/SGH 課題研究成果発表会 8 名
 - ・栃木県立佐野高校「海外グローバル研修課題研究発表コンテスト」招待発表 SG1 名
- c) 課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数 14 校
ボゴール農科大学附属コルニタ高校、林業省附属全 5 校、カセサート大学附属 2 校、フィリピン大附属ルーラル高校、UBC、SDGs ミーティング参加校
- d) 課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数） 計 40 名
グローバルライフ出張講義 3 名、筑波大学 AIMS プログラム留学生 34 名、国際 FW 入門 筑波大学現職教員留学生 2 名、野尻湖ナウマンゾウ博物館学芸員 1 名
- e) 課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数（人数×回数） 16 人
JICA 国際協力機構 2 名、インドネシア環境林業省 2 名、IC ネット 5 名、地球環境パートナーシッププラザ 2 名、Asia pulp and paper group 2 名、株式会社 Rubah 1 名
- f) グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数 86 人
 - ・JICA 高校生エッセイコンテスト 20 名
 - ・IC ネットビジネスコンテスト 42 名
 - ・Global Enterprise Challenge 16 名
 - ・東京学芸大学 SGH/SSH 課題研究成果発表会 8 名
- g) 帰国・外国人生徒の受入れ者数（留学生も含む。） 計 46 人
長期留学生（インドネシア、タイ、台湾 2、デンマーク、コルニタ 5 名）、シンポジスト 11 名、フィリピン 4 名、在校生のうち帰国生・外国籍生徒 21 名
- h) 先進校としての研究発表回数 7 回
SDGs ミーティング@ジャカルタ、高校生国際 ESD シンポジウム、SGH・総合学科研究大会、全国 SGH 高校生フォーラム、長野県上田高校主催「北陸新幹線サミット」、東京学芸大学、栃木県立佐野高校

（２）生徒の変容調査

a. 3 年間の学びと変容

1. SGH カリキュラムと学びのシークエンス

本校の SGH カリキュラムは、生徒がグローバルなテーマで課題研究活動に取り組むことができるように意図されている。その成果を定量的に示すことも大切だが、定性的に示すことも同時に必要である。本章では、数人の生徒の学びを素描することを通じて、SGH のカリキュラムが学びのシークエンスにどう影響を与えたか、考察を試みる。紹介する生徒は 3 年次生（2016 年 4 月入学生）である。

①KY さん（女子生徒）

KY さんは、SG 入試を突破し、3 年間 SG クラスに在籍した生徒である。入学当初は「英語を学びたい」という希望を抱いていたが、卒業間際のアンケートでは「英語を第一に学ぶのではなく、ツー

ルとしての英語に変化した」と感想を述べている。では、彼女がそう思うようになった転機とは何なのか。

答えは、KY さんの課題研究活動にある。KY さんは、「フィリピンで女性の社会進出が進んでいるのはなぜか？」という問を立て、卒業研究を進めてきた。そのプロセスで、現地調査を実施するためにフィリピンに渡航した。ジェンダーの専門家や家政婦さんたちに精力的にインタビュー調査に取り組んだ。この経験から、彼女は英語を課題研究活動において求められるツールだと認識するようになったのである。

なお、進路は津田塾大学学芸学部国際関係学科に進学する予定である。

②AT さん（女子生徒）

AT さんは、IG クラスに 3 年間在籍した生徒である。入学当初は「英語の授業がおもしろかった」と言い、英検にも積極的に挑戦していった。

しかし、彼女の学びは 2 年次で変化する。すなわち、「生物資源・環境科学科目群」の履修を通じて、畜産に興味を持ったのである。学びの興味が英語から畜産にシフトした結果、「代用卵殻によるニワトリふ化の精度向上」というテーマで、精力的に卒業研究に取り組んだ。なお、進路は北海道の酪農学園大学農食環境学群に進学する予定である。

③YK さん（男子生徒）

YK さんは、福祉の勉強に取り組むため、本校に進学した。2 年次からの科目選択においても、福祉の科目を多く履修している。しかしながら、インドネシアからの留学生との交流を通じて、国際交流に興味を抱くようになった。そして、2 年次の春に「イオン 1%クラブ ティーンエイジアンバサダー（高校生交流事業）」に参加し、インドネシアに渡航したことをきっかけに、東南アジアへの興味・関心が一気に加速した。その結果、3 年次には時間割外科目「インドネシア語 I」を履修し、積極的に留学生との交流にも取り組んできた。

本校は、SGH 指定以来、留学生の受け入れ及び送り出しに積極的に取り組んできた。また、海外渡航のチャンスがあれば、学内外のプロジェクトに積極的に応募してきた。そのような校内リソースの結果として、YK さんのように福祉に加えて東南アジアという新しいきっかけを創出することができた。なお、進路は東京国際大学に進学し、将来の目標は東南アジアで福祉ビジネスを立ち上げることだそうだ。

④FH さん（女子生徒）

FH さんは、SG クラスに在籍した生徒である。入学当初は「環境」「国際」をキーワードにした学習に取り組みたいという希望を抱いていた。しかし、彼女が選択した進路は聖路加国際大学看護学部である。何がきっかけだったのだろうか。

その答えを SGH 開発科目「国際フィールドワーク」に求めることができる。FH さんは、2 年次の夏期休暇に「国際フィールドワーク」を履修して、3 週間にわたりインドネシアに渡航した。その際、食あたりに苦しみ、安全・安心な医療の大切さを痛感したという。

「現場」での活動は、人に転機となる経験を与えることがしばしばある。本校の「国際フィールドワーク」は、まさにそのひとである。5 年間で 35 名の生徒が履修したが、そのうち 5 名が帰国後に高校留学を決断している。

⑤TH さん（男子生徒）

TH さんは、中学校での成績は振るわなかった生徒である。しかし、彼は福島大学食農学類に合格し、進学する予定である。TH さんを変えた転機とは何なのか。

ひとつは、2 年次の「T-GAP」という授業である。この授業では、生徒はグループで社会課題を設定し、ソーシャルアクションに取り組むことが期待される。TH さんのグループは、食育をテーマに意欲的に活動に取り組んだ。卒業前の振り返りで、「T-GAP」を通じて、企画力や行動力を鍛えることができたと述べている。

そしてもうひとつの要素が卒業研究である。TH さんは、南米原産のキヌアという植物を本校で栽培するという卒業研究に取り組んだ。彼は、卒業研究に並々ならぬ情熱を傾けて取り組んだ。その結果、ボリビア大使館に招かれて講演をしたり、加えて、毎日農業記録賞の優秀賞を受賞するに至った。

総合学科も SGH も課題研究活動を重視する点では変わりはない。TH さんは、本校の学びのリソースを上手く活用し、自身の興味・関心を徹底的に深めた結果、学習を進化させることに結実した。

2. キッカケ・フローチャート

5 人の生徒の学習シーケンスを素描した結果をチャート化した（図 1）。重要なことは、すべての学びが課題研究につながっていくこと、そして、「現場」での経験である。



図 1 5 人の高校在学中のキッカケ・フローチャート

本校の学びは、最終的には「卒業研究」に収斂する。SGH に指定されて以降、その流れは一層加速した。特に、2 年次「T-GAP」におけるソーシャルアクションと課題研究のスキルトレーニングは、卒業研究を遂行する上で鍵となっている。

また、海外でインパクトのある経験や交流をすることで、生徒の興味関心の幅は広がっている。そのことが、より深い学びにつながっている。SGH の 5 年間で海外での課題研究活動について、一定レベルの知見を得ることができた。SGH 終了後も、いかにこの知見を生かしながら課題研究活動を継続していくか、そのことが問われている。

b. 質問紙による態度・認識の変容の測定

1. 調査方法

2018 年度 4 月・2 月に 1 年次 163 名を対象に、入学当初から 1 年間の学習を経ての態度・認識変容を探るため、例年実施している国際的資質調査とともに本校の教育プログラムに対する関心や期待について自由記述式の質問紙調査を実施した。生徒の態度・認識の変容を測るため、4 月当初・授業終了時の 2 月に実施を設定した。質問紙は授業内に配布・回収し、通年比較の有効回答数は 158 であった。なお、倫理的配慮として対象者には調査目的を説明するとともに調査で得たデータは、統計的に処理し個人が特定されないこと、調査研究以外の目的では使用しないことを口頭で説明し、同意を得た上で調査を実施した。調査への参加は本人の自由意思のもと行い、いつでも拒否できることを補足した。

回答から得られたテキストデータを KH Coder を用いて解析を行った。KH Coder は、テキスト型（文章型）データを統計的に分析するためのソフトウェアである。本稿では、(1) 楽しみにしている、あるいは興味がある授業・諸活動、(2) どのような点で楽しみか、あるいは興味があるか、の 2 項目の記述内容の変容に焦点をあてる。

2. 結果と考察

(1) 楽しみにしている、あるいは興味がある授業・諸活動

これからの高校生活で用意されている各種プログラムについて、「楽しみにしている、あるいは興味がある授業・諸活動」を複数回答可で選択してもらった。4 月と 2 月の回答の分布を図 2 に示す。

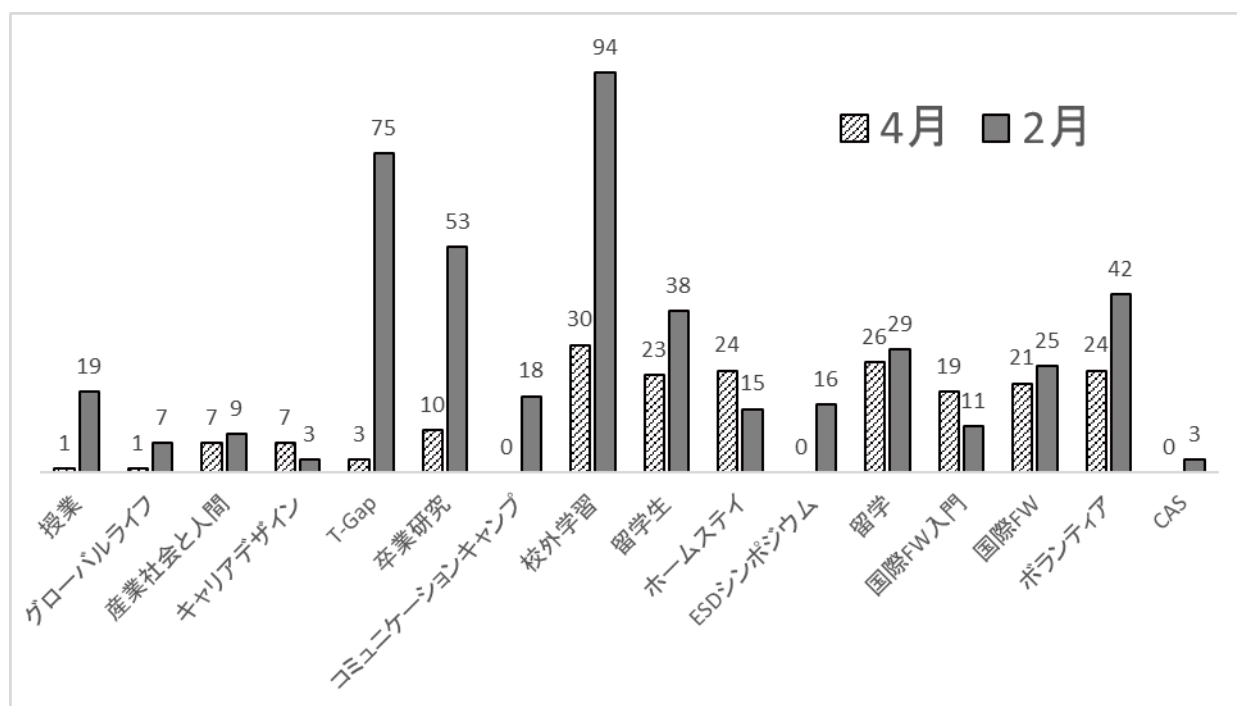


図2 楽しみにしている、あるいは興味がある授業・諸活動の回答分布の変容（4月と2月）

まず、全体的に 4 月の回答よりも 2 月の回答数が増大しており、各種プログラムに実際に取り組むことを目前として、より意識が高まった結果であると考えられる。そして、4 月と 2 月で共通して最も票を集めたのが、1 年次の 3 月に実施されるカナダ校外学習である。この校外学習で初めて海外を体験するという生徒が多く、未知なる世界での生活体験に期待を寄せる生徒が多く、渡航直前の 2 月

には4月の3倍の票が集まっている。

夏以降に希望者のみで実施される国際フィールドワーク（以下FWと記す）や留学生の受け入れ、または自身の留学などについては、今年度の取り組みの様子を見聞きしたことで関心を持つ生徒が増加している。特に2年次で取り組むT-GAPや3年次の卒業研究では2月の増加が顕著である。これは、カナダ校外学習において現地において課題研究活動を実施するために、課題発見、問いの設定、先行研究分析などのプロセスを体験させていること。そして、それらの活動が2年次のT-GAPや3年次の卒業研究に通じる課題研究のプロセスであることが寄与していると考えられる。また、2月の調査の直前に本校主催のSGH・総合学科研究大会において上級生によるT-GAPや卒業研究の発表を実際に見聞きしたことで、より一層それらのプログラムへの期待や関心が高まったことも一因として考えられる。

（2）授業・諸活動についてどのような点で楽しみか、あるいは興味があるか

設問（1）について設問（2）「どのような点で楽しみか、あるいは興味があるか自由に書いてください」に対する回答をすべてテキストにしてKH Coderで分析した結果、4月の総抽出語数3,086（うち、1,305使用）、異なり語数448（うち、328使用）、2月の総抽出語数2,978（うち、1,355使用）、異なり語数528（うち、396使用）であった。

頻出語の上位150語を抽出し、上位20語を提示した（表1）。

表1 頻出語上位20語の変化

pre調査(2018年4月)		post調査(2019年2月)	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
海外	46	自分	59
学習	46	学習	34
校外	46	校外	34
自分	34	T-GAP	33
人	34	海外	32
外国	25	行く	27
行く	25	研究	26
知る	25	人	22
文化	24	初めて	20
授業	22	学ぶ	19
カナダ	20	興味	17
研究	19	卒業	17
楽しむ	18	留学	17
ホームステイ	17	知る	16
英語	17	文化	16
学ぶ	15	英語	15
楽しみ	15	外国	15
卒業	15	ボランティア	14
国	14	楽しむ	13
社会	14	触れる	13

その後、データ概要を把握するため頻出語を用いて多次元尺度構成法（Multi-Dimensional Scaling; MDS）を実施した（図3）。多次元尺度構成法は、自由記述のテキストデータ（語）間の類似度（類似性、相違性、距離）を視覚化する手法で、出現パターンの類似する語や共起の程度が強い語がクラスターを形成して配置され、出現数が多い語ほど大きい円で表現している。

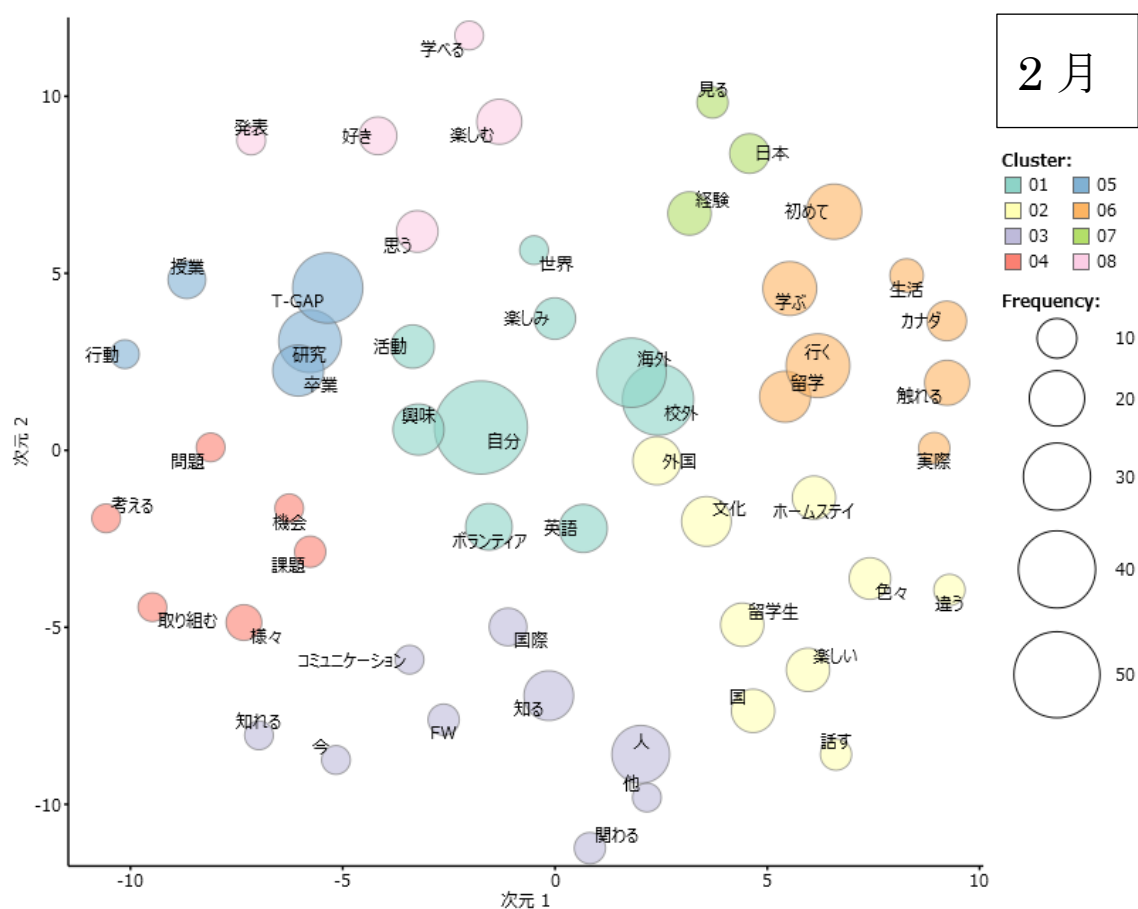
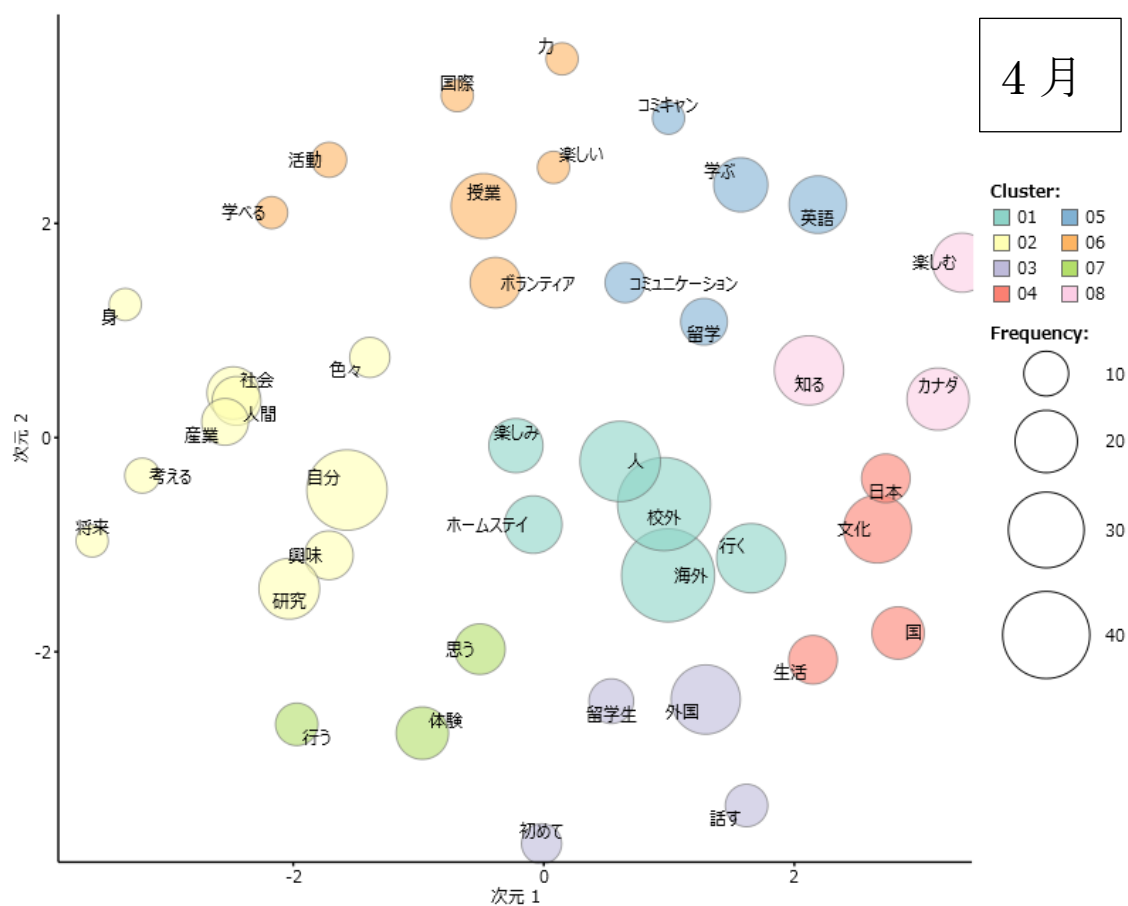


図3 多次元尺度構成法による頻出語の変容（4月：上図、2月下図）

4月と2月の総抽出語数、異なり語数の変化から、4月に比べて2月の記述では、特定の語句が頻出する度合いが強まりつつ、回答の分散傾向がみられる(表1)。4月の段階(図3上図)では、「海外」「校外」「行く」などが中央に集まり、楽しみにしている活動で最も票が集まったカナダ校外学習への言及が多いことが読み取れる。また、「産業」「社会」「人間」がクラスターを形成しており、「将来」「考える」などを学習の柱にしている1年次の必修科目である「産業社会と人間」への期待も4月段階では大きい。一方、2月の段階(図3下図)になると、「T-GAP」「卒業研究」がその数を増やしており、そこに「活動」「取り組む」などが近接している。そして、2月には「自分」が再頻出語として中央にプロットされており、4月段階では具体的に活動がイメージしにくかったであろう「T-GAP」や「卒業研究」に、自分自身を位置づけてとらえることができているということであろう。昨年までの課題として、ESDシンポジウムやSGH・総合学科研究大会などの下級生への波及効果について挙げていたが、年間を通して数回設けられている異学年合同の発表会などのアウトプットやシェアリングの場が、下級生の意欲喚起につながっていることがわかる。

(文責：評価委員会 小澤真尚、今野良祐)

進路状況

【 30年度卒業生進路状況 】

5年間の指定を受けたSGH事業の最終年卒業生の進路の特徴として以下の点があげられる。

- ① 英検2級以上の早期取得
- ② 探究活動を軸とした校外活動を活用してのAO・公募制推薦

1年目の海外校外学習での英語コミュニケーションを目標に早期から英検に意識を置き、1年次で準2級の取得、2年次で2級の取得を目標とした。1年次に校外学習があることによって、英語教育に関するモチベーションの設定が容易となり、表1からもわかるとおり、受験者が飛躍的に増加した。図1からもわかる通り、これまで数名しかいなかった2級以上取得者もその数は開始当初の10倍に向上し、今年度はついに英検1級取合格も出現した。1級取得者は帰国子女生徒ではあるが、それら生徒に触発され、学校全体で英語力向上の機運が醸成されていったことで、推薦要件となる英検2級以上の資格を満たし、大学の選択幅をひろげた生徒が増加したことは間違いない。また本校の特徴である探究活動についても、探求の成果を発信するツールとしての英語を意識し取り組めるようになったことで、シンポジウムに訪れる海外からの留学生と積極的に情報を交換し、自分の興味の幅を拡げ、学習理解を豊かに深めていくことができた。これが進路実績につながったものと考ええる。自分の興味関心を軸とした連続性ある学びと多様な交流が主体的学習者を形成した。これが可能となったのも、早期の英語資格取得により、受験期においても自身の探究活動に割くことのできる時間が増し、キャリアの根幹と最後までしっかり向き合い学習を進めることができたからであると考察する。

【 卒業後のキャリア形成の特徴 】

昨年・一昨年の本校卒業生にヒアリング調査を行ったところ、大学1年から積極的に海外をフィールドにしたインターン・各種コンテスト・人材交流を行っていることが分かった。アフリカやアジアへの教育支援ボランティアや外国の大学生との交流やコラボレーション、海外コンペや政府機関との情報交換等多様な活動を繰り返している。高校期から海外とコミュニティを形成できる環境は高校生の活動範囲のLimitlessを促し、より多様な選択軸を獲得できる学習者に成長させていることがうかがえた。

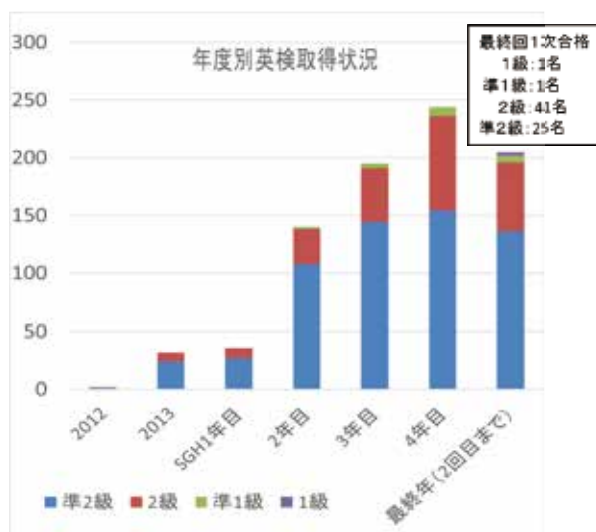


図 年度別英検取得状況

	1年-1	1年-2	1年-3	2年-1	2年-2	2年-3	3年-1	3年-2	3年-3	
18期	10	10	13	13	14	20	26	3	2	
19期	4	7	9	4	9	5	19	2	4	
20期	3	5	7	10	23	16	17	11	16	
21期	2	13	20	28	48	67	36	7	13	第1期入学生
22期	24	70	65	66	90	95	78	41	50	第2期入学生
23期	124	91	95	79	89	88	65	29	15	現3年次生
24期	25	52	39	35	53	87				現2年次生
25期	71	74	95							現1年次生

表1 入学年度別英検受験状況

表2 2018年度卒業生の主な進学先

【 国立大学 】

国際教養大学	国際教養学部	AO自己推薦
埼玉県立大学	保健医療福祉学部	社会福祉子ども学科 公募制推薦
長崎大学	教育学部	特別支援教育コース 公募制推薦
東京海洋大学	理工学部	海事システム工学科 AO自己推薦
福島大学	食農学類	農業生産観学科 AO自己推薦
福島大学	農学群	食農学類 AO自己推薦

【 私立大学 】

亜細亜大学	国際関係学部	多文化コミュニケーション学科 AO自己推薦
亜細亜大学	法学部	法律学科 指定校推薦
跡見学園女子大学	マネジメント学部	マネジメント学科 AO自己推薦
育英大学	教育学部	指定校推薦
桜美林大学	芸術文化学群	演劇・ダンス専修 AO自己推薦
神田外語大学	外国学部	アジア言語学科ベトナム語専攻 AO自己推薦
近畿大学	文芸学部	文学科 日本文学専攻 創作・評論コース AO自己推薦
工学院大学	工学部	機械システム工学科 公募制推薦
皇学館大学	現代社会日本	現代社会日本 AO自己推薦
國學院大学	文学部	中国語文化学科 指定校推薦
国際医療福祉大学	保健医療学科	言語聴覚学科 AO自己推薦
埼玉工業大学	工学部	工学科ロボティクス専攻 指定校推薦
芝浦工業大学	システム理工学部	数理科学科 AO自己推薦
十文字学園女子大学	人間生活学部	健康栄養学科 指定校推薦
十文字学園女子大学	人間生活学部	幼児教育学科 AO自己推薦
淑徳大学	教育学部	子ども教育学科 指定校推薦
城西大学	現代経済学部	指定校推薦
昭和女子大学	国際学部	国際学科 AO自己推薦
昭和女子大学	人間文化学部	日本語日本文学科 AO自己推薦
女子栄養大学	栄養学部	実践栄養学科 指定校推薦
女子栄養大学	栄養学部	保健栄養学科 指定校推薦
成蹊大学	文学部	現代社会学科 指定校推薦
聖路加国際大学	看護学部	看護学科 AO自己推薦
専修大学	商学部	会計学科 公募制推薦
専修大学	商学部	会計学科 公募制推薦
創価大学	文学部	人間科学科 AO自己推薦
大東文化大学	文学部	歴史文化学科 公募制推薦
大東文化大学	国際関係学部	国際文化学科 AO自己推薦
拓殖大学	工学部	機械システム工学科 指定校推薦
拓殖大学	工学部	情報工学科 指定校推薦
玉川大学	農学部	環境農学科 公募制推薦
玉川大学	農学部	環境農業科 指定校推薦
玉川大学	農学部	農学科 AO自己推薦
津田塾大学	学芸学部	国際関係学科 指定校推薦
帝京平成大学	健康メディカル学部	医療科学学科救急救命士コース AO自己推薦
東京国際大学	国際関係学部	国際メディア学科 AO自己推薦
東京国際大学	商学部	経営学科 指定校推薦
東京女子大学	現代教養学部	国際英語学科 指定校推薦
東京電機大学	未来科学部	建築学科 AO自己推薦
東京電機大学	理工学部	情報システムデザイン学系 指定校推薦
東京電機大学	理工学部	情報システムデザイン学系 指定校推薦
東京電機大学	理工学部	理工学科 機械工学系 指定校推薦
東京電機大学	システムデザイン工学部	情報システム工学科 指定校推薦
東京都立大学	環境学部	環境創生学科 指定校推薦
東京農業大学	生産事業学部	自然資源経営学科 AO自己推薦
東京農業大学	生物産業学部	北方圏農学科 公募制推薦
東京農業大学	国際食糧情報学部	国際バイオビジネス学科 公募制推薦
東京農業大学	地球環境科学部	造園科学科 公募制推薦
東京福祉大学	心理学部	心理学科 指定校推薦
東京薬科大学	薬学部	AO自己推薦
日本医療科学大学	保健医療学部	看護学科 指定校推薦
日本工業大学	機械工学科	指定校推薦
日本女子大学	人間社会学部	現代社会学科 指定校推薦
日本女子大学	文学部	史学科 公募制推薦

日本大学	経済学部	産業経営学科 AO自己推薦
日本大学	芸術学部	美術学科 AO自己推薦
日本大学	芸術学部	美術学科 AO自己推薦
日本大学	生産工学部	指定校推薦
日本大学	生物資源学部	獣医学科 公募制推薦
日本大学	文理学部	地球科学部 指定校推薦
日本大学	法学部	法律学科 AO自己推薦
日本大学	理工学部	土木工学科 指定校推薦
日本大学	国際関係学部	国際関係学科 指定校推薦
文化学園大学	現代文化学部	国際ファッション文化学科 公募制推薦
文京学院大学	保健医療技術学部	臨床検査学科 AO自己推薦
法政大学	キャリアデザイン学部	キャリアデザイン学科 AO自己推薦
法政大学	社会学部	社会政策科学科 指定校推薦
法政大学	文学部	哲学科 指定校推薦
武蔵大学	経済学部	経営学科 指定校推薦
武蔵大学	経済学部	AO自己推薦
武蔵大学	人文学部	英語英米文化学科 指定校推薦
武蔵大学	人文学部	日本・東アジア文化学科 AO自己推薦
武蔵野大学	グローバル学部	日本語コミュニケーション 公募制推薦
明治大学	農学部	食料環境政策学科 指定校推薦
明治大学	農学部	食料環境政策学科 公募制推薦
明治大学	農学部	食料環境政策学科 AO自己推薦
明治大学	農学部	農学科 AO自己推薦
明治大学	文学部	日本文学 AO自己推薦
明星大学	教育学部	教育学科 特別支援教育 AO自己推薦
横浜美術大学		ビジュアルコース 指定校推薦
酪農学園大学	農食環境学群	環境農学類 指定校推薦
酪農学園大学		酪農学類 公募制推薦
立教大学	経営学部	経営学科 指定校推薦
立教大学	経済学部	経済政策学科 指定校推薦
立教大学	理学部	数学科 AO自己推薦
立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部	アジア太平洋学科 指定校推薦
和洋女子大学	家政学部	服飾造形学科 公募制推薦

【 短期大学 】

國學院大学栃木短期大学	日本文学科 日本文学フィールド	AO自己推薦
埼玉女子短期大学	国際コミュニケーション 韓国語	AO自己推薦
埼玉女子短期大学	国際コミュニケーション学科	AO自己推薦
淑徳大学短期大学	人間福祉学部	AO自己推薦
東京成徳短期大学	幼児教育学部	AO自己推薦
上智大学	短期大学部	英語科 一般
埼玉医科短期大学	看護学部	指定校推薦
女子栄養大学	短期大学部	指定校推薦

【 専門学校 】

関東工業自動車大学校		指定校推薦
国際理容美容専門学校	理容学科	公募制推薦
東京工学院専門学校	スポーツビジネス科	サッカービジネスコース 公募制推薦
赤堀製菓専門学校	パティシエ	AO自己推薦
医学アカデミー	理学療法学科	AO自己推薦
医学アカデミー	理学療法学科	AO自己推薦
エコール辻東京	辻調理技術マネジメントカレッジ	AO自己推薦
資生堂美容技術専門学校	美容師科	ビューティースペシャリストコース AO自己推薦
千葉県立農業大校	農学科	推薦
東京アニメーション専門学校		AO自己推薦
東京健康科学専門学校	栄養士科	AO自己推薦
本田テクニカルカレッジ関東	一級自動車研究開発学科	AO自己推薦
ミス・パリ・ビューティ専門学校	美容学科	スタイリストコース AO自己推薦
武蔵野調理師専門学校		AO自己推薦
早稲田美容専門学校	美容科	AO自己推薦

英語科からみた英検の取り組みと5年間の成果

本校では、SGHの指定を受けて以来「平成30年度までに75%の生徒が卒業時にCEFRのB1～B2レベル程度の英語運用能力を持つこと」を目標として掲げ、英語教育を推進してきた。本校では外部試験の1つである実用英語技能検定（以下、英検）の受験を奨励し、その結果を生徒の英語運用能力を図る指標として活用している。表1が示すように、先に挙げた目標のCEFR B1～B2は、英検2級から準1級に相当する。本稿では、本校生徒の英語運用能力の程度向上したかについて、英検における結果から考察する。

SGHに指定されて以来、本校では英検の受験を奨励しており、平成30年度の受験者総数は527名（内訳：1級8名、準1級58名、2級241名、準2級220名）であった。表2から見て取れるように、SGH指定前の平成25年度の英検の受験者総数は、年間3回合計して71名と少ない数であったのが、指定を受けたこの5年間で急激に増加した。このことから、SGHの指定を受け、多様なプログラムで英語を用いることが奨励されることを通して、本校の生徒たちの英語そのものに対する関心意欲が高まり、積極的に学習に取り組むようになったと結論づけることができよう。

合格者数については表3にまとめた通りであるが、本稿執筆時点では、まだ平成30年度第3回の結果が出ていないため、第2回目までの合格者数で記載している。既に1級2名、準1級4名、2級16名、準2級30名が出ており、今後更に合格者数は増える予定である。準2級、2級の合格者数の急増から、CEFR B1レベルの英語運用能力を身につけた生徒が着実に増えていると結論づけられる。更には高校卒業程度のレベルを遥かに越えた、準1級や1級といった上位級に挑戦し、合格する生徒も出はじめたことは特筆すべき点であろう。

ここで、本校が掲げた平成30年度までに「SGH対象生徒60名の75%が卒業時にCEFRのB1～B2レベル程度の英語運用能力を持つ」という目標値の達成状況について、平成30年度3年次生の状況を述べる。本校目標値の75%の分母である60名は、SGクラスに人文社会コミュニケーション科目群の選択者を加えた概算で設定している。今年は、平成30年度3年次生の卒業時点での英検取得者数であるが、学年164名中、CEFR B2に相当する準1級以上を取得した者が6名、CEFR B1に相当する英検取得者が44名の計50名、うちSGクラスの生徒は40名中32名、人文社会コミュニケーション科目群の生徒は5名であったことから、CEFR B1～B2レベルの取得率は約60%であった。しかし、SGクラス単体で見ると、44名中32名と73%の生徒が取得しており、当初掲げた目標値をほぼ達成し、大幅に生徒の英語運用能力の向上がなされたと結論付けることができよう。

文部科学省が全国の高等学校を対象に行っている「英語教育実施状況調査」によると、平成29年度に高等学校第3学年に所属している生徒のうち、英検準2級以上を取得または相当の英語力を有すると思われる生徒の割合は39.3%であったとされる。本校3年次生164名中、115名以上という70%を超える生徒が準2級以上の英語力を有しており、全国平均から鑑みると、かなり高い英語運用能力を涵養することができたと言える。

SGH の指定を受けて以来、本校の生徒たちは国内外で様々な活動に取り組むようになり、様々な場面で英語を用いて他者と協働したり、その活動の成果を英語で発表したりする機会が急激に増えた。コミュニケーション英語といった必修の授業においても、外国からのゲストを迎え入れ、ともに授業を受けることがある。このように、他者との交流の中で英語を実際に用いるという経験を何度も積み重ねる中で英語の必要性を実感し、学習意欲が増したことが、英検の受験者数や合格者数の増加に大きな貢献をしているということができよう。本年度をもって SGH 事業は終了となるが、今後も普段の授業をはじめとする本校の様々な学びの中に英語を用いる機会を組み込み、生徒たちの英語学習に関わる意欲を高め、更なる英語運用能力の向上につなげていきたい。

表 1 各試験団体のデータによる CEFR との対照表

CEFR	Cambridge English	英検	GTEC CBT	IELTS	TEAP	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive	TOEIC / TOEIC S&W
C2	CPE (200+)			8.5-9.0				
C1	CAE (180-199)	1級 (2810-3400)	1400	7.0-8.0	400	95-120		1305-1390 L&R 945~ S&W 360~
B2	FCE (160-179)	準1級 (2596-3200)	1250-1399	5.5-6.5	334-399	72-94	341-352	1095-1300 L&R 785~ S&W 310~
B1	PET (140-159)	2級 (1780-2250)	1000-1249	4.0-5.0	226-333	42-71	322-340	790-1090 L&R 550~ S&W 240~
A2	KET (120-139)	準2級 (1635-2100)	700-999	3.0	186-225		300-321	385-785 L&R 225~ S&W 160~
A1		3級-5級 (790-1875)	-699	2.0				200-380 L&R 120~ S&W 80~

(文部科学省「英語の資格・検定試験の活用促進に関する行動指針(案)別添参考」より抜粋)

表 2 英検受験者数の推移

	平成 25 年度	平成 26 年度 (SGH 1 年目)	平成 27 年度 (SGH 2 年目)	平成 28 年度 (SGH 3 年目)	平成 29 年度 (SGH 4 年目)	平成 30 年度 (SGH 5 年目)
1 級				3	4	8
準 1 級	0	0	0	12	51	58
2 級	32	40	112	239	322	241
準 2 級	39	60	144	355	155	220
総計	71	100	256	606	532	527

表 3 過去 5 年間の英検合格者数

	平成 25 年度	平成 26 年度 (SGH 1 年目)	平成 27 年度 (SGH 2 年目)	平成 28 年度 (SGH 3 年目)	平成 29 年度 (SGH 4 年目)	平成 30 年度 (SGH 5 年目)*
1 級				0	0	2
準 1 級	0	0	0	3	3	4
2 級	6	6	26	39	41	16
準 2 級	17	23	52	112	63	30

*注：平成 30 年度の結果には第 3 回の合格者は含まれていない。

VI SGH 指定 5 年間のまとめ および指定終了後の展開

1 5年間のふりかえり

5年前の申請時に、「本校は、総合学科で、20年間すでに課題研究に関する実践をつみ、国際教育にも積極的に取り組んでいる。課題として1) 国際的な課題に関して関心を持つ生徒が全校的に広がっていない、2) 1年間の課題研究では、国際的な課題に対して内容を深め実践的な研究をするまでには至っていないことがある。本校では若者がグローバル・リーダーとして活躍することを阻害している要因は、1) 自己と世界のつながりに関する認識不足と、その機会の不足、2) 外国語を運用することへの苦手意識や、外国語学習に対する動機づけの低さ、3) 実践的な国際現場での経験不足にあると考えており、これに対応したプログラムを実施できれば多様なリーダーを育成できると考えている。」という仮説のもと、「総合学科の特性（全員必修の課題研究、生徒の多様性、教員の多様性、柔軟なカリキュラム、キャリア教育）を活かした多様なグローバル・リーダーをアセアン諸国と連携して育成することをめざす。」という目的・目標を掲げ各種の実践を重ねてきた。具体的には、1) 自己と世界のつながりに関する認識不足と、その機会の不足に対しては、「グローバルライフ」と「T-GAP」の開発、留学生の積極的な受け入れ、2) 外国語を運用することへの苦手意識や、外国語学習に対する動機づけの低さに対しては、各教科や課題研究と連動させた英語教育の実践や「高校生国際ESDシンポジウム」の開催、そして3) 実践的な国際現場での経験不足には、「国際フィールドワーク」の開発、海外でのシンポジウムの開催を行い、この5年間で当初の計画はほぼ達成できたと考えている。これらの成果や課題については、研究開発報告書、実施報告書の各頁および評価の欄に記載し、ここでは、指定終了後の展開についてまとめる。

1 グローバル人材育成拠点としての国立大学附属学校の役割

本校は、SGH指定後、「オープンプラットホームスクール」・「中間支援者」をキーワードに、本校のグローバル人材育成のための課題研究を中心とした教育課程開発を行うだけではなく、国立大学附属高校としての使命を果たすべく、「全国SGH校生徒成果発表会」を主催することで、SGH校間の課題研究ベースの交流を促進してきた。また、「高校生国際ESDシンポジウム」を同時開催することで、本校と関係の深い海外の高等学校と日本のSGH校との交流も図ってきた。この活動には、企業や国際機関もかかわってもらうことで、本校が国内のグローバル人材育成拠点の高校の一つとして機能するように体制を整えてきた。

さらに、平成29年度から「インドネシア日本SDGsミーティング@ジャカルタ」をインドネシアで開催することで、SGHの成果を日本国内だけではなく、インドネシアの高校にも普及してきた。この5年間でインドネシアだけではなく、あらたにフィリピン

ン大学附属ルーラル高等学校、タイ・カセサート大学附属高等学校と国際連携協定を締結し、アセアン各国ともネットワークが広がってきている。SGH5 年経過後も、本校との関係の深いアセアン各国の高等学校と協働したプログラム開発は本校のグローバル人材育成の核となっていく。国内外の様々なセクターのつなげ役、そして、SGH 事業の成果普及を図っていくために、平成 31 年度以降も本校の特性をいかしたグローバル人材育成拠点として、国立大学附属学校の責務を果たしていきたいと考えている。

2 小中学校への SGH 事業の普及活動

これまでも、文化祭や学校説明会などで、小中学校への成果普及を図ってきた。また、「つくさか食育支援プロジェクト」、「こども食堂」を地域と連携していく中で小中学校への普及をはかってきた。日本では、子供の相対的貧困率が上昇している。本校は、SDGs を共通言語に、各教科の学びの連結や地域活動など諸活動の課題の見える化を図っている。グローバルというと、海外の諸課題に目が行きがちであるが、日本国内にも多くの諸課題を抱えている。外国人労働者も、日本社会のために欠くことのできない状況となっており、まさに、日本社会全体で取り組んでいく必要がある。

平成 29 年度から本校は、関東地方 ESD 活動支援センターの埼玉県の拠点となっている。平成 31 年 2 月 16 日には、となりの上尾市の上尾東中学校の松倉教諭をお招きし、「関東地方 ESD 活動支援センター地域意見交換会 in 埼玉」をセンターと共催し開催した。上尾東中学校は、文部科学省の研究開発学校指定をうけ、新たな教科「グローバルシティズンシップ科」を立ち上げ、SDGs を取り組んだ地球市民性教育を実践している。現在、高大接続は大きな議論になっているが、小中学校で、SDGs を学んできた児童・生徒が SGH 校に入学すれば、さらにモチベーションを高め学びを深めていけるのではと考えている。本校の得意としている ESD 分野から、地域とグローバルの文脈をつなげ考え行動できる人材を、小中学校と連携しながらすすめていきたい。

3 東南アジア教育大臣機構（SEAMEO）と連携した活動と、ジャパン・アセアンスーパーグローバルハイスクールネットワーク（仮称：JAS-Net）構想

最後に、本校の SGH 指定終了後のグローバルネットワーク構想についてまとめる。本校の SGH は、これまで関係の深かったインドネシアを中心に、タイおよびフィリピンの国際連携協定を結んでいる学校と関係機関との連携を深めてきた。平成 31 年度からは、SGH で構築したネットワークをさらに発展させ、各学校の教育内容をより充実をめざし、新たなネットワークを広げていきたいと考えている。ここで重要になってくるのは、管理機関との連携である。本校の管理機関である筑波大学は、国際機関「東南アジア教育

大臣機構 SEAMEO-RIHED」の連携機関（Affiliate member）に日本の初めてのメンバーである。本校と関係の深いインドネシアの首都ジャカルタには、およそ 1800 校からなる SEAMEO school net の e-learning オフィスもあり、今後の連携がきたいできる。

本校が交流のプラットフォームとなり、日本とアセアン各国の、研究交流、人材交流、単位認定、留学受け入れなどを促進していきたいと考えている。

SDGs の達成年度である 2030 年まであとおよそ 10 年。2030 年の日本と世界の社会の姿、在り方を想像しながらこれからの学校づくりを考えていきたい（完）。

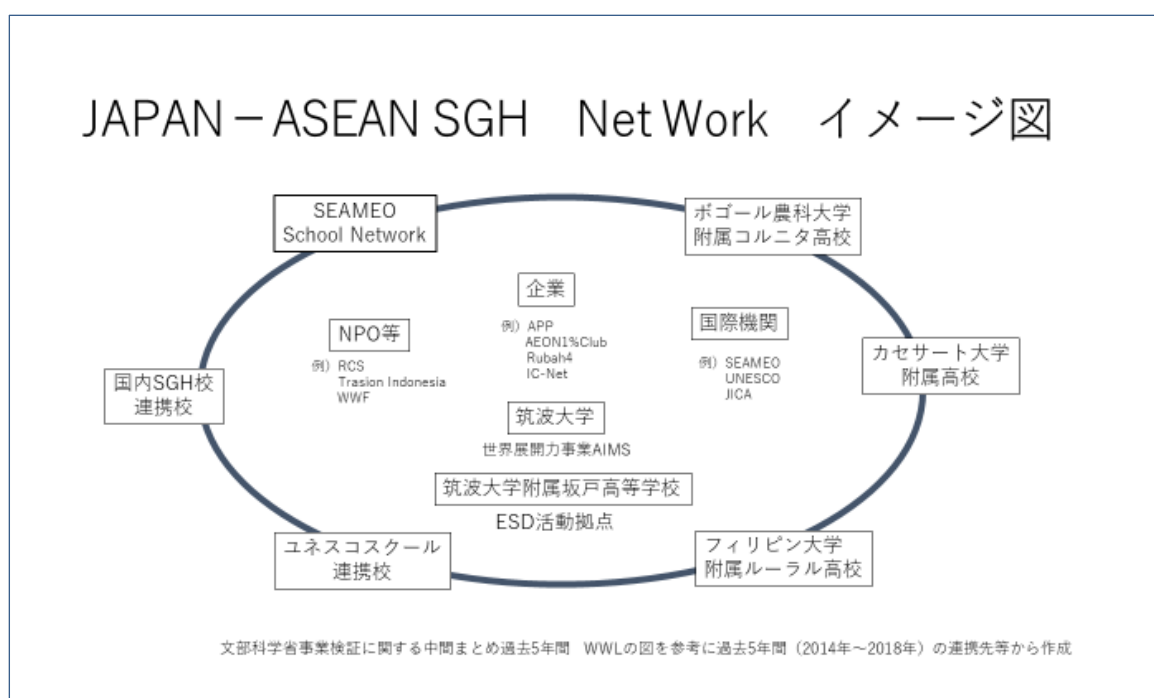


図 SGH5 年指定終了後の本校のネットワーク構想

写真による5年間の振り返り

<2014年：日伊3校協働型国際フィールドワークのスタート、SG入試スタート>



インドネシア環境林業省教育センターでのキックオフ



3校合同チームによるミーティング



社会課題の現場でのフィールドワーク



地域の学校・住民と作るフィールドワーク

<2015年：インドネシア国立公園でのプログラムの開発、全国SGH校生徒成果発表会初開催>



西ジャワ州グヌングデパンランゴ国立公園での活動



国立公園職員による森林問題に関するレクチャー



第1回全国SGH校生徒成果発表会も初主催



筑波国際農学ESDシンポジウムにも参加

＜2016年：3校合同合宿型フィールドワークの開発、フィリピン大学附属ルーラル高校と国際連携協定＞



西ジャワ州サロンゲ村で初の3校合同合宿の開始



現地での調査活動が飛躍的に向上する



第2回全国SGH校生徒成果発表会参加者の増加



フィリピン大学附属ルーラル高校と国際連携協定締結

<2017年：第1回インドネシア日本高校生SDGsミーティング開催、カセサート大学附属高等学校と国際連携協定>



第1回インドネシア・日本高校生SDGsミーティング
@ジャカルタ 於インドネシア環境林業省



APP社のユーカリ造林地でのフィールドワーク



全国SGH校生徒成果発表会で生徒分科会を初開催



カセサート大学附属高校と国際連携協定締結

<2018年：地域SGH連携型特産品の開発、日本インドネシア国交樹立60周年記念事業開催>



高校生と地元の婦人会の共同開発石鹸



小学校での環境教育WSも充実した内容になりました



第4回全国SGH校生徒成果発表会も好評
SDGsを共通言語に開催



日本インドネシア国交樹立60記念事業に認定
駐日インドネシア大使館環境林業部Riva部長から祝辞

<企業連携のハイライト>



西ジャワ州のトマト園でのレクチャー
住友化学アジアパシフィック株式会社



クローン精英樹の育成研究@スマトラ島
APP株式会社



ティーンエイジアンバサダー事業
公益財団法人イオンワンパーセントクラブ



40億人のためのビジネスアイデアコンテスト
IC-NET株式会社

第 3 部 関係資料

- ◆指定の際に提出した構想概要調書
- ◆指定の際に提出したSGH概念図ビジュアル資料
 - ◆平成 30 年度教育課程表
 - ◆平成 30 年度 国際教育・ESD 活動一覧
 - ◆平成 30 年度 校内 SGH 小委員会一覧
- ◆全国高等学校教育改革研究協議会（平成 30 年度）発表資料

- ◆新聞・雑誌等掲載記事
 - ・APP 社 Website「Japanese Students and Teachers at APP' s facilities in Riau, Sumatra」
 - ・イオン 1 %クラブ ティーンエイジアンバサダー(高校生交流事業)
 - ・じゃかるた新聞（2018 年 8 月 12 日朝刊）
 - ・大學新聞第 160 号（10 月 10 日発行）
 - ・国立大学附属学校の先端教育（2018 年 11 月 1 日）
 - ・SGH 全国高校フォーラム発表ポスター（2018 年 12 月 15 日）

【別紙様式 5】

平成 26 年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	つくばだいがくふぞくさかどうこうとうがっこう				②所在都道府県	埼玉県
26～30	① 学校名	筑波大学附属坂戸高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1 年	2 年	3 年	4 年	計	1 学年 160 名 (1 クラス 40 名×4 クラス)	
総合科学科	40	60	80		180	全校 486 人 (6 名 : 4 年次生)	
						全日制・総合学科	
⑥研究開発構想名	先進的な総合学科を活かした持続可能なアセアン社会を創るグローバル人材の育成						
⑦研究開発の概要	全生徒に対する地球市民性醸成プログラムとグローバル・リーダーを育成すると共に、 <u>アセアン諸国と連携した 2 年生から取り組む課題研究プログラム開発 (インドネシアにおける 3 週間フィールドワーク・筑波大学における英語論文指導およびゼミ指導)</u> および <u>1 年次から取り組む課題研究基礎 (キャリアデザイン・校外学習)</u> を開発する。						
⑧ 研究開発の内容等	⑧-1 全体	(1) 目的・目標 総合学科の特性 (全員必修の課題研究、生徒の多様性、教員の多様性、柔軟なカリキュラム、キャリア教育) を活かした多様なグローバル・リーダーをアセアン諸国と連携して育成することをめざす。 (2) 現状の分析と研究開発の仮説 本校は、総合学科で、20 年間すでに課題研究に関する実践をつみ、国際教育にも積極的に取り組んでいる。課題として 1) 国際的な課題に関して関心を持つ生徒が全校的に広がっていない、2) 1 年間の課題研究では、国際的な課題に対して内容を深め実践的な研究をするまでには至っていないことがある。本校では若者がグローバル・リーダーとして活躍することを阻害している要因は、1) 自己と世界のつながりに関する認識不足と、その機会の不足、2) 外国語を運用することへの苦手意識や、外国語学習に対する動機づけの低さ、3) 実践的な国際現場での経験不足にあると考えており、これに対応したプログラムを実施できれば多様なリーダーを育成できると考えている。 (3) 成果の普及 管理機関と協力して SGH 専用のホームページを立ち上げ、その中で SGH 校やその他の学校と、課題研究テーマや研究開発成果についてディスカッションする「つくば版パブリックコメント」の欄を設ける。研究開発成果を企業や関係行政機関へ提言したり、パブリックコメントの範囲を外国にまで広げ、地球規模で課題を解決する体制を構築する。 総合学科高校向けには、本校が主催し毎年 2 月に開催している総合学科研究大会において成果を公表する。また、平成 24 年度から実施している高校生国際 ESD シンポジウムを全国の高校生も参加可能なオープンなシンポジウムにして、その成果の普及に努める。					
	⑧-2 課題研究	(1) 課題研究内容 共通の柱として「<u>多様性の中の統一を国是とするインドネシアから SDGs 時代に世界と日本が学ぶこと</u>」を設定し、<u>2015 年以降、先進国と途上国が普遍的に協働し実践する国連持続可能な開発目標 (SDGs) を達成するために高校生の今だからできる課題に 2 年間にわたって取り組む</u>。具体的なテーマ例としては、以下のようなものを想定している。<u>(環境)</u> 森林保全のための小学生向け環境教育プログラムの開発、企業 CSR による熱帯林再生プロジェクトの効果測定、<u>(経済・産業・国際関係)</u> グラミン銀行方式 (マイクロクレジット) による自律的地域振興、森林保全と地域振興を両立する BOP ビジネスモデルの提案、<u>(震災)</u> スマトラ沖大津波と東日本大震災で両国が共有できること、福島県産大豆を用いたテンペ (インドネシアの大豆発酵食品) 製造による地域活性化、<u>(文化・社会)</u> 農村地域の聞き書きによる伝統文化の変容測定、など多様なテーマが考えられる。					

	(2) 実施方法・検証評価 既存の課題研究（校内名：卒業研究、3 年次対象 2 単位）に加え、1 年次では、「キャリアデザイン」のなかで、近隣在住の外国人等を招へいし国際的な課題に対する基礎的研究力を養成する。また、生徒全員がカナダで「校外学習」を行い、バンクーバーにおいて移民に関する調査、国立公園で森林や地域開発について学ぶ。2 年次では<u>インドネシアにおける 3 週間の国際フィールドワーク</u>を実施。インドネシア政府、国立公園、ボゴール農科大学、現地企業および NPO の協力を得て「インドネシア 100 年の森プロジェクト」として行う。ボゴール農科大学附属コルニタ高校およびインドネシア政府林業省附属高校の高校生も参加する。1, 2 年次対象で調査研究のための「インドネシア語講座」を開設する。3 年次では個人でテーマ設定を行い課題研究を行う。SGH の課題研究テーマはアセアンに関するものであるが、より多くの生徒が国際的な課題研究に取り組めるように促す。必要な生徒は海外に再度派遣し研究を行う。また<u>英語論文作成やゼミ指導を筑波大学で合宿形式行う（課題研究合宿）</u>。検証評価は、2 年次はインドネシア政府林業省での発表、現地小学校での生徒による出前授業の内容、3 年次は、作成された英語論文の内容と、論文を評価されたことによる大学への入学者数で評価を行う。2 年間を通じて、各自の「ポートフォリオ」に、フィールドワーク等の記録と小論文、課題テーマに関する論文、教員や大学生とのディスカッションの記録と感想文などをファイリングして、年度末には、生徒自身が高校の教員、筑波大学の教員や学生と振り返る。平成 26 年度はとくに、筑波大学附属教育局で開発した「国際的資質質問紙」による調査を年度当初と末に行い、生徒の変化の縦断的評価を行い、試行プログラムの検証も行う。 (3) 必要となる教育課程の特例等 「インドネシア語講座」「国際フィールドワーク」「課題研究合宿」を時間外の科目として各 2 単位認定を行う。
⑧-3 上記以外	(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 ○英語による基礎的プレゼンテーション力育成（1 年次） 「コミュニケーション英語」と「社会と情報」のタイアップ授業 ○国際化を身近な課題として意識させる「グローバルライフ（仮称）」の授業開発 「日常生活」から世界とのつながりを感じられる授業の開発。家庭科と他教科の連携 ○国際特別演習の開講（3 年次対象：土曜日） - 土曜日を利用した研究所訪問や NPO との活動 - 上記の検証評価も、「国際的資質質問紙」による調査を実施する。 (2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 必修科目である「家庭基礎（2 単位）」について研究開発科目「グローバルライフ（仮称）」で代替する。適用範囲は 1 年次在籍生徒 160 名とする。「国際特別演習」について時間外の集中科目として単位認定（各講座 2 単位）を行う。 (3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の実組内容・実施方法 ○グローバル入試の実施 - 在日外国人特別入試および在外日本人学校生特別入試を平成 27 年度生から実施する。 ○SCIS (Student's Committee of International Studies) を立ち上げる - 平成 20 年度にたちあげた国際教育推進委員会の生徒版をたちあげ、高校生国際 ESD シンポジウムの運営や国際交流活動を中心となつて行う生徒の委員会を作る。 ○高大接続入学の実施 - SGH プログラムを履修した生徒が、筑波大学へ入学できるシステムを構築する。筑波大学生命環境学群生物資源学類への接続入試から開始し、他学類へも広める。
⑨その他特記事項	インドネシア政府および駐日インドネシア大使館と連携し実施する。また、筑波大学が国際連携協定を結び本校とも交流が進んでいる、タイ・カセサート大学およびその附属高校、フィリピン大学およびその附属高校とも連携して実施する。

「先進的な総合学科を活かした持続可能なアセアン社会を創るグローバル人材の育成」

育成するリーダー像

- 多様な集団の中で自律的に活躍できる。
- 自国の伝統や文化を大切にし、意見交換できる。
- 国連の持続可能な開発目標の達成に貢献できる。
- 共創的対話力で新しいアイデアを生み出せる。

課題研究テーマ

『多様性の中の統一を国是とするインドネシアからSDGs時代に世界と日本が学ぶこと』 ～先進国と途上国が普遍的に協働し実践する国連の持続可能な開発目標(SDGs)を達成するために高校生だからできる課題に取り組む～

※ ☐ : 既存科目の見直し・拡充 ☐ : SGHで新たに開発 ☐ : 教育課程外での取り組み

先進的な総合学科の強み

- 社会と情報
- コミュニケーション英語
(英語による情報発信技術)
- 産業社会と人間
(グローバルリーダー講話)

● **グローバルライフ**
→ 国際化を身近な課題として意識させる科目の開発
※「家庭基礎」の発展

世界と繋がる自分の強み
(専門性)
国際的視点からの専門科目

英語+1言語の語学力
インドネシア語講座

1年生(16歳)

海外校外学習
全生徒が海外体験

- ・インドネシアで姉妹校の高校生と3週間のフィールドワーク(森、学校、地域)



2年間にわたる課題研究プログラムの開発

国際ファイールドワーク@インドネシア+卒業研究合宿@筑波大学

- ・2年次の経験に基づきグローバルな研究テーマ設定
- ・大学に合宿し英語の論文作成とゼミ指導



海外・大学・研究所での活動を単位認定

高校生国際ESDシンポジウム
(高校生が国際会議の企画運営)

2年生(17歳)

「国際科」科目の整備

- ◆ 国際協力機構(5名)
- ◆ アセアンの大学院に進学(5名)
- ◆ グローバル採用によるアセアン諸国への就職(10名)
- ◆ 国連等国際関連機関(5名)

筑波大学(高大接続特別入試・グローバル入試など)

10年後(26歳)
の目標

3年生(18歳)

坂戸高校グローバル入試(帰国生・外国人特別枠)

平成30年度入学生 総合科学科 教育課程表

1 年 次			
	教 科	科 目	単 位
必 履 修 科 目	国語	国語総合	4
	地歴	日本史A	2
	数学	数学Ⅰ	3
	理科	化学基礎	2
		生物基礎	2
	保健体育	体育	2
	保健体育	保健	1
	外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	3
	家庭	グローバルライフ	2
	情報	社会と情報	2
学 校 指 定 必 修	数学	数学A	2
	外国語	英語表現Ⅰ	2
	産業	産業社会と人間	2
1年次必修科目数			23
1年次学校指定必修科目数			6

2 年 次			
	教 科	科 目	単 位
必 履 修 科 目	地歴	世界史A	2
	公民	現代社会	2
	理科	物理基礎	2
	保健体育	体育	2
		保健	1
	芸術 (選択)	音楽Ⅰ	2
		美術Ⅰ	
		書道Ⅰ	
	学校指定必修	外国語	コミュニケーション英語Ⅱ
2年次必修科目数			11
2年次学校指定必修科目数			4
2年次選択科目数			12

3 年 次			
	教 科	科 目	単 位
必修	保健体育	体育	3
学 校 指 定 必 修	外国語	コミュニケーション英語Ⅲ	3
		卒業研究	2
3年次必修科目数			3
3年次学校指定必修科目数			5
3年次選択科目数			21～22

最大履修可能教科・科目数:87～88単位

卒業に必要な単位数:78単位

1年次教科科目履修単位数	29
特別活動	1
1年次総履修単位数	30

2年次教科科目履修単位数	29
特別活動	1
総合的な学習の時間	2
2年次総履修単位数	32

3年次教科科目履修単位数	29～30
特別活動	1
3年次総履修単位数	30～31

2年次選択科目				
科目群選択科目	生物資源・環境科学	工学システム・情報科学	生活・人間科学	人文社会・コミュニケーション
	＜指定(4単位)＞ 農と環境Ⅰ(2) 生物資源・環境科学実習Ⅰ(2)	＜指定(2単位)＞ 工学情報実習Ⅰ(2) ＜選択(2単位)＞ 産業電子技術(2) プログラミング技術A(2)	＜選択(4単位)＞ 福祉入門(2) 生活と福祉(2) パフォーマンスコミュニケーション(2) 生活とデザインⅠ(2)	＜選択(4単位)＞ ことばと文化(2) 国際社会(2) 簿記(4)
一般選択科目	現代文(2) 日本語表現(2) 古典Ⅰ(2) 世界遺産で学ぶ地理(2) 日本史B(4) 世界の思想(2) 数学Ⅱ(4) 数学B(2) 化学α(2) 原価計算(2) 農業研究(4) 生活園芸(2) 製図(2) アパレル入門(2) 調理科学(2) 子どもの発達と保育(2) 介護福祉基礎(2) ビジネスの基礎(2) ビジネス・スキル(2) マーケティング(2) 体育を科学する(2) 生物α(2) 工業数理基礎(2) グローバルライフプラス(2) P.S.(2)			

3年次選択科目				
科目群選択科目	生物資源・環境科学	工学システム・情報科学	生活・人間科学	人文社会・コミュニケーション
	＜指定(5単位)＞ 農と環境Ⅱ(2) 生物資源・環境科学実習Ⅱ(3)	＜指定(3単位)＞ 工学情報実習Ⅱ(3) ＜選択(2単位)＞ 機械設計(2) プログラミング技術B(2)	＜指定(1単位)＞ 人間科学(1) ＜選択(4単位)＞ 生活支援技術(2) 介護総合演習(2) 生活とデザインⅡ(4)	＜指定(1単位)＞ ビジネスの今(1) ＜選択(4単位)＞ 会計(4) Practical English(2) 日本語・日本文化演習(2)
一般選択科目	現代文(2) 現代文演習(2) 言語コミュニケーション(2) 古典Ⅱ(2) 古典に学ぶ(2) 表現演習(2) 地理B(4) 世界史B(4) 現代の政治経済(2) 数学Ⅲ(5) 数学活用(2) 物理(4) 化学β(2) 生物β①②(4) 地学基礎(2) スポーツⅡ(2) 英語表現Ⅱ(4) 音楽Ⅱ(2) 美術Ⅱ(2) 野生生物入門(2) 農をよむ(2) エネルギー資源と環境(2) 食と農の科学(2) ICTハードウェア(2) マニッケデザイン(2) システムデザイン(2) 子ども文化(2) 服飾文化(2) 食文化(2) 福祉からみた生活(2) 生活研究(2) 販売実践(4) ぐらしのマナーと法律(2) 商業デザイン(2) ビジネスコミュニケーション(2) マルチメディア(2) 比較文化論(2) Global Studies(2) ワールドビジネス(2) Discussion & Debate(2)			

※SGクラスは1年次でグローバルパスポートが学校設定必修となります。

【資料】平成 30 年度 国際教育・ESD 活動一覧（抜粋）

月	内 容
4月	1 年次 SG クラス「グローバルパスポート」（1 単位）開講
4月	タイから 1 名の留学生在来校（8 カ月）
6月	「関東甲信越北陸地区 SGH 高校課題研究発表会（北陸新幹線サミット）」へ生徒 17 名参加
6月	AIMS プログラム筑波大学留学生 34 名来校・1・2 年次生と交流
6月	さくらサイエンスプラン・ハイスクールプログラムでインドネシア高校生来校
6月	フィリピン、インドネシアの姉妹校に 1 年間留学していた 2 名が帰国
7月	韓国ユネスコ国内委員会招へい日本教職員韓国派遣プログラム 教員 1 名参加
7月	3 年生 2 名が姉妹校ボゴール農科大学附属コルニタ高校に 1 年留学へ
7月	3 年生 1 名が姉妹校インドネシア環境林業省附属高校に 1 年留学へ
7月	1 年生 1 名がアメリカ高校に 1 年留学へ
8月	国際フィールドワーク（インドネシア）実施 生徒 7 名教員 2 名参加
8月	第 2 回日本インドネシア高校生 SDGs ミーティング@ジャカルタ開催
8月	国際フィールドワーク入門（黒姫高原）実施 生徒 29 名、教員 3 名、筑波大学留学生 2 名参加
8月	教員 2 名が海外校外学習視察・現地打ち合わせでバンクーバーに渡航
9月	台湾・デンマークから 2 名の留学生在来校（1 年間）
10月	姉妹校コルニタ高校から 7 名の留学生在来校（3 週間）
10月	福井県立高志高等学校生徒 25 名、教員 2 名来校
10月	京畿外国語高等学校生徒 60 名、教員 5 名来校
10月	インドネシア・アルファセンタウリ高校 生徒 22 名、教員 4 名が来校
11月	台湾・小港高級中学 生徒 11 名、教員 2 名が来校
11月	インドネシア・フィリピン・タイより生徒 11 名・教員 5 名ホームステイ受け入れ
11月	第 7 回高校生国際 ESD シンポジウムを開催
11月	第 4 回 SGH 生徒成果発表会開催 海外校・SGH 校 20 校によるポスターセッション
12月	SGH 全国高校生フォーラムにて 3 年生 1 名がポスター発表
12月	フィリピン大学附属ルーラル高校スタディツアー 生徒 4 名、教員 1 名が来校
1月	東京学芸大学主催 SSH/SGH 課題研究成果発表会 生徒 8 名、教員 1 名参加
1月	タイ・カセサート大学附属高校カンペンセン校舎 教員 2 名訪問・研究協議
2月	第 5 回 SGH 研究大会・第 22 回総合学科研究大会を開催
2月	関東地方 ESD 活動支援センター 地域意見交換会 in 埼玉 2019 を開催
3月	1 年次海外校外学習（カナダ・バンクーバー）実施
3月	「国際的な視野に立った卒業研究支援 P」 生徒 1 名・教員 2 名がシンガポール渡航

H30 SGH小委員会のメンバーと仕事内容

小委員会名	委員長	委員	H30年までのおもな仕事内容	H30年のおもな仕事内容
① SGH評価委員会	小澤	推進委員会、研究部、CIS、各部専任	SGHに関する文科省に提出している設定目標が達成できているかを評価する。SGHの計画が進んでいるかを評価する。また生徒や教員の変容を測定する手法を開発し、測定を行う。	1) 5年間の総括を行う2) 平成30年度目標達成シートを完成させる3) 各開発単位の成果を、各小委員会と連携してまとめる4) 生徒、教員、保護者の変化をまとめる5) 教育局と連携した評価活動を確立する6) 進路実現可能な入試制度について検討を行い、指定5年後も実施が可能な体制を整える。
② SG入試の検証と評価	熊倉	生徒募集委員会	外国籍生徒や、帰国生が入学しやすく多様な生徒を確保できる入試制度を設計し、実施する。	1) 年間指導計画の完成
③ グローバルライフの開発と検証	石田	後藤、高畑、古家、建元	H27年度から開始する。内容を検討し授業を実施する。H28年度からは、本検討委員会で授業内容と照らし合わせて担当者を検討し、ルール	2) 研究大会における公開授業の実施
④ 課題研究・各教科と連携した英語教育の 検討	福田	英語科、3年次	筑坂の生徒の状況、履修状況、科目開設状況を検討しながら、設定目標の達成と英語の実際の運用力を高める方法を検討する。「社会と情報」や各教科とのシナジーを高める方法も検討する。	3) 5年間の成果と指定後の運用を検討
⑤ 筑波大学との高大接続プログラムの共同研究	田村	管理職、主幹	筑波大学との高大接続プログラムについて検討する	1) 英検2級合格者を増加させる。また、5年間の合格者の変容をまとめる。2) 卒業研究や各教科と連携した英語教育のあり方をまとめる。3) グローバルな課題に取り組んだ生徒を集約し、英語で論文を執筆できる生徒は支援し、英語で論文をまとめる
⑥ 国際フィードバックの開発と検証および、第2回インドネシア日本高校生SDGsミーティングの運営	建元	吉田、福田、吉岡静、高畑、中台、三國	インドネシアにおける活動、そのための事前学習内容や、インドネシア語講座をどの時間帯で開設するかを検討する。	今後の筑波大学との高大接続について具体的な内容を提示し実施する
⑦ インドネシア語講座の開発と検証	吉田	海外交流アドバイザー、建元	インドネシアにおける活動、そのための事前学習内容や、インドネシア語講座をどの時間帯で開設するかを検討する。	1) プログラムの5年間の成果をまとめる 2) 2018年のプログラムを立案し、実施する 3) インドネシア側参加者の変容も評価する 4) 指定5年後以降のあり方も検討する
⑧ 第4回全国SGH校生徒成果発表会・第7回高校生国際ESDシンポジウムの運営	建元	藤野、今野、福田、吉岡静、吉田、高畑、石田、岩井、松川、小石川、中台、三國	SGHの成果の発表と国立大学附属の使命を果たすため、全国のSGHおよび海外の高校生が集い、日頃の成果を発表し研鑽しあえる場を設定し運営する	1) インドネシア語講座の5年間の指導内容と年間指導計画をまとめる 2) 国際FW用の学習プログラムを開発する 3) 指定5年後の計画をまとめる
⑨ 1年次校外学習の開発と評価	今野	1年次学年団	SGHの成果の発表と国立大学附属の使命を果たすため、全国のSGHおよび海外の高校生が集い、日頃の成果を発表し研鑽しあえる場を設定し運営する	大会を運営し、参加者へのアンケート調査によりフィードバックを得る
⑩ 2年次「T-GAP」の開発と評価	北原	2年次学年団	H28年度から実施する必修の国際科目「T-GAP」として開発を行い、3年次で実施する卒業研究に向けて、アセアンの学びなどからグローバルな視点を持たせると共に、ソーシャルアクションの機会も設ける。CASやEEEの取り組みなども参考に内容を検討していく。	これまでの実施内容を踏まえて、課題研究の要素を含んだプログラムを立案し実施する。
⑪ 日本語の支援	塗田	吉岡静、研究部	SG入試で入学して来た生徒で、日本語に関する支援が必要な生徒に対して、どのような支援が必要か検討し、支援を行う。	これまでのT-GAPの実施内容を踏まえ、2018年度の授業を実施し、実施内容をまとめる。
⑪ 教育課程のマネジメント	深澤	教育課程委員会	SGHで開発する開発単位が、教育課程のなかによ配置すれば実現できるかを検討する。また、IBDPとの整合性も検討していく。	日本語支援の必要な生徒に対して支援を行う。また、必要となる人的物的資源をまとめ、管理職に提示する。研究部は、それを支援す平成31年度以降のSGH開発科目の運営について主幹会議と連動しながらカリキュラム編成の実務を担当する

海外連携校の教員との協働による国際フィールドワークの開発
～Japan-Asean SGH Networkの可能性～



筑波大学附属坂戸高等学校
農業科 主幹教諭 建元喜寿

自己紹介

- ・農業科・国際科の教員
- ・岡山県の公立高校で2年勤務
- ・JICA青年海外協力隊
現職教員特別参加制度
(2008年～2010年)
- ・SGH推進委員会委員長



岡山県の農村部

学校紹介



創立:1946年 1学年4クラス
所在地は埼玉県
1994年～ 総合学科 (日本初発)
2011年 ユネスコスクールに認定
2014年 スーパーグローバルハイスクール
2017年 日本語IBDP認定校

本日の内容:
留学・海外研修の充実 (国際FW)
留学生交流の充実 (国際シンポジウム)
高大接続 (WWLのイメージの検討)
グローバル教師の育成

筑坂SGH 3年間のなぐれ



1年生
産業社会と人間
(科目選択)
グローバルライフ (GCED)
かが 校外学習・インドシア語

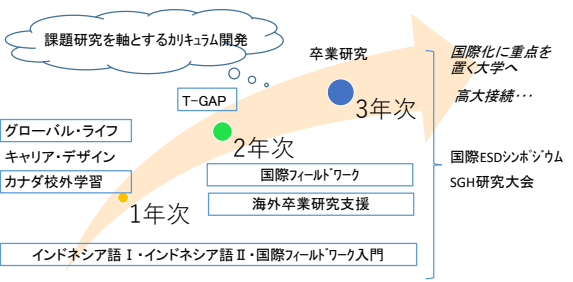


2年生
4科目群の選択科目
海外卒研支援P
T-GAP (ソーシャルアクション・グループ)
国際FW・国際ESDシンポジウム



3年生
卒業研究
(個人で課題設定)
課題研究特別演習
高校版CinC

仮説と設計図ー課題研究に収斂するカリキュラムデザインー



国際FWを開発する際に大切にしたこと

- 協働力・当事者性の育成
- ・現地の先生、高校生と一緒に取り組む
→協働力・当事者性の育成
- ・見学、提案で終わらない
→Study Tourから Field Workへ
- ・次年度につながるものにする
→プロジェクトの持続可能性と改善

共通課題の設定：森林の保全



2015年FW@スマトラ島ブカンパル

日本にも破壊の原因が
パーム油と日常生活@グローバルライフ



現地校との協働



筑坂
総合学科

ボゴール農科大学
コルニタ高校
(2008年～)
普通学科

インド 初環境林業省
附属林業高校
(2012年～)
専門学科

国際フィールドワークの全体像

<事前>

- ・生徒への周知・説明会 (3月)
- ・書類と面接による選抜 (4月)
- ・事前学習・合宿 (5~7月)
- ・インドネシアパートナー校とのスカイプ会議

<実施>

- ・3週間の滞在 (8月)
- ・3校3テーマ編成 (必ず、3校をミックスする)
- ・インドネシア環境林業省、駐日インドネシア大使館と連携

<事後>

- ・インドネシア環境林業省職員へのプレゼン
- ・高校生国際ESDシンポジウムでの発表 (11月)
- ・SGH研究大会・総合学科研究大会での発表 (2月)
- ・ボゴールリーダー会議で次年度への引継ぎ (3月)

国際フィールドワークの実施場所

インドネシア共和国西ジャワ州サロンゲ村周辺



選定理由：森林保全の問題が実際に発生している
インドネシア側の協力が得やすい
首都からアクセスしやすく生徒の安全確保が図れる

SGH5年間で作り上げた国際FWの形

1週間目 (インドネシアを知る)

コルニタ高校
授業参加、交流会

国立公園
開発現場の現状視察

2週間目 (自分たちで動く)

環境教育班
小中学校の巡回とESD
出前授業内容の検討

エコツアー班
国立公園のゴミ問題解決
と種の保全活動の実践

地域開発班
森の伐採によらない
ビジネスの提案

参加高校：筑坂、コルニタ、林業省附属校 各校 7名

3週間目 (国際交流・研究交流・現場へ)

日本インドネシア高校生SDGs
ミーティング
@インド 初環境林業省

現場訪問・企業との交流

教育班



エコツアー班



地域開発班



話し合い、話し合い、話し合う



一緒に計画をつくり



現場に赴き



そしてまた話し合い、話し合い・・・



現場で実践し、フィードバックを得る



それぞれの良さをいかして実践



プロジェクトの現場でPDCAを回すFW



プロジェクト運用力・コミュニケーション力・言語運用力の向上

最後は、環境林業省職員へ発表



高校生が成し遂げたこと



高校生が提案し、実践したバナナペーパー (Non Timber Product)を地元の皆さんが継続的に活用

青年海外協力隊経験者からみても素晴らしい実績



SGHで意図していなかった変化

フィールドワークを実施した地域で、高校生の
伝えた森林保全技術を地元民が自主的に継続
して活用をはじめ



SGH活動が、日本の高校生のグローバル
人材としての資質や能力を高めるだけでなく、
実際に世界の持続可能な社会の構築に貢献する、
可能性も示唆された。

国際フィールドワークの質向上への取り組み



現地校教員、政府機関、地元グループとの協働
(学校でできることは、学校で行う。
他者に丸投げしない。)

国際FW参加者の参加後の様子 1

卒業生の追跡例

平成26年度卒業生 (SGH1年目)

- ・日本語パートナーズ事業等でアセアン各国で日本語教師として活躍 (2名)

平成27年度卒業生 (SGH2年目)

- ・大学の世界展開力強化事業に1年生から参加
- ・大学2年の2月から韓国に1年間留学

目的意識をもった大学進学

大学入学直後からの積極的な活動
まわりの友人を巻き込み大学キャンパスのグローバル化促進に貢献

国際FW参加者の参加後の様子 2

SGクラス1期生の例

- ・ビジネスプランコンテストに参加し、途上国支援のモデルを考案し日本とバングラディッシュをつないで実践

- ・インドネシアの非木材資源バナナペーパー活用のために、自ら現地にコンタクトをとり渡航し、技術習得と技術移転。JICA REDD++のプロジェクトにも参加

- ・フィリピン大学附属高等学校に1年間留学。フィリピン大学への進学も検討中

- ・インドネシア環境林業省附属高校へ日本人として初めて留学。熱帯林保全を学ぶために国立公園等で1年間奮闘

国際FW参加者の参加後の様子 3

当初意図していなかったもの

- ・国際フィールドワークに参加したインドネシア人高校生が筑波大学に入学
- ・協働プロジェクト参加校の学びの形にも波及効果 (探求型学習のひろがり、生徒の自主活動)

→SGH活動が他国のグローバルリーダー育成へ波及する可能性が示される。

評価指標として、海外の協働活動パートナー校への影響もとらえる→H30に筑波大学附属学校教育局作成の国際資質尺度測定用紙短縮版を翻訳して実施

森林保全のアクションプランを考えるインドネシア人高校生



Kadipaten



留学生交流の充実

- ・高校生国際ESDシンポジウム・
第4回全国SGH校生徒成果発表会@東京
(11月の第2木曜日)
- ・日本インドネシア高校生SDGsミーティング@ジャカルタ
(8月上旬)





SDG s を、ESDを具体化し、
各学校をつなぐツールに

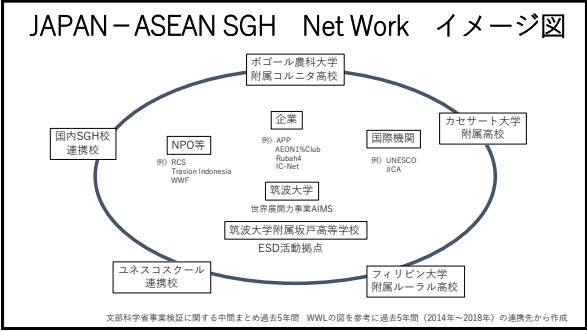
高校生国際ESDシンポジウム
全国SGH校生徒成果発表会

第1回インドネシア日本高校生
SDG s ミーティング@ジャカルタ

国を越えた高大接続について

- 国際連携協定校群によるIMAP（International Multilevel Academic Program）の開発

筑波大学および本校が有する、とくにアセアン地域の連携協定校ネットワークを「国際連携協定校群」ととらえ、国際交流だけにとどまらない国と学校種（高大院）をこえたアカデミックプログラムを開発・提供する。



探究活動の質向上にむけた相互連携例①

理化学研究所@埼玉県和光市

筑波大学研究施設訪問

フィリピン大学附属ルーラル高等学校
サイエンスインターンシップ@JAPANの支援

探究活動の質向上にむけた相互連携例②



一村一品運動に関する現地での聞き取り調査



国際研究機関での聞き取り調査

海外卒業研究プログラムへの支援@フィリピン

国内外の卒業生からの支援



アセアン分散型校外学習（計画中）

- 1年生の3月に実施予定
- 国際連携協定を締結している学校のある国を中心に渡航先を選択する。
- 現地に精通した企業と連携してプログラムを作成する。

現地の教員とやり取りできる教員の育成



経験年数、教科にこだわらない教員配置

関係性の継続的なケアを



1回交流しただけにしない

SGH5年の成果をさらに・・・



「第7回高校生国際ESDシンポジウム」・
「第4回全国SGH校生徒成果発表会」



本年も2018年11月8日（木）に開催します。ご参加、お待ちしております

ご清聴ありがとうございました

Terima kasih banyak!


[Investor Relations](#) | [Partners & Suppliers](#) | [Careers](#) | [Contact](#)

[Home](#) | [About Us](#) | [Products](#) | [Sustainability](#) | **[News & Media](#)**

[APP in the News](#) | [News Releases](#) | [Events](#) | [Blog](#) | [Gallery](#) | [Media Contacts](#)

[English](#)

News & Media

[print](#)
[share](#)

15.08.2017

Japanese Students and Teachers at APP's facilities in Riau, Sumatra



Nursery: 1-month old seedlings are propagated and grown prior to being planted in the field

7 students, accompanied by 2 teachers from Sakado High School, University of Tsukuba in Japan, visited the facilities of Asia Pulp & Paper Group (APP) in Pekanbaru on 15 August 2017. This trip was part of their study tour to learn and understand about pulp and paper production, as well as forest conservation in Indonesia



Briefing on Arboretum, conservation area of APP's pulpwood supplier

The trip commenced early in the morning with the entourage visiting the Arboretum, conservation area of PT Arara Abadi, APP's pulpwood supplier. Here, the students were intrigued and awed as they learned about the co-existence of biodiversity, research and development, and eco-tourism in the conservation area.

The journey continued as they visited the eucalyptus plantation at Rasau Kuning District where they took the opportunity to enjoy a bird's eye view of the plantation from APP's Fire Observation Tower. Moving on, they arrived at the nursery where 1-month old seedlings were propagated and grown prior to being planted in the field. Located within the same area, they also visited the research and development center of APP's pulpwood supplier. The trip ended at Indah Kiat

Recent Blog Posts

- 24.01.2019 | Asia P:
2018 Paper & Packaging Consumer Trends Report
- 02.10.2018 | Asia P:
Boosting Sustainability and Your Bottom Line with Folding Boxboard
- 02.10.2018 | Asia P:
Ending deforestation: A collective effort

[view all blog posts](#)



APP's Integrated Fire Management

[view all videos](#)



FCP Implementation Plan: 2015 and Beyond

[view all photos](#)

Recent Tweets

Asia Pulp Paper (@asiapulpnews)
Renewable fiber from sustainably-managed plantations helps meet the growing demand for sustainable tissue, paper and packaging products. Find out more at: [bit.ly/25wvde3](#)

YouTube @YouTube
PLANTING TREES
May 7, 2018

Asia Pulp Paper (@asiapulpnews)
Nyepi is the Balinese Hindu's Day of Silence. On this day, the island is deserted with limited social activity and individuals focus on self-reflection

アジアペーパーアンドパルプ社のホームページの記事

<https://www.asiapulppaper.com/news-media/press-releases/japanese-students-and-teachers-apps-facilities-riau-sumatra>

aeon1p.or.jp/1p/international/highschool/asean/2017_indonesia_invitation/

English

AEON 1% Club Foundation

イオン1%クラブとは ? About
次代を担う青少年の健全な育成 Education
諸外国との友好親善 Interchange
地域社会の持続的発展 Development
アジア各国でのCSR活動 CSR

諸外国との友好親善 Interchange

ホーム 諸外国との友好親善 ティーンエイジアンバサダー(高校生交流事業)とは アセアンでの活動 2017年度活動の様子(インドネシア招聘)

2017年度活動の様子(インドネシア招聘)

実施期間及び参加者(インドネシアから日本へ)

評価はこちら

実施期間	2017年1月29日(月)～2月4日(日)
参加者	日本高校生(筑波大学附属横浜戸高等学校): 16名 インドネシア高校生(Senior High School of Ummul(ウムル) Quro(クロ), Bogor(ボゴール)): 16名
活動内容	(1)表敬活動 外務省表敬訪問: 1/30(火)東京都 元駐インドネシア日本大使交流会: 1/30(火)東京都 駐日インドネシア共和国大使館 歓迎会: 1/30(火)東京都 (2)歴史・文化理解活動 場内・草場プログラム 味の素川崎工場視察: 1/29(月)神奈川県 イオン歴史館視察: 1/29(月)千葉県 イオン埼玉羽生農場視察: 1/31(水)埼玉県羽生市 女子栄養大学訪問: 1/31(水)埼玉県東市 体験プログラム 藍染体験: 1/30(火)東京都 こけし絵付け体験: 2/1(木)群馬県北群馬郡 雪体験・餅つき体験: 2/1(木)群馬県沼田市 (3)交流活動 学校訪問・授業体験: 2/2(金)埼玉県東市 ホームステイ: 2/2(金)～2/4(日)埼玉県 フェアウェルパーティー: 2/4(日)埼玉県川越市

2016年度活動の様子(インドネシア招聘)
2015年度活動の様子(カンボジア招聘)
2015年の活動の様子(カンボジア招聘)
2015年の活動の様子(ラオス招聘)
2015年の活動の様子(ラオス招聘)
2014年の活動の様子(インドネシア招聘)
2014年の活動の様子(インドネシア招聘)
2014年の活動の様子(フィリピン招聘)
2014年の活動の様子(フィリピン招聘)
2013年の活動の様子(ベトナム招聘)
2013年の活動の様子(ベトナム招聘)
2013年の活動の様子(ミャンマー招聘)
2013年の活動の様子(ミャンマー招聘)
2012年の活動の様子(カンボジア・ラオス招聘)
2012年の活動の様子(カンボジア・ラオス招聘)
2012年の活動の様子(インドネシア招聘)



イオン1%クラブ ティーンエイジアンバサダー(高校生交流事業)

2017 年度活動の様子(インドネシア招聘)

http://aeon1p.or.jp/1p/international/highschool/asean/2017_indonesia_invitation/



諸外国との友好親善

ティーンエイジアンバサダー(高校生交流事業)とは

・「2016年 ジュニア・サミット in 三重」学生交流支援

中国での活動

アセアンでの活動

2018年度活動の様子(タイ招聘)

2017年度活動の様子(カンボジア招聘)

2017年度活動の様子(カンボジア派遣)

2017年度活動の様子(インドネシア招聘)

2017年度活動の様子(インドネシア派遣)

2016年度活動の様子(ミャンマー派遣)

2015年度活動の様子(カンボジア派遣)

2015年の活動の様子(カンボジア招聘)

2015年の活動の様子(ラオス派遣)

2015年の活動の様子(ラオス招聘)

2014年の活動の様子(インドネシア招聘)

2014年の活動の様子(インドネシア派遣)

2014年の活動の様子(フィリピン招聘)

2014年の活動の様子(フィリピン派遣)

2013年の活動の様子(ベトナム招聘)

2013年の活動の様子(ベトナム派遣)

2013年の活動の様子(ミャンマー招聘)

2013年の活動の様子(ミャンマー派遣)

2012年の活動の様子(カンボジア・ラオス派遣)

2012年の活動の様子(カンボジア・ラオス招聘)

2012年の活動の様子(インドネシア招聘)

2012年の活動の様子(インドネシア派遣)

● 2017年度活動の様子(インドネシア派遣)

● 実施期間及び参加者(日本からインドネシアへ)

[詳細はこちら](#)

実施期間	2017年3月12日(月)～3月19日(月)
参加者	日本高校生(筑波大学附属坂戸高等学校): 16名 インドネシア高校生(Senior High School of Ummul Quro(クロー), Bogor(ボゴール)): 16名 駐インドネシア共和国特命全權大使 石井 正文 氏 前駐日インドネシア共和国特命全權大使 ユスロン・イサ・マヘンドラ 氏 インドネシア共和国教育文化省国際協力企画局長 ディディック・スハルディ 氏 インドネシア共和国教育文化省中等教育部長 プルワディ・スタント 氏 ジェトロ ジャカルタ事務所所長 春日原 大樹 氏
活動内容	(1)表敬活動 インドネシア共和国教育文化省訪問 3/13(火)ジャカルタ 在インドネシア日本国大使公邸にて歓迎会 3/13(火)ジャカルタ (2)歴史・文化理解活動 ジェトロ インドネシア経済状況レクチャー 3/13(火)ジャカルタ イオンモール ジャカルタ ガーデンシティー視察 3/14(水)ジャカルタ インドネシア伝統舞踊体験 3/14(水)ジャカルタ パティックろうけつ染め体験 3/15(木)ボゴール ボゴール農科大学ディスカッションプログラム 3/15(木)ボゴール (3)交流活動 ボゴール ウムル・クロー高等学校訪問・授業体験 3/16(金)ボゴール ホームステイ (2泊) 3/16(金)～18(日)ボゴール・ジャカルタ フェアウェルパーティー 3/18(日)ジャカルタ



イオン1%クラブ ティーンエイジアンバサダー(高校生交流事業)

2017 年度活動の様子(インドネシア招聘)

http://aeon1p.or.jp/1p/international/highschool/asean/2017_indonesia_dispatch/

交流を深めた高校生たち



森林破壊、海洋汚染…
日伊の高校生で考えよう
持続可能な世界目指し

国連が掲げる「持続可能な開発目標（SDGs）」について日伊の高校生が意見を交換する「日本インドネシア高校生SDG8ミートイニング」が8日、中央ジャカルタの環境林業省で行われた。森林破壊や海洋ごみ問題、大気汚染などをそれぞれテーマに上げ、持続可能な世界を築いていくために何ができるかにについて話し合った。

日本から参加したのは、文部科学省がスーパードグローバルハイスクール（SGH）に指定した筑波大学付属坂戸高校（埼玉県坂戸市）の10人、中部大学春日丘高校（愛知県春日井市）の8人、インドネシアからは、ボゴール農科大（PBB）付属ゴルニタ高校など計6校が参加した。

坂戸高校、ゴルニタ高校、インドネシア環境林業省付属高校の3校は、「森を100年守るためにはどうすれば」をテーマに、西ジャワ州チアンジュール県の農村で1週間にわたるフィールドワークを共同で実施した成果を報告。ガイドブックを作成していることや環境保護活動をする地域の婦人会の支援などに取り組んだことを紹介した。

春日丘高校は、バリ島クタビータを例に海洋ごみ問題などを発表。春日井市では2009年からレジ袋を有料化している述べ、買い物のエコバッグの普及を促す「パティック（ろうけつ染め）のエコバッグを作れば人気が出るのでは、など」を提案した。

インドネシア人生徒からは「多くの人は目の前の安いポリ袋を使うと思う。エコバッグは高いと感じる」との意見も出たが、春日丘高校の生徒は「何度も使い続けることができるので良い目で見ると悪くはない」

いらなくなった服で作る「ともできる」と題した、同ミートイニングは昨年に初めて開催。2年連続で参加した坂戸高校3年の森本蘭花さん（18）は、ことし、リャウ州プカンバルの林業の専門高校に1年間留学をする。「前回はインドネシア人の温かさに触れ、ここでさらに学んでみたいと思った。こういった経験で林業に取り組んでいるのを知りたい」と話している。（上村夏美、写真も）

じゃかるた新聞 日本インドネシア国交樹立 60 周年記念行事特集

「日伊の高校生で考えよう 持続可能な世界目指し」

2018 年 8 月 10 日朝刊

自己を知り、描いた未来を確実に実現

持続可能なアセアン社会を創る人材育成

[illegible][illegible][illegible]

「リーターシップ研修プログラム」

[illegible][illegible]

多様な文化を理解し、尊重する

[illegible][illegible][illegible]

誰もが持つ
ーシップを引き出
株式会社イノベスト
原氏 × 曾我部 梨梨

「リーダ」

◀ 岡山

株式会社インフォスタは、教育機関の持つ教育の要素から、独自の教育方法を開発し、支援することを目的に創設。全国の大学はじめとする教育機関から依頼を受けている。

2005年の学習指導要領改訂に当たり、1年間の教育課程で深い学びに対する取り組みが期待されている。時代のニーズに合わせるように、同時にでは授業をアクティブな方法として、①教育目標を明確化する、②学びの意欲を喚起する、③学びの機会を確保することの3点を軸とし、教育機関の課題と課題解決に向けた事例を基に、ソリューションを提供している。

「リーダ」

◀ 岡山

株式会社インフォスタは、教育機関の持つ教育の要素から、独自の教育方法を開発し、支援することを目的に創設。全国の大学はじめとする教育機関から依頼を受けている。

2005年の学習指導要領改訂に当たり、1年間の教育課程で深い学びに対する取り組みが期待されている。時代のニーズに合わせるように、同時にでは授業をアクティブな方法として、①教育目標を明確化する、②学びの意欲を喚起する、③学びの機会を確保することの3点を軸とし、教育機関の課題と課題解決に向けた事例を基に、ソリューションを提供している。

誰もが持つ
「シップ」を引き出す

株式会社イノベスト
◀ 露山 諒氏 × 曾我部 聖賢氏 ▶

[illegible][illegible][illegible]

演壇に黒鷲の羽、生花、阿彌陀仏の像と「平和と福祉」の横断幕が飾られ、そのほか、生花の装飾が施され、厳かに始まるべく、大学入試等と並行して、初級検定・山田健策先生周忌祭の授賞式と記念式典を行う中で、黒鷲の羽の一つの材料となる。

日本では時代の変遷にともなう、戦時体制下の所

重する

[illegible]

[illegible][illegible]

し、以後に於ても、オランダに於ける商業の繁栄や植民地の事業を助むる」と云て、日本を三國の一と見て、親睦を結ぶこととせしめると、これより一世紀も前には、既に日本の政治の進歩や理解が著明な知識、オランダや東洋の事情や動向の把握からして、そして性質などに注目せられるのである。また、旧日の政治の進歩が著明な知識、親睦を結ぶこととせしめると、これより一世紀も前には、既に日本の政治の進歩や理解が著明な知識、オランダや東洋の事情や動向の把握からして、そして性質などに注目せられるのである。



© 2000 Blackwell Science Ltd *Journal of Internal Medicine* 247: 395–401

「フットボールは、子どもから大人まで、世界中で愛されているスポーツです。だからこそ、世界中の子どもたちに、フットボールの楽しさを伝えることが、私たちの使命です。」

ていふ。

今般ども本邦は諸大工、和漢の物として、
國內西にサマトラツトを建て、オランダの
ザツトを、佐賀、唐のものに、すべ本邦を
建て、いふ、そして、諸大工の協同して
船子と、舟料理と、これの、アヒツツ、を
置出し、つねに船の、船に、いふ、いふ、
ていふ。

DATA	
1996	1996年12月31日，中国人口总数为12.24亿，其中城镇人口为3.69亿，农村人口为8.55亿。
1997	1997年12月31日，中国人口总数为12.34亿，其中城镇人口为3.84亿，农村人口为8.50亿。
1998	1998年12月31日，中国人口总数为12.44亿，其中城镇人口为3.99亿，农村人口为8.45亿。
1999	1999年12月31日，中国人口总数为12.54亿，其中城镇人口为4.14亿，农村人口为8.40亿。
2000	2000年12月31日，中国人口总数为12.64亿，其中城镇人口为4.29亿，农村人口为8.35亿。
2001	2001年12月31日，中国人口总数为12.74亿，其中城镇人口为4.44亿，农村人口为8.30亿。

「この時代、西洋の文化の流入」に代表される
西洋文化、白人文化を軸に国際化を進める
国際化政策、これを軸として国際化の推進を
企業経営の理念とし、それに基づく経営活動を生
み出した企業が数多くある。インテルやアップ
ルの企業経営の中心にあるのが国際化に対する情
熱と世界市場を志向する姿勢である。その結果、
海外市場を統制している。このように、企業は

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

Figure 1. A schematic diagram of the experimental design. The subjects were divided into two groups: the control group and the experimental group. The control group received a standard training program, while the experimental group received a modified training program. The results of the training program were compared between the two groups.

「**同和を断つて民族復興をサツウ**」
 上野とトキオから見た日本の政治経済

[illegible][illegible][illegible]

インディアン・舞臺の裏面による
舞臺と演劇の事情

イ、第六の出版物は、その中に、ミヤサキ・ウィーランド、化学科で特許可能な新薬と、糖質をもたぬに効果的といふ新薬の作りかたといふものもみだり、当書はこのように、諸君の試みへの問題を、おぼろげに示してゐる。そのおぼろげは、

質と量との関係の正誤も知れ、それによつて、また、それの予知も可能にして、物質の量を量とられざるものに改むのである。

の輸出の増大、ジョージアに日本からの付加価値を付加するなどの政策が期待される。また、ロシアは日本への貿易の増大を自己利益として

教育シリーズ Vo.2 国立大学附属学校の先進教育 月刊『コロンブス』編集部 編
「SDGs に対応した協働型国際フィールドワークの開発」
2018 年 11 月 1 日発行 pp38-41

Kawagoe Guide Map for Muslims

~What can we do to Improve the Tourism??~

University of Tsukuba Senior High School at Sakado
Millie Fujino

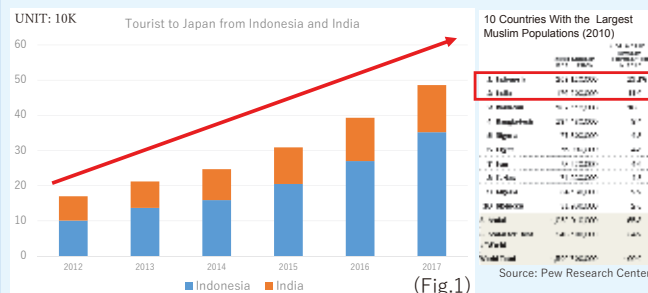
KEYWORDS: Muslim, Muslim-friendly, Halal, Tourism

ABSTRACT

The number of foreign visitors from Islamic countries to Japan is increasing. The focus of this research is to identify the challenges that Muslim visitors have encountered and suggest improvements for these problems. It was revealed that food choice and restaurant menus are some areas that they need help with. There are types of food that Muslims can't eat because of religious consideration and correspondence is not always easy for Muslims in Japan. Those kinds of problems have also been recognized by the Japan Tourism Agency.

BACKGROUND

It is a fact that the number of tourists to Japan is increasing. A significant number of these tourists are from Islamic countries. (Fig.1)



(This graph was formed on the basis of "J N T O 訪日旅行データハンドブック 2017" which was published by the Japan National Tourism Organization Established)

found that it was hard to order a dish that was suitable for their religious beliefs because there were no details about the ingredients.

started searching about their religious considerations
PROBLEM⇒ Japan was lacking that correspondence.

70% of the tourists have come expecting to enjoy Japanese dishes.

Tourism in Japan should be able to consider the cultural differences and practices of other countries to satisfy the needs of tourists who are coming to Japan.

SOLUTION⇒

- ask Japanese restaurants to have pictograms on their menu
- make a guide map to have easy access to this information about restaurants

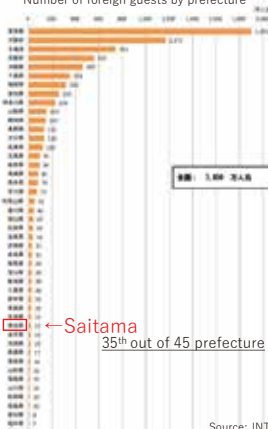
In any case, tourists who come to Japan will usually use the internet to get information. Although, if people search for Halal restaurants, there are only a few results. Nonetheless, based on my experience with my friends from Indonesia, they are still able to eat food in restaurants that are not officially Halal as long as there were dish options that did not include pork. It has a demand because if we were able to provide information about the dishes or restaurants that can not be easily searched online, it will make the stay of tourists in Japan much more convenient.

What is Kawagoe?

- filed of my guide map · city in Saitama
- many tourists who visit every year
- has tourist spots that are very popular
- still have room for improvement.



Number of foreign guests by prefecture



According to Halal Gourmet Japan, which is the biggest gourmet restaurant website for Muslims, it was revealed that in Kawagoe, there are **no official Halal restaurants**. However, there is one that is Muslim-friendly. The difference between these two is that Halal restaurants have permission from an official Halal corporation while the Muslim-friendly restaurants don't.

CONCLUSION

I found that it is important to respect individual differences and to have effective correspondence since all Muslims have their own ways of practicing. We have to remember that interpretation of teachings depends on sects, countries, regions, cultures and individuals. Any kind of religion could say the same. However, not all restaurants could have a perfect correspondence for them. But based on my experience and research, a simple scheme can help support better understanding of our differences. Also, not only restaurants but students and individuals should foster respect. So it is important for us to have correct knowledge and informed understanding about our neighbors.

ACTION



asked help from 30 restaurants to cooperate

15 of them happily agreed to help me

told the manager about my · research · problems · solution

asked them for help in putting a pictogram on their menu (which was also made by me)



Represents none pork.



Represents none alcohol

These actions can help improve Japanese Tourism because it is valuable for restaurants to have considerations for foreigners who want to enjoy Japanese dishes.

~Merits of making this guide map as a student~

- Found out that it is possible for us to help the Muslims to stay in Japan more comfortably
- Able to ask for help without putting pressure on the manager ⇒ there was positive collaboration
- Able to conduct a survey to the Muslim exchange student and got beneficial feedbacks

Questionnaire

What I asked about⇒ simplicity, merits, demerits, total score, whether this type of guide map is useful

Result⇒ average rate of 4.4 out of 5 at the total score

Also, since 10 out of 10 people answered that they want these guide maps to increase, and I have made improvements based on the suggestions, I can say that my guide map had become beneficial.

Through these actions, I was able to know that there are only few Halal restaurants in Japan and it is not easy to have a certification. But we could support the Muslims to live comfortably with these correspondence during their stay in Japan.

SGH推進委員会・執筆者一覧

田村憲司（校長）
深澤孝之（副校長代行、工業科）
小澤真尚（数学科、評価委員長）
今野良祐（地歴公民科、国際科、ユネスコスクール担当）
塗田佳枝（国語科、日本語支援担当）
斉藤真吾（理科、1年次SGクラス担任）
福田美紀（外国語科、国際科、2年次SGクラス担任）
吉田賢一（地歴公民科、国際科、3年次SGクラス担任）
藤原亮治（保健体育科、進路指導部主幹）
高畑啓一（地歴公民科、国際科）
石田光枝（家庭科）
建元喜寿（農業科、国際科、SGH推進委員長）

平成26年度指定 文部科学省スーパーグローバルハイスクール

「先進的な総合学科を活かした持続可能な アセアン社会を創るグローバル人材の育成」

（研究報告書 5年次 最終報告書）

平成31年3月発行

筑波大学附属坂戸高等学校

〒350-0214 埼玉県坂戸市千代田1-24-1

電話：049-281-1541

F A X：049-283-8017

本報告書に関する問い合わせ先：

建元喜寿（国際教育推進委員会委員長・SGH推進委員会委員長）

E-mail: fsakadokou@un.tsukuba.ac.jp